

竹山に暮らして

石塚 雅明

あ

第一回 ことのはじまり (一)

ここ竹山に暮らし始めてもう五年になる。

三十五年経営してきた事務所を、優秀な後継者に恵まれたことで事業承継をしたのが二〇一七年。それからご隠居を決め込み、今の暮らしがはじまった。仕事の傍ら事務所のホームページを企画編集しているS君から、「石塚さんも、何か書きませんか？ 得意のワークショップのノウハウ集でもいいけれど、せっかくなら竹山での暮らしとか。」と提案された。ご隠居暮らしはよほど暇そうに見えたのか、はたまた、昨今のコロナ禍の影響もあり引きこもりがちになった私の脳みそを案じてくれたのか。

ご隠居暮らしといっても、ここで生活するにはやらなくちゃならないことも多く、結構忙しいのだ。ただ、日頃ぶっきりぼうな物言いをするのは裏腹に、優しい気配りを絶やさないとS君からの提案なので、何かの気遣いかと無視するのも気が引けて少し考えてみることにした。

これまでの癖で、構成はどうするか、見出し小見出しをあれこれ考えてみたり。まあ、それくらいなら良いが、久しぶりに原稿用紙に手書きで書いてみようかとか、書くのは万年筆が良いかな、などと考え始める始末。なんだかんだって暇なのか。

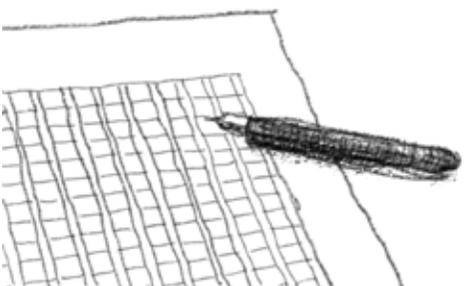
そうこうしているうちにだんだん面倒臭くなってしまった。

そもそも、なにか特別の思いを持つてこの暮らし始めたわけではない。単に偶然が重なってこんなことになっただけなのだ。これが、長年の夢がかなってリタイア後、自然に囲まれた田舎暮らしができるようになったというのであれば、書きようもあるがそうでもない。なんせ、結婚してからこのかた比較的大きなS市の都心から離れたことがなく、ついこの間まで、かなり古くなってしまったマンションを手放して人生最後の買い替えをしようと、まちなかの便利な場所ですらいろいろ物色していたぐらいだ。はたまた、現代の暮らしや経済のあり方に深い疑問をもち自然との共生や自給自足の生活を目指したわけでもない。それならそれで書くことはたくさんあるのだろうか。

それに、書き出すとどうしても暮らし自慢のような内容になってしまいそうなものも気が乗らないことのひとつだ。他人の自慢話につきあうほどつまらないことはないし、書き方によっては腹がたつこともある。そうならないように意識してもそうならない可能性があるのが、ここ竹山での暮らしなのだ。

まあ、あれこれ考えることはあるのだけれど、この最初に戻ればS君の私への気遣いなので、自分の脳トレと思って書いてみることにした。

書くにあたって筋立ては考えないことにした。思いつくことを流れに任せて書き綴るのなら今日にでも始められる。そのためには短文で区切りがつくのが良い。例えるとその道の方に失礼だが、新聞小説のボリュームで書くのが良さそうな気がした。それがこれになる。結果的に挿絵的なものを添えるという余計な手間が増えてしまったが。さて、どこまで続くものか。とにかく三回で終わるといふことにはしたくないが、果たしてどうなるか。



「石塚さんは今、どんなところに住んでいるんですか？」と聞かれると、常に「千五百坪の土地を手に入れて、森に囲まれた暮らしをしているんです。」と答えている。その「千五百坪」と言う時に、自分の鼻の穴がぷくつと広がってしまふのは、ご隠居としての悟りの境地には程遠いということか。

ところがこの「千五百坪」と「森に囲まれた」というのは実はあやしい。

土地を購入する時に言われたのは「千五百坪」だったが、契約の際に確認した登記簿によれば「千四百九十九坪」で一坪足りない。さらに境界測量の結果をみると「千四百九十八坪」で、ほとんど減ってくる。これでは「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と鼻を膨らませるのも憚られ、声も小さくなってしまふ。

この事態を神様がかわいそうに思ってくれたのか、電柱の立て込み工事に来た業者の作業車がぬかるみにタイヤを取られて脱出しようとした際に我が家の境界石を倒してしまうという事件がおきた。業者は早々に境界石の復元をしてくれたのだが、その際の測量結果がなんと「千五百〇一坪」となった。これで堂々と胸をはって鼻も膨らませて「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と言えるようになったという次第。

ちなみに千五百坪とはどんな広さかということで「東京ドームと比べるとどうなんですか？」と聞いて来た人がいた。試しに計算してみたら東京ドームの「〇・一個分」という結果。なんとも中途半端な数字なのだが、まあそんな程度ということ、この数字は使っていない。

もうひとつの「森に囲まれた」というのはもつと怪しい。

いわゆる地域森林計画に位置づけられた森林に面しているのは一面だけで、残りの三面のうち二面は人が住んでいるお隣さんの土地である。いわゆるポツンと一軒家とは程遠い。それでも家の四周は高木が茂り、ほとんど木々の緑しか目に入らない。気分は森に囲まれたとして嘘ではない。ただ、冬になるとほとんどが落葉樹なので木々の間からお隣の家が丸見えになる。それでも家と家の間は六十メートルくらい離れているので森に囲まれた気分はかろうじて維持される。

実は、この土地の購入の決めてとなったことの一つにS市の都心の自宅から車で高速道路を使えば三十五分を着いてしまうという手軽さがあった。いろいろ周りの環境を知るにつけ、スーパーは車で二十分ほどの範囲に大小六件もあり、おまけに同じ範囲に大規模なアウトレットモールもある。我が家に欠かすことのできない品揃えのセンスが良い酒屋も二件ある。歩いて行ける距離には鹿肉専門のレストランや、美味しいハムやソーセージを入手できる店、それに絶品のパン屋もある。さらに言えば国内外に一飛びの空港も三十分ほどで着く。そう、極めて便利なところなのだ。

そんなところで「千五百坪の森に囲まれた(気分になる)暮らし」ができることになろうとは。

きつかけは、隣家の友人のひとこえだった。



第三回 ことのはじまり (三)

もう六年以上前だったと思う。そのころ家族ぐるみで親しくさせていただいた妻の友人のお宅に、年に何度かお邪魔させていただいていた。別荘のように使われていたけれど、とても広い庭に色とりどりの草花をセンス良く配し、赤白の葡萄の棚や、栗やプルーンなど実のなる木もたくさんあり、「なんとかの庭」という趣だった。おうちもさすが建築家と思わせる品のある佇まいで、とても心地よい時間を過ごさせていただいていた。冬に訪れる鳥たちを間近に見られるのも驚きだった。

そんなお宅を訪ねたのはちょうどゴールデンウィークの頃だったと思うが、ご主人が突然「隣の土地が売りに出ているみたいだけど、ここは市街化調整区域なので資材置き場か廃車置き場などにされたら困るんだよね。石塚君、買わない？」と。

それが今暮らしている土地なのだが、その時は、どうも話の筋が自分ごととして思えなかった。確かにお隣が資材置き場などになったら、それも地形的に一段低い土地なので見下ろせば丸見えになり困るだろうけど、それで困るのは私ではない。笑ってすまそうとしたが、なんせ暇なゴールデンウィークの時だったので、敷地を探検しようということになった。他人の土地に勝手に入るのだから探検ごっこで済まされることでもないのだが、とにかく背丈ほどある草が鬱蒼と茂っていて人は住んでいないのは明らかかな荒地で、まあ、いいだろうということになってしまった。

入ってすぐのところは笹藪で、大きな木が何本も生えていた。なかには朽ちかけた大きな木もあり探検感はかなりのものであったと記憶している。その先には春先だったのでよもぎがいっぱい生えていたが、同時にガマの姿も増え始め、足元は一步踏み出すとズブッと沈む状態に。要は完全な湿地状態。地面に目をこらすと水たまりがあちこちに見え、油のような虹模様の膜が浮かんでいた。かなり遠くには、屋根が落ちかかった廃屋があるのも見えた。

もし仮に私が買ったとしても、資材置き場か廃車置き場にすくらしいか思いつかないような、そうするにしても大変そうな土地で、ましてや住むなどということはとても考えられなかった。それなのに、お隣に住んでいるご主人の妹夫妻も「住まなくても、いろいろな楽しみ方がきつとできるよ。」と無責任に加勢してくる始末で、まるで原野商法の押し売りにあったようだった。

その後も、そこを訪ねるたびに「買おうよ」「また見に行こうよ」と誘われ続け、ある日「先日、建設業者のような人が見に来ていたので聞いたら、ログハウスの資材を置く場所を探しているって言うていた。いよいよ危ないね。」と。危ないのはこっちなのだが、とりあえず、敷地に立ててあった不動産屋の看板の連絡先に電話をしてみるようになってしまった。

会って話を聞いてみると、広さは千五百坪あり、市街化調整区域の指定前に建った家があるので、今でもその面積の一・五倍までであれば建物をつくることができ、住むこともできるとのこと。



第四回 こののはじまり(四)

その土地には最初の春から、夏、秋と何度か冒険侵入したことになるのだが、その間、話を持ちかけた夫妻が離れとして使っていた小さな建物をゲストハウスとして使わせてくれたのも良かった。あいかわらずひどい湿地なのだが、季節毎に表情をどんどん変えていく姿をじっくり観察することができたのは新鮮であった。いつの間にか訪れるのが楽しみになり、秋には、まだ名前も知らない草花を両手いっぱい摘み取り、大きな花瓶に差している自分に驚いた。

私より冷静な判断ができる妻も、どうも気持ちが傾いて来たようで、土地を見に行くだけでなくS市の植物園のなかにある湿地園と一緒に見に行ったりして、湿原を楽しむシミュレーションをするようになってしまった。

私としてはそのころ、たまたま仕事で伺った小さな村や町で、大変だけれど楽しく誇りを持って暮らしている方々にたくさんお会いすることがあったのも背中を押すことになったのかもしれない。

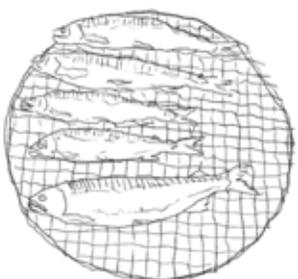
T村を訪ねた時の話も忘れられない。酒席で副村長から「まちなかの便利なところに移住促進住宅の分譲をはじめたが今一つでどうしたものか。」と投げかけられた。酒の勢いもあって「村の良さに惹かれて住もうとする人は、まちなかの便利などなど求めていないと思う。もつと自然に囲まれた・・・」と決めつけてしまった。そうしたら副村長「それなら石塚さん、二万坪の土地があるけど買わないかい。川も流れているよ。」と返してこられた。「そんなお金は・・・」と尻込みすると、「二万坪、二千万円でどう。」と畳み掛けられた。清水の舞台から飛び降りるつもりで有り金叩けばまったく手が出ない額ではないのにびびくりした。もちろん買いはしなかったが。

隣人の隣人、つまり話を持って来たご主人の妹夫婦だが、その存在も大きかった。何度か会ううちにとても人柄の良いお二人で気に入っていたのだが、ある時、ご主人が「川で鮎を釣って来たので、一緒に食べませんか。」と声をかけてくれた。鮎は香魚とも書くが、天然の鮎はひと噛みすると香りが口から鼻へといっぱいに広がり、思わずため息が出る美味しさだった。妻と「この土地を手に入れると、毎年、鮎を食べることができるとかな。」と頷きあったのが思い出される。

価格交渉をしたら一千万円を切るまでになったが、決して安い買い物ではない。それも野遊びのために。

だが、ほどなく購入することを決めてしまった。今から思えば、なぜ、こんな荒地を買うなどという決断をしたのか不思議である。が、そういうことになってしまったのだ。いろいろ決断の理由をあげてみたが、どれも決定打と言えるものはない。将来の暮らしを冷静に比較検討した結果とか理詰めの判断ではなかったのは確実だ。きつと、私たちの心をぐつと捉えて離さない何かがあったのだらう。

この決断が重要な意味を持っていたことを気づくのはもう少し先になるのだが、その話はのちほど。



第五回 作業小屋からずっと(一)

土地を購入したのが十一月の末だったので、冬の間は野遊びをおあずけにして、春になったらどう楽しもうか妄想に浸ることにした。

今までのように友人に甘えてゲストハウスを都度貸していただくのは気がひけるので、ちよつとした作業小屋を建てようということになった。幸いにしてここは市街化調整区域の指定がされるまえに住宅用に建物が建てられていたので、住宅が建てられる土地なのだ。

まず、作業小屋は土間がいいねということになった。

当然、手を洗ったりする水は必要だし、

お茶を入れる程度のお湯は沸かせた方がよい。

トイレもいちいち隣に借りに行くのも悪いし

六十メートル離れているのも不安なので必要だよね。

毎回、日帰りも慌ただしいので

泊まれるように簡単なベッドも会った方がよいね。

外作業をして汗をかいたまま寝るのはどうかな

シャワーぐらい浴びられるようにしたいな。

泊まった時の食事はどうする?。

こうなってしまうたら考えは後戻りできなくなり、急なメールがきたり、資料をつくらなければならなくなった時のために、小さくても良いから仕事スペースが欲しいとか、やれ冷蔵庫はあった方が便利だとか。

自然に囲まれて野遊びを楽しめる小さな作業小屋というイメージはどこかに消えてしまつて、気がつくともちなか暮らしの便利さをそのままコピー&ペーストしたような立派に「家」になつてしまった。それに、いなが暮らしの本に出て来そうな薪ストーブ、それもオーブン付きのが良いなどと、料理をつくりもしない私が言い出す始末。

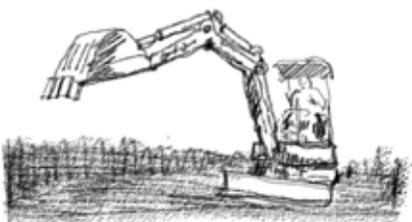
妻は、しきりに「こんな湿地に家を建てるなんて身体を壊すのじゃないか。」と心配したが、「週末に立ち寄るだけだから」と説得した。

それでも、なんでも一人大工の知り合いに土地をみてもらつたら「まず、中古のユニボを買いなさい。そしてできるだけ多く暗渠排水を入れなさい、それからだね。」とのアドバイス。野遊びをするにしても、それだけ手強い土地だということだ。妻は、私が「ユニボ」のところで目がキラッと光ったのを見逃さず「そんなもの買って、いったいどこに置いておくの。」と釘をさされた。ただ、頭の中ではユニボなる小型重機を自在にあやつりながら溝を掘り、暗渠排水を埋めて行く自分が見えていたのである。

なんせ、土地は千五百坪あるので、どんなに建物が大きくなっても敷地に収まらないということはないし、建物も自分が良ければいいので徹底的にローコストでいけばなんとかなる。

と、思っていた。

それが大きな間違えであることに気づくのにそう時間はかからなかった。



妻は長年自分で建築設計事務所をやっていたので、私が考えていることに無理があると薄々気づいていたと思うのだが、ここで水を差してはかわいそうと思ったのか、成り行きを見守る姿勢でいてくれた。

それでも、市街化調整区域がこの土地には住宅を建てる事ができるといふ証明書をもらうにあたっていろいろ調べてくれた妻の顔つきが険しくなってきた。

ここに住宅を建てた人は、千五百坪のうち百坪を建築敷地として建てたので、新築することはできるがその敷地はその百坪の範囲に限られるというのだ。千五百坪のどこに建てようかといういろいろ妄想していたのが一挙に現実引き戻された。

さらに悪いことに、その敷地は公道に面していなかったのだ。道のように見えるが細長い私有地で、それもたくさんの方の共同名義になっているというのだ。その私有地は「みなし道路」とされていて、建物を建てる際に敷地は道路に接していなければならぬという条件には適合するのだが、公道ではないのでそこを通行して良いかどうかは土地所有者の同意をもらわなければならないというのだ。そこが使えないとなると公道に面したところからその敷地まで自分で道をつくらなければならない。一大事である。

幸い私有地を所有されている方はみなさん親族で、窓口になっていた方が工事やその後の通行に使ってかまわないと言っていたので事なきを得た。ただ、工事用道路として使うには重量車両に耐えられないこともわかり、こちらで二百メートル分の道路の舗装工事をしなければならなくなった。

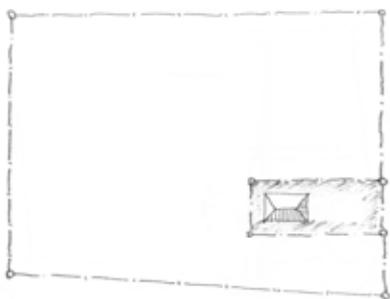
さらに地盤の調査をしたら、杭を打たなければならぬ状態だそう。作業小屋と思っていたのが、杭を何本も打つ豪邸のような建物になってしまった。木造のほとんど平屋の建物なのに。

さらにこれはすでにわかっていたことだが、その廃屋には上下水道も電気も来ていない。水道の本管までこれも二百メートル自分で管を埋めなければならない。下水はちゃんと浄化槽を通した水でなければ川に流すことができない。電気は公道までは電柱を建ててくれるのだが、そこから敷地まで距離があるので敷地内に自分で電柱をたてなければならぬとのこと。

後々、建築の計画が固まって工事費の見積もりをとったら、建物本体はローコストで頑張っても、目に見えないところに思わぬお金がかかることがわかった。妻曰く、「この目に見えないところの工事費で、ベンツが買えたね。」

とりあえずその年は、雪のなかにぼつんと建っている廃屋の写真を撮ることにした。廃屋はその冬の雪で潰れてしまってもおかしくないくらいの状態だったので、確かにそこに住宅が建っていたという証拠写真を残しておかなければ、市街化調整区域で建物を建てることもできなくなる可能性があったのだ。

そして正月休みは、ちよっと夢がしばんだが、いろいろアイデアを出し合い妻が図面を引き、私は模型をつくることに費やした。



第七回 作業小屋からずっと(三)

プランを考えるのは楽しかった。

なかでも敷地にどのように建物を配置するかは結構考えた。土地は東西を対角線にしたほぼ正方形。その東隅に近いところに建物を建てられる敷地がある。その場所から土地の木立をもっとも広く見渡せるように北西に面して南北に長い建物にしてみた。北や西に面して窓を大きく取るのは住まいとしてどうかとも思うが、そのことによって太陽の光をいっぱい受けた木立を見ることができるとだ。建物の向きを決めたもうひとつの理由は、小さな二階の作業部屋からE岳を真正面に見えるようにしたかった。航空写真などを手がかりに窓が面する角度を割り出したりした。建ってみるとびつたりの角度だったのだが、山を見る視線のちょうど途中に常緑のトドマツの太木があり山を隠してしまうことがわかった。計画的配置といっても、私の場合はその程度ということか。

建物のプランもいろいろ考えてなかなか決まらなかったが、その都度、家具付きのドールハウスのような模型をつくって検討した。家具はテーブルや椅子はもとより、私にとつては重要な薪ストーブと煙突まで細々とつくってしまったのだ。その時間が楽しかったのは言うまでもない。

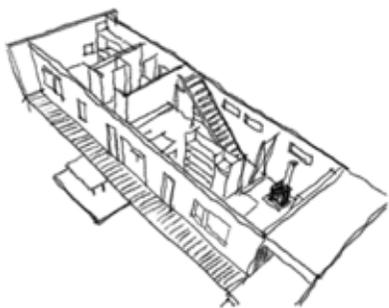
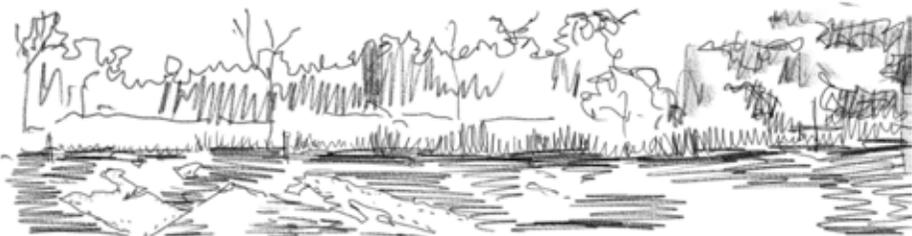
最終的にほぼワンルームのコンパクトな平家にもちよこんと二階が乗ったかたちに収まったが、結局、作業小屋からずっと住めそうな家になってしまった。建築費もまっとうな額になってしまったのは言うまでもない。老後は便利なまちなかのマンションにと思つての蓄えを全て放出してしまったのは、今から考えると大胆な決断だったのだが、何かに憑かれたかのように工事契約書に判を押してしまった。それがどのような意味を持っていたのかを気づくには少し時間がかかるのだが。

なんだかんだったけど、雪解けと同時に工事が始まった。

工事で重要なのは敷地の排水だった。以前住んでいた方も排水には苦労していたようで家の近くに素掘りの溝が川につながる側溝まで引かれていたが、それが役に立っていた感じはまったくなかった。よく敷地を調べると、それとは別に敷地側に立派な側溝跡が見つかった。跡と書いたのは、長い間放置されたことで、すっかり土砂に埋まって水路の役割を果たしていなかったようだ。その側溝は隣の敷地の側溝とつながっているのだが、高低差が三メートルほどあるので隣から流れ落ちた水が私たちの敷地に広がってしまったのだ。

工事をしてくれた人の話では「土砂がまるで扇状地のように広がっていたよ。」とのこと。その例えで言えば、家を建てようとしたところは扇端から先の低湿地になる。妙に納得。

側溝はもとの材料を生かして見事に復元され、ずっとそこにあつたように風景に馴染み、流れる水も綺麗だった。でも急に敷地の水が引くわけではなかった。建物の工事が始まった時に見に行ったら、建てる場所を示す目印杭が水浸しの泥のなかにぼつんとあつたのは、今でも鮮明に覚えている。でも、ここまで来れば先に進むしかなかった。



十月十七日ようやく建物が完成し引き渡しとなった。その前の確認検査では外壁の板に大きく欠けた部分が見つかり、なんとという工事の仕方かと腹がたつたが、あとでご近所に聞くとキツツキの作業だったとわかった。向こうにしてみればナワバリに断りもなくつくられた大きな箱を調べてみたということなのだ。飛んだとぼちちりを受けた工事業者さんには申し訳なかった。引き渡し後に、新築特有の匂いを避けて換気のために窓を開放していたら、突然、一羽の小鳥が部屋に飛び込んできて大騒ぎになった。幸い壁に激突することもなく無事に外に戻って行ったが、確実に彼らの世界に侵入したのはこちらだと実感させられた。

このほかにも完成までは色々あったが、それはおいておこう。とにかく完成したのだ。

ただ、やることはいろいろあつて、まずしなければいけなかったのは、フロアリングのワックスがけだった。とにかく工事費用を切り詰め自分たちでできることはやるという方針だったので、がらんとした部屋に買ったばかりの布団を敷いて、三日がかりの仕事になった。

ダイニングテーブル作り、カーテンレールの取り付けなど細々としたことがあるいろいろあり、それらはみな週末作業だったので、なんとか落ち着いたのは一ヶ月半後ぐらいであった。

もう十二月も半ばになり、そろそろ雪の季節かと思つていたらドカンと来た。S市の街中も結構積もつていたが、除雪が行き届いていて車は動かせたので、週末は竹山でと来て見ると六十センチの積雪で、幹線道路から家に行く道はとも車で行くことができない。隣家の友人宅に車を置かせてもらつて、家まではパウダースノーをラッセルしながらようやくたどり着くことができた。翌日は晴れて時々雪が降る程度に収まったが、とにかくやらなければならないのは雪かきだ。

だが、とにかく広い。悪戦苦闘していると見かねた隣の見知らぬ方が小型のユンボで助けてくれた。このSさんかなりの高齢とお見受けした。住人ではないのだが、長らくここで働いていて昔のことも詳しく、あとあといろいろなことを教えてくれることになる。

幹線道路から家までの二百メートルの道の除雪まではさすがに手がでなかつたが、ここは、隣近所で除雪組合をつくつていて、市から除雪のための補助をいただき自分達で除雪業者をお願いする仕組みになっていた。さっそく組合に入れていただき。ほどなく、大型の除雪車がやってきてくれてなんとか車も動かすことができるようになった。

十日後に竹山に来た時も、また車が雪で立ち往生してしまった。これでは来年早々に四駆の車に買い換えなければならない。

また、お金がかかる。

そんな感じて最初の竹山の日々は始まった。



第九回 最初の竹山の日々(二)

そんな竹山の日々は、たいへんなことばかりではなかった。

当初の作業小屋のイメージが残っているのは、玄関から入ってすぐの八畳ほどの土間だけだが、そこに薪ストーブをおいた。それもオーブン付きで料理ができる。窯開きは十二月三十日で丸鶏と芋を焼いてみたが、これがなんとも程よい火の通り具合で美味しかった。窓から外を見ると木々の枝ひとつひとつに新雪がのり一面真っ白な世界が広がる。土間には薪ストーブの炎がオレンジ色の光をゆらゆらと落とす。そんな風景に浸りながらワインと鶏肉を味わう時間がゆっくり流れる。

翌日の大晦日には、くるみ入りのパンを焼き、またワインをおともに豚肉のソテーと野菜を煮込んだスープで、はじめての竹山での年越しをした。

年が明けてもすぐ帰る気にはならず、長めの正月休みをとって九日まで竹山にすることにした。

年末から雪混じりの日が続いてきたが、二日になってようやく暖かな日差しが訪れた。それを待っていたかのように小鳥があちこちの枝を行き来しはじめ、雪原をエゾリスが横断するのを目にすることができた。小鳥たちはせわしなく飛び回るので、その種類を見分けることは難しかったが買ったばかりの鳥類図鑑と双眼鏡を駆使して、コガラとカケスとアカゲラは何とかわかった。今から見るとコガラとしたのはハシブトガラではなかったかと思うが、まあ、そのような間違えはその後山のようにある。

鳥はまだまだだが、木となるとさっぱりである。これは絶対に間違いないと言いつけるのはシラカバぐらいで、あとは、小さな木と大きな木ぐらいの見分けしかできない。私でもわかる木は庭木か街路樹に使われる木で、そのような木はほとんど見かけないのだ。それに、葉を落とした冬であればなおさらだった。それでも、風が通り道にあたった枝からサラサラとした雪の小さな雪崩が舞い散る姿は見ていて飽きなかった。それはまるで誰かがいたずらして枝をゆすって雪を舞わせているようで、それも気まぐれに、あちらの枝、こちらの枝と目の前の雪原を遊び歩いているようだった。

風といえば、北風なら北風で、一方向から吹き続けるイメージがあったが、ここではそうではない。まるで意思をもった生き物のように不連続に動き回るのである。これが春になって草木に葉が繁ようになるともっと不思議な風に出会える。本当にひとつの葉っぱだけが、まるで手を振っているように激しく動くのである。他の葉は微動だにしないのに。

朝起きて雪原を見ると、家の近くまで動物の足跡が残っていることもあった。当時は足跡で誰が来たのかなんてわかるはずもなかったが、足跡を見ただけでちよっと興奮していたのを思い出す。

近くのゴミステーションといっても家からは五百メートル離れていてそれも坂道なのだが、買ったばかりのソリにゴミをのせて、帰りには自分たちが乗って滑り降りる。そんなことをしていたらあっという間に帰るときになった。



第十回 最初の竹山の日々(三)

次に竹山に来れることができたのは、ほぼ二週間後であった。

道路や家の周辺の雪は十センチほどで除雪はそれほど大変ではなかったが、今度は寒さだった。翌朝の最低気温はマイナス十八度で、そこまできると普段は賑やかな小鳥たちの姿もほとんど見られず、シジュウカラが二羽来たぐらいでシンとして凍りついた静かな風景だった。

S市のまちなかではあまり記憶にない寒さだと思っていたら、二日後の朝にはマイナス二十一度まで下がった。晴れた日の朝は、放射冷却現象とかで気温がグッと下がるのだ。

そのかわり、厳寒の快晴の朝空はどこまでも透き通り、遠くの山並みが朝日を浴びてくつきりと普段より大きく見渡すことができた。

あまりの寒さに怖気付いたわけではないが、次に竹山に来れたのは翌月の半ば過ぎで、三週間以上たつてからであった。冬場、それだけ家を空けているとすっかり冷え切ってしまったてなかなか暖まらない。ようやく家が暖まったのは二日後だった。その日は朝から快晴で、部屋の中に陽が低い角度で差し込みそれが家を暖めてくれた。天気が良いとお客さんも賑やかだ。大きな窓の前をキタキツネが悠然と横切っていた。普通、人の気配を感じ取るとサツといなくなりそうなものだが、ちらつとこちらを見てもまるで何も見なかったようにゆっくり堂々と歩いて立ち去っていった。まあ、こちらの主はそつちななかから当然か。その日は、アカゲラとシマネガが同時に居合わせたりするのも目にすることができた。

私たちも、天気の良いさに誘われえて隣家の友人から新居祝いにいただいたスノーシューを履き初めすることにした。敷地内をぐるっと一周するくらいだが、それでも結構汗ばみ身体が暖まる。よく見ると、斜面の雪が溶け落ちて土が少し顔を出しているところがあった。本格的な雪解けはまだ一ヶ月以上先になるが、それでも少しずつ季節が変わりつつあるようだ。前回来た一月でいえば元旦の日の出が午前七時三分で、日没が午後四時十二分で、太陽の南中高度も二十四度と低かったのだが、この二月十八日では、日の出が午前六時二十六分で、日没が午後五時一分と太陽が出ている時間がかかなり長くなったし、南中の高度も三十五度と高くなっている。一年の半分近くを雪と寒さに閉じ込められる地域にとっては、そのようなわずかな差でも、また、春に一步一歩近づいていると気持ち膨らむものなのだ。

もちろんS市のまちなかにいても、太陽の光が力強さを増しているのを感じられるのだが、竹山に居るとそのことが、生き物たちの動きや場所による雪の融け方などかすかなことからからも感じられる気がした。

そんなことを感じることができた二月だったが、結局、竹山に来ることができたのはその四日間だけだった。一月は正月休みを長く取れたので十二日ほど居れたのだが、二月は年度末が近いせいか出張が多く十一日間それに取られてしまったのだ。



当初の構想は、週末の息抜きに野遊びができる土地を手に入れ、小さな作業小屋もつくって外を眺めながらお茶を楽しむことができればという程度のことだったのだが。どこでどう魔が差したのか。いつのまにか最後の蓄えを使い果たしてまっとうな住宅を建ててしまった。

そうならなかったで週末だけではもったいない。できるだけ長く竹山に居たいと言う気持ちが大きくなったわけだ。実際問題として、厳寒期などは週末に訪れても除雪にかかる時間はけっこうなもので、また、冷え切った部屋が暖かくなるのを待つだけで貴重な一日が過ぎてしまう。そして、ようやく落ち着いたと思ったらもう帰り支度をしなければならぬ。

確かに竹山のこの土地は、ちょっと野遊びで訪れるというのではなく、しっかり腰をすえて日々の風景に目を向ける余裕がないと味わえない魅力があるのは事実だ。

できるだけ竹山に滞在する時間を長くしたくて、竹山オフィスの日というのを勝手に決めることにした。そうすると出張に向くにしても、S市の自宅より高速道路や空港へのアクセスが便利で合理的でもあった。出張の帰りもまちなかのマンションに戻るより、静かで清涼な空気と暗くなりかけた空に木々の黒いシルエツトが浮かび上がる景色が出迎えてくれるほうが疲れが癒えた。ただ、良いこともあればそうでないこともある。

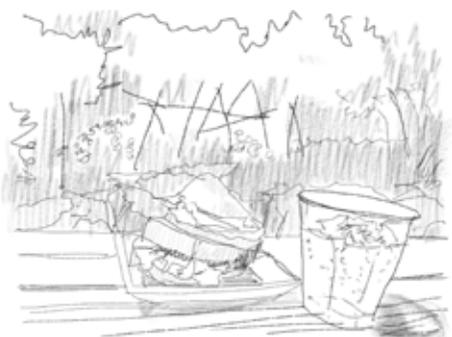
竹山にはラフで自由な服装でいきたいのだが、その足で出張となるとそれなりの服装を持参しなければならぬ。竹山にお気に入りのジャケットを置いておくことにしたら、今度はS市に居るときにそのジャケットがないので慌てることになる。それに着替えの問題もある。

妻は食材の問題に頭を悩ませていた。食べるだけのこちらにはわからないが、その時の滞在日数に合わせて食べられる食材をキープし、自宅のマンションの冷蔵庫の管理もするのは相当苦労したようだ。フードロスに敏感であればなおさらである。

いわゆる二地域居住の部類に入るのであるがどうも違うようだ。夏の間はこちらで、冬になればあちらでというようなスパンで滞在できれば違うのかも知れないが、一週間の間であちらとこちらというのでは、あまりに慌ただしすぎる。それに三、四日の出張が加われば短期三地域居住の状態になってしまう。その合間に竹山でしか味わえない生活をと欲を出そうものなら忙しいことこのうえない。何か田舎暮らし的なことをしたいと思って竹山に居るわけではないが、時間に追われると、ついあれこれしちゃう。

ゆったりとした時間を楽しもうと思っていたのが、かえってあわただしくしてしまっている。完全に目的としたこととやっていることが逆転してしまっている。

そう気づいたときに訪れたのは三十五年経営して来た会社を後人に譲るという事業だった。



会社の事業承継については、随分前から考えていたことだった。幸い私は良きスタッフたちに恵まれていた。そして彼らに経営をバトンタッチするならば彼らが四十代早々のタイミングでしなければならぬと考えていた。それは私が六十五才になるときだと。

なぜ、彼らが四十代早々の時期に事業を譲らなければならないと考えたのか。その理由の第一は若くなければいけないということだった。私が友人のYと事務所を立ち上げたのはちょうど三十才のときであったが、特にどこかの事務所でノウハウを学び独立したということはなく、ほとんど学生から起業したようなものだった。正直、都市計画や建築設計の専門的知識や実務経験は無いに等しかった。ただ、学生時代の十年間近くを歴史的街並みの保存のための住民運動の支援に費やしてきた体験だけが総てであった。それでも、依頼を受けた仕事ひとつひとつを一から考え、自分たちなりの解にたどり着くまで、膨大な時間を調べ考えることに費やすことができたのは、若かったことにつきる。

また、経営的に苦しい時期にも、未経験の分野でありながらその分野では先進的な取り組みをチャレンジすることができたのも若かったからできたことだと思っている。

当時、六十五才になってもまだまだ現役でやれる自信はあったし、それまでの成果を評価していただきご指名いただくこともまだまだあったし、新しいチャレンジも怠らなかつた。しかし、そのまま七十とか七十五とかまで私が経営を続けたとすると、後継者たちは五十を優に過ぎてしまう。その年になると、それまでやってきたことには円熟味を増すであろうが、失敗を恐れず自分なりの新しいチャレンジをすることが難しくなってしまうのではないか。仮に失敗したとしても、それを糧に再び立ち直す体力、気力があるだろうか。また、社会状況が大きく変わるなど時代の転換期に遭遇した時に、それに柔軟に対応して乗り切ることが出来るだろうか。

そのように考え、事業承継のタイミングは私が六十五才になる時と決めている。そのためにはバトンを受けても良いと思ってもらえる経営状況と実績をつくる必要があったが、それに最後の十年を費やした。

幸いにして、優秀な三人のスタッフに共同代表というかたちでバトンタッチをすることができた。三人はそれぞれに个性的で、得意とする分野や持っているネットワークが異なる。それをひとつのかたちに束ねることができれば私にはできなかった新しい道を開いていけるのではないか。そんな思いでの事業承継だった。

正式なバトンタッチは私の誕生日に合わせて六月末とした。七月に入ると恒例の事務所旅行をかねてスタッフがそろって竹山に来てくれた。天気にも恵まれ敷地の中を案内したり、竹山での暮らしの様子を話したりして時間を忘れた。いい加減酔いが回った頃、事務所を引き継いで来れたN君がぼつりと「石塚さん引退するって本気なんですね。竹山に来てそう思いました。」と言った。



N君には申し訳ないが、代表を交代した後も私は顧問という肩書きで経営の相談にはのつていた。仕事も私が関わった方が良いと思われるものには現場や打ち合わせに積極的に出向いていた。私としては、私が元気なうちには現場だけ自分の進め方やノウハウを現場をつうじて伝えておきたいという気持ちがあったからだ。それが大きな間違いであることに気づくことになる。

基本的には彼らが中心になって進められるようにしていたつもりではあるが、クライアントとの打ち合わせで方向性が行き詰まった時などは、クライアントの視線が自然と私の方を向いてしまい、そこでの一言で方向性が決まってしまうことがおきる。また、論点の整理も私が図解するとスムーズに議論が開する。その時はこういう場合はこう考えると良いと後人に伝えているつもりでも、そういうことが続くと、彼らの試行錯誤の機会や私とは異なるアプローチの可能性を奪っているのではないのかと考えるようになった。

社会はどんどん変化しているし、それに伴って私の経験はどんどん過去のものになってきているはずだ。それを伝えたいって次の世代の可能性を閉ざしてはいけない。そんな思いが強くなり完全に現場から退くことを決めたのが八月で、いろいろお世話になったクライアントに共同代表と伺い、引退の挨拶をさせていただいた。

正確にいうと、どうしても私ご指名の仕事数本と、研修講師については続けることにしたが、それ以外は完全に手を引いたし、口も引いた。おかげで月のほとんどを竹山で過ごすことができるようになった。

その判断が正しかったことはすぐにわかることになる。彼らは経営スタイルをオープンに変えて全てスタッフ全員の合議で進めることにした。それは、私の目からすると経営判断のスピードが低下し、決定の責任の所在が曖昧になってしまっているのではないかと思ったが、彼らはひとつの信念としてそれをやり通した。確かに最初はぎこちない話し合いだったが、そのうち気がつくことスタッフの自主判断、自主提案の機会が増えていっていると感じられるようになった。

また、働く時間も自由裁量制を取り入れ、スタッフに時間の自己管理を促すようにした。何かと打ち合わせや現場調整が多い業務の生産性を高めるために、大胆に週休三日制を宣言しそのうち一日をデスクワークに集中できるようにしたりした。そして一年足らずで若い有能なスタッフを何人も迎え入れ、その分、私の頃より売り上げも順調に伸ばしていったのだ。

そんな彼らのチャレンジは、売り上げ云々よりこの新型コロナウィルスによるパンデミックという事態に力を発揮している。私たちの方法論として、様々な対話をつうじて課題解決の方向性や、課題を解決する力そのものを生むというのが柱にあった。その機会が閉ざされようとした時に、チームワークでリモートによる対話システムを構築し、一方でコロナ禍における直接対話の方法もつくりあげてしまった。そしてリモートワークへのシフトに際しても、それまでに培われた自主判断、自主提案の力が大きな役割を果たしていると言える。



バトンタッチがうまく行ったと実感できるのは先のことになるのだが、八月にお世話になったクライアントの方々に完全に引退することをお伝えして回った時に、何人かの方からは、後継を信頼して全てを託して身を引いたことを評価していただいた。企業の大小の違いはあるが、引退したといっても引き続き経営に口を出し、それが企業の革新力を失わせている例は少なからずあるようだ。

対外的に引退を宣言したあと、その年度いっぱいには、新経営陣のチャレンジに目を細めたり、眉をしかめたりしながら、残った現場に関わっているうちに時間は過ぎていった。ただ、年度が改まると状況は一変した。

やることがパタリとなくなったのだ。

そして引退してわかったのは、ひとは他者をつうじて自己確認することができ、生きていることも実感できるのではないか、ということだ。誰かがそのひとを高く評価してくれている。誰かがそのひとを必要としてる。誰かがそのひとに感謝をしている。誰かがそのひとが居てくれることで心が安らぐと言ってくれる。誰かがそのひとに会うことで笑顔を浮かべる。どんな些細なことでも、他者という鏡に映ることで、自分の存在を確認することができる。そう感じたのだ。

もちろん他者を介さなくても自己確認できる力のある人はいるだろう。ただ、自分を振り返ってみると他者から評価されているという実感が、自分という存在がいることを確認できることに強く繋がっていると思われる。特に、長年にわたりまちづくりの仕事に関わってきたからおさらなのかもしれない。もちろん、まちづくりは私一人で何かができるわけではなく、そこには多くの人々がそれぞれの力を発揮することでまちはより良いと思われる方向に変わっていくのであるが、不遜かもしれないが、そこに私に関わるることによってはじめて何かが生まれたと感じることが少なからずある。それが私を支え、私が生きてそこに存在することの証として認識できたのではないか。

その機会がパタリとなくなったのだ。そのことが私を非常に不安にした。息が苦しくなる感覚を覚えたり、気落ちも不安定になった。今まで、まちづくりの仕事をつうじて得てきたものに私自身の存在確認があったら、それが無くなった今は何にそれを求めれば良いのか。

ボランティア活動に深く関わるという道もあるかもしれない。いわゆる趣味の世界に没頭するという選択もあるかもしれない。しかし理由は定かではなかったが、それらはどこかしっくりこなかった。

振り返ってみると今まででもそのような不安定な気持ちになったことは二度あった。そして、その都度、大きな決断をして強引に舵を切ることで乗り越えて来たのだった。そして今度で三度目になる。

一度目は、三十才になるあたりで、二度目は、それから二十年後の五十才になるあたり。そしてさらに十五年後の三度目。



第十五回 三度目の危機を超えて（一）

私のアイデンティティが失われそうになったと感じた最初は、社会から置いてきぼりになったと感じた時だ。置いてきぼりという表現は正確ではないかもしれない。自分から選択したことだから。私は、大学四年の時に出会ったO市の歴史的環境を残す市民運動に十年近く関わっていた。その間、大学院に籍をおきながら大半の時間を市民運動に費やしていた。明治、大正、昭和初期と三代にわたってつくられてきた歴史的環境のど真ん中に計画された道路の見直しを求めた運動だが、都市計画決定済みで工事にも着手していた道路の見直しは困難を極めた。終盤には市民のおよそ半数にのぼる道路計画見直しを求める署名を集めるところまでいったのだが、結果的には歴史的環境の一部を残す妥協案で決着し苦い敗北感を味わうことになる。それまでの決着の見えない長い時間と闘っているうちに三十才も目前になり、その時に、例のものが襲ってきた。まわりを見れば同世代の友人たちは、皆、ひとかどの地位につき社会的実績をあげていた。私といえば、積み重ねたのは年だけという状態で、この先どうしたら良いのか、先の見えないくらい闇に覆われた感じであった。

その状況から逃れるために選択したのが、大学時代からの友人で市民運動を共にしてきたYと建築の設計と都市計画の事務所を起業するという道だった。二人ともさしたる専門知識や技術を学んだわけでもなく、大胆な選択であったと思うのだが。

ただ、いろいろな方の力をいただきながら、Yは主に設計の分野で、私は主に都市計画の分野で、それなりの成果をあげることができたのは、振り返ってみれば若さの力だったかと思う。それと、なまじ専門知識や技術を学んでこなかったのが良かったのかもしれない。後に、都市デザインに三次元コンピュータグラフィックを計画ツールとして導入することにチャレンジできたのも、世の中が都市計画に住民参加の必要性や、住民主体のまちづくりの重要性が認識され始めた時に、すでに長年の市民運動で身についた感覚が活かされたのも、まさに素人であったから純真に信じているところを進められたのだと思う。

事務所をYと立ち上げてから十五年ほどたち、ようやく仕事は認められるようになったが、その間、寝る間のないという表現がおおげさでもない状態が続いていた。それに二人とも要領が悪いのか、働けば働くほど借金が増えるという経営状態だった。Yは一途にものごとを突き詰めるタイプだったし、自分自身を絶対的に信じ、それと異なる人とは鋭く対立することもしばしばあった。それが彼の持ち味とわかりつつも、このままで良いのかと深く悩んだのが二番目の転機になった。

結果的に、事務所を二つに分け、私は多額の負債とともにこれまでの自治体との契約実績を引き継ぐかたちで、現在の事務所建て直すことにした。当然、経営的には負債の返済がキャッシュフローに重く響き薄氷を踏む思いであったが、なんとか徐々に安定し、スタッフにも恵まれ良い環境で仕事をする事ができるようになったのだ。



この自分にとって二回の危機をなんとか乗り越えられたのは、家族をはじめ様々な方々の力があってだと思っているが、自分自身でいえば「今なら、もし、仮にうまくいかなくてもなんとか立ち直ることができるかもしれない。」という気になれる若さが何よりだと感じている。

その経験があつて、事務所を引き継いでもらうなら、後継者が若いうちになければならないという気持ちになつたのだ。ただ、そのことが、私自身の三度目の危機になろうとは思つてもいなかった。ちょうど友人のYが、長年の研究成果や取組実績を高く評価され、立て続けに名だたる賞を受賞され、書籍も発表されるなどしたことは本当に目出度くもあり、一方で、引退後の自分がないものであるのかを思つていた私には、正直、感慨深いものがあつた。

こうやつて振り返ると、人から認めて欲しいとか、社会的評価を気にして、引退後の自分を不安に思うのは、なんと不遜なことかと思ふが、そうだったのだからしょうがない。ひとは何をもつて生きていると実感できるのかと、哲学的な問いかけをしても答えを見出すほどの頭もなく、仏陀の悟りはなんだつたのかと本を何冊か目を通したが眠くなるばかり。そもそも仏陀が向き合つた苦悩は、生、病、老、死と根源的なもので、私が抱える苦悩とは次元が違つた。

そうこうしている時に手を差し伸べてくれたのが、この竹山の土地だつた。それは、当初思い描いてきた野遊びの楽しみが救つてくれたわけではない。もちろん、薪を無心に割つたり、土を耕したりするのは楽しく時間を忘れさせてくれたが、それらが心の不安を埋めてくれるほど簡単な話ではなかつた。

竹山の土地の何が私を救つたのかを説明するのは、なかなか難しい。まわりの草や木や鳥たちを見ているうちにそういう気になつたという説明になつていないが、手短かに言うとそういうことになる。

引退して竹山にいる時間が長くなつたことにより、夜明けから日が沈むまで、春から夏、秋、冬と同じ場所をじつと見続けることは、今までになかつた体験であつた。ずっとそこにあるように見える草や木も同じようにでいてそうではない。同じ夜明けでも昨日と同じではないし、春がやってきたといつても昨年の春とは異なる。竹山の小さな広がりであっても、そこにいる草や木や鳥たちは、常に流れる川のように同じようである変化をしていつている。新しく加わるものもあれば、いつの間にか姿が見えなくなっているものもある。それでも竹山の風景は変わらず目の前にある。

最初にこの土地を下見に来た時に、一本の木が目が止まつた。それは大きく折れ曲り幹だけが残つた枯れ木で、それを目にして荒れた土地だと思つた記憶がある。そして、土地を買い家を建てた翌年には、これも景色として面白いかもと切るのをやめる気になつた。それが三年目には、この老木は虫の住処を提供し、その虫をキツツキが探して木に穴をあけ、その穴にキノコが生え、菌の力で朽ちた木は地面に広がり土となる大きな自然の営みに気づいたのだ。そう、この世に意味のない存在はひとつも無いことをリアルに理解した瞬間だ。



ひとは他者をつうじて自己確認することができ、生きていくことも実感できるのではないかという思いは今でもかわらない。ただ、他者というのが社会や人間関係を差すだけではないと思えるようになったのは大きく違う。太陽や風や雪の日々の変化や、生き物や木々の振る舞いに目をやり、それらと呼吸を合わせるようにして自分が生きていくことを感じることができるような気がしている。社会的承認欲がまったくなくなつたわけではないが、それで心が不安になるといったことはなくなつた。むしろ穏やかな気持ちになれる。

こんな気持ちの変化を与えてくれたのはこの竹山の土地なのだが、思い返せば単なる偶然の出会いが、その先に自分にとって重要な意味を持つことになるとは、まったく不思議なことだ。ひとから「石塚さんは、どうして田舎暮らしのような生活をされるようになったのですか。」と聞かれた時に「それは、神様の導きがあつたからです。」と答えると怪訝そうな顔をされるが、かなり本気でそう思っている。ただ、神様はかなり雑だ。八百万いらっしゃつたとしても、それで全世界の生き物を導くとすれば、確かにかなり大変だと思う。ひとつひとつ手取り足取り導いている余裕は到底ないはずだ。そこで、とりあえず手がかりになる事柄をバラバラとまいておく。それをうまく拾えるかどうかは当人まかせ。おそらく高いところから時々気が向いたらその後の様子を眺め、一喜一憂してそれを楽しんでいられるのではないか。

友人から「隣の土地が売りに出ているんだけど買わないかい。」と湿地同然の土地を紹介され、まともに取り合わないのが普通だと思う。それを魔がさしたように買ってしまい、野遊びの場所程度に思つていたのが、いつの間にか老後の蓄えを使い果たして住まいをつくることになり、今は、ここを終の住処と思つている。そして、そのことが引退後の自分を見つけることになるとは。何がその先の自分に重要な意味を持つてくるのか見分けるのは無理だと思うが、何か心にひっかかるものがあれば、それはもしかしたら神様が蒔いた導きの種なのかもしれない。その種は誰か特別な人にだけ与えられるものではなく、誰にでも与えられるものでありそうだ。というか、かなり雑にバツと蒔いているような気がする。それに目を向け手を出すことができるかどうかはその人次第。そういうことなのかもしれない。

今はコロナ禍でそれまで当たり前前にできていたことを慎重に、あるいは抑制して行動しなければならぬ状況になっている。もし、今でもまちなかのマンション暮らしをしていて、現役から完全引退したあとにコロナ禍の状況に置かれたら、私たちは、いったいどのような生活をしていたのだろうかと思う。神様は、そこまで見通して種を蒔いたのかはわからないが、この竹山の土地に導いてもらったのには深く感謝している。

最近わかったことだが、神様は私たちのことだけでなく竹山のこの地の将来も見越してこの地に導いたのではないかと思う節がある。そのことについては、もう少しあとになっていから触れたいと思う。



題を「竹山に暮らして」としているが、実は竹山という住所は無い。私たちが住んでいるところは住所でいえば富ヶ岡となる。それはそれでご利益がありそうなありがたい名前なのであるが、この富ヶ岡の範囲は東西に六キロメートル以上あり、私たちが住んでいる場所をあらわすにはちよつと広すぎる。一九五二年発行の地形図には、竹山という地名が大きく書かれているが富ヶ岡という文字は見当たらない。どうやら竹山という呼び名の方が歴史がありそうである。

古い村史を見ると、富ヶ岡は昭和十年の字名地番改正によってつけられた地名で、それまであった高台と音江別を合併したとある。そしてこの高台は文字通り地形的に高台に当り、この頂上に当る竹山十字路附近からは、遠く山々や近隣のまちを一望に見わたせることなどから、この高台の名がつけられたものとある。竹山十字路というから古くから東西南北の道が交差する高台にあったということになる。そして竹山の名称は、この辺にクマ笹が密生していたため竹山と附けられたと書かれている。クマ笹とあるが、正確にはチシマザサで別名根曲がり竹という。クマ笹とちがつて丈が三メートルになることもある大物だ。日本でいえば孟宗竹がポピュラーだが、孟宗竹が中国から持ち込まれるまではタケといえはこの根曲がり竹だったそうだ。春になると親指くらいの太さの筍が出てきて山菜として人気がある。そのため、その頃に竹山の筍を目当てに一稼ぎする人たちが大勢入り、今では立派な筍が取れる根曲がり竹は随分少なくなってしまったという。さらに昭和五十一年頃に一斉に花が咲く百年に一度とか言われる現象がおき、その後一斉に枯れてしまったとの記録もある。それでもうちの敷地の縁辺部には根曲がり竹がびっしり生えていて、そのうち東側の日当たりの良いところのものは丈も大きく、立派な太さの筍をいただくことができる。

地形的には竹山は広大な平野に舌のような形に張り出した丘陵の一番高いところに位置する。高いと言っても標高百十五メートルちよつとなのだが、他に遮るものはないので、今でもはるか遠くの山々が一望できる。春先など平地に向かつてなだらかに下る向こうに、頂きに雪が残る山々が連なる姿はいつ見ても見入ってしまう。

この丘陵の一部は原始林として国の特別天然記念物に指定されており、それ以外でも森林が多く見られる。日本植生誌によれば、この丘陵はトドマツを主とする針葉樹林で下にはチシマザサが多いとされている。広葉樹林としてはハルニレーイタヤカエデ林、ミズナラーベニイタヤ林、シナノキーイタヤカエデ林、ヤチダモ林（ハシドイーヤチダモ群集）、ハンノキ林（ハンノキーヤチダモ群集）などが見られ、多様な森林があることよって、見られる植物の数も多く、都市近郊の天然林として貴重であると書かれている。私たちのすんでいるところでも、これらの樹木はよく見ることができ、野草もいろいろな種類に出会うことができる。



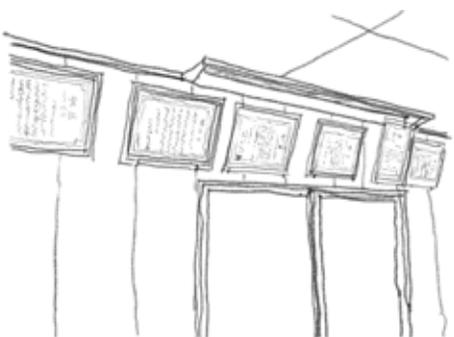
私たちが住むことになった土地は湿地状態だったと書いたが、このあたりはどうだったのだろうか。この丘陵部の地質をみると全体的に火山性の土のようだ。地層を上から見ると、火山噴出物がベースの軽石質の砂に植物が堆積してできた泥炭が挟まったものから始まり、小さな軽石を含んだ泥炭質の粘土、その下に噴火の時に流れでたり降ってきた軽石の層がつづき、さらに下は粘土やそれよりやや大きい粒のシルトに泥炭質の粘土が見られるようだ。その下は安山岩質になるが、全体的に地表に近いところは軽石や粘土が多いようだ。丘陵の先端の低地に近い方では、明治の三十年代にそこで取れる粘土でレンガを焼いていて、今でもセラミック工場が見られる。このような地質だと地表に落ちた雨水はなかなか浸透しにくく溜まりがちになり、私たちの土地も湿地状態であったのはうなづける。

このような竹山に人が入ったのは明治二十七年頃とされており、当初は根曲がり竹に混じって生えていたイタヤやカバを使って炭焼きをされていたようだ。そのうち竹山の用材も尽き、遠くに出向き炭焼きを続けるかたわら、木を切ったあとを開墾して畑をつくっていたと記録にある。当時の風景を伝える写真はないので推測になるが、高木の姿はなく勢いの強い根曲竹が一面を覆っており、ところどころに開墾された畑があるという状態だったのではないかと思う。基本的に、暮らしの場として人の手が入るところに鬱蒼とした森林が残ることはない。木々に囲まれた別荘地として有名な軽井沢や、雑木林が原風景のように言われる武蔵野も、明治の頃は一面草地であつたようだ。これもそうだったのではないだろうか。

竹山にまともに入って入植するようになるのは戦後すぐの昭和二十四年から二十七年頃である。樺太から引き上げて来られた方や、引き上げて他の地に新しい暮らしを求めてうまくいかなかった方などが、国から土地を斡旋されて竹山に入るのだが、それも大変だったようだ。近くにお住いのSさんは、当時のことを話されるときに普段の温和な顔とは違う表情を浮かべながら「ほんとに、あのころは辛かった。」と言われたのが印象に残っている。

国は酪農を奨励したようだった。確かに粘土質の土地で畑をつくるにしてもまともな土にするには時間がかかるので合理的な判断だったのかもしれないが、それでも斡旋された土地には一抱えもある木がたくさん生えていたようで、それを切つて抜根するという重労働が求められたのだ。その頃には炭焼きで一旦失われた木々がまた大きく育っていたのだろうか。切った木の根っこを抜くのはとても大変な作業だったようで、Sさんのお父さんはS式抜根機というのまでつくられたそうだ。現在、竹山に住まわれている方々の多くは、そのような苦労を経験されていると聞く。

地区の集会所になっている竹山会館の壁には沢山の表彰状が飾つてある。それらはみな農業振興に竹山地区が貢献したことを讃えるもので、一九六〇年台の半ばには苦労が少し報われるようになったことがうかがえる。



第二十回 竹山というところ (三)

そんな竹山も、一九七〇年から始まった大規模団地の造成に伴って移転を余儀なくなってしまう方々もいて、地域の繋がりは時とともに変わってきている。それでも今も竹山町内会として強い繋がりが残っている。現在、十六戸で町内会が構成されているが、私たちもお仲間に入れていただいている。毎年、決まった集まり事があり、コロナ禍までは年八回あった。町内の清掃などの後には小宴が催され、そこで聞く町内の昔の話や日々の出来事の話は興味がつきない。最初に私が聞いたのは、M会長のスズメバチのトラップの作り方だった。春先、少し暖かくなる連休の頃に、スズメバチの女王蜂が目覚め、巣をつくりはじめ徐々にハチの数が多くなり、それらのハチも総出で巣をどんどん大きくしていくのだそうだ。大きくなってしまった巣は素人が手を出せないくらい危険なものになる。ただでさえスズメバチに刺されると危険なのだが、巣を壊されると総出で立ち向かってくるのでへたに手を出せないのだ。そこで女王蜂が巣をつくり始める前に駆除することが重要になる。そのため捕獲器のつくり方を絵入りで解説してくれる。M会長は頼まれれば大きくなった巣の駆除もするのだが、できればみんなで巣をつくるまえに対策を取りましょうというお願いなのだ。あと、大家族のMさんの木臼で二升の餅つきをする話や、建具職人のKさんの弟子入りした親方がノミを研いだら立てて倒れなかったという話など、ホホウという話ばかりだ。

年中行事のなかに竹山神社祭というのがある。竹山で標高が一番高いあたりに竹山神社はある。市史によると最初は小祠で春日大社と書かれた木札と鏡一対が祀られていたが、明治三十八年(一九〇五年)に、縁あつて毘沙門天を合祀して、眺望の良い現在地に創立されたとある。一九九八年には建て替えら鳥居のある現在の姿となっている。今は、神社のまわりはすっかり木々に覆われているが、木々が無かった頃は、山並みが一望できたようだ。竹山神社祭といっても特に神事があるわけではないが、年二回、神社のまわりの落ち葉を掃除し、お供えをして町内皆でお参りするのだ。そのほかに年が開ける深夜に皆で初詣するのを欠かしたことがないと聞く。町内会では建具職人のKさんが神社担当として行事の仕切りをされている。毎年、社会会計の報告もされるのだが、お賽銭も結構な額になることから、この地域だけでなく広くお参りに来られる方がいるということだ。

ここは、最初にふれたとおり市街化調整区域に指定されている。市街化調整区域は、市街化を抑制する区域とされ、住宅の建築も厳しく規制されている。市街化調整区域というと雑木林や農地がひろがり、ところどころに資材置き場などがあるイメージだが、なかには竹山のようななれつきとした集落もある。そこには豊かな自然があり、時にはその樹木などを生活の糧にし、またその自然と闘ってきた時間の積み重ねがある。明治の中期に先人が入植して以来、数々の苦労を重ねてきた人々が互いのつながりを大切にし、地域の守り神とし神社を祀り大事にしながら暮らしているのだ。



最初にこのことを「千五百坪の森に囲まれた（気分になる）暮らし」と書いたが、この土地を紹介してくれた隣家の友人が以前に撮った写真を見ると木が一本も生えていなかったことがわかる。ここは緩やかな斜面を造成して人工的につくられた土地だったのだ。一区画千から千五百坪で共同井戸から給水される計画的な分譲地だったことが伺える。

私の入手した土地の登記を見ると、昭和一九六六年八月に分筆され翌六二年六月に前住者が購入していることがわかる。おそらく、その頃に造成されたものであると思われる。今から五十五年前になる。私が森といっているのはその間に育ったものということだ。最初の冬の大雪で除雪を手伝ってくれたSさんは分譲当時のことを記憶しており、木といえば区画道路沿いにトドマツが植えられていたくらいだという。それと巨石。私の土地にも立派な石が四個も鎮座している。この石については最初は趣味的に馴染めなかったが、そのうち何かありがたいものに見えてきて、今では年のはじめに供え物をして拜んでいる。

さて、話を木のことに戻そう。区画道路沿いのトドマツ以外の木は先住者が植えたかというところ、そう思われるのは数本のオンコだけと見うけられた。結構な樹高で目立つのはハンノキとヤチダモで、あとはシラカバやクリそしてヤナギだ。いずれも庭園樹としては馴染みが無いもので、このあたりの丘陵の固有種に符合する。ヤチダモやヤナギが多いのは、ここが当初から水気の多い土地であったことが伺える。ハンノキやシラカバはパオイオニア樹種の代表格だそう。パオイオニア樹種は、栄養の乏しい土地でも真つ先に根を生やし、空中の窒素を地中に固定し次の世代の樹木が成育しやすい環境をつくってくれるのだそうだ。

クリはどうしてか。これは先ほどのSさんの話では、せつせと植林したのはエゾリスだとのこと。エゾリスは冬眠しないので雪に覆われた冬中どこかで食べ物を調達しなければならぬ。そのために、秋になるといろいろな木の実を集めては落ち葉の下などに埋めて冬に備えるのだそう。確かに地面をよく見ながら歩いていると、いろいろな木の実が落ちている。そしてその周辺には、その実をつける木が見当たらないことがある。これがエゾリスの植林なのか。だが、見つけるのは雪の融けた春先なので、どこに埋めたか忘れてしまったものかとも思う。彼らの忙しない行動と、どこかおバカそうに見える風貌がそう思わせるのかもしれない。隣家で自然に生えてきたクルミの小さな木をもらって、将来、私たちがいないかもしれないがエゾリスの食べ物になればと敷地の片隅に植えたことがある。植えて一ヶ月ほど経ったころその木の根元にクルミの実が落ちているのを見つけた。もちろん、その木のものではないのは明らかだが、エゾリスが将来の実りを楽しみにお供えをしたのではないかと真面目に考えてしまった。おバカに見えて実はしっかりとした将来設計を描く力があるのかも知れない。私が見ている木々は、造成で裸地となったこの土地に風や虫や動物たちの力を借りて長い時間をかけて根付いてきたものたちであるのだ。



Handwritten signature or scribble at the bottom right of the page.

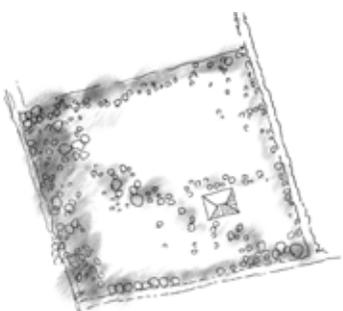
一旦裸地となったこの土地にどのように樹木が育ってきたのかを記録した
ものがあると面白いと思うのだが、そのようなものがあるはずがない。ただ、
過去の航空写真を探して見てみると興味深いことがわかった。一九六一年の航
空写真からは、この土地を含め周りは一面雑木林で、自然に恵まれた環境であっ
たことがわかる。それが十年後の一九七一年の航空写真では木が一本もない裸
地に変わってしまった。この時点では家は一軒も建っていない。その五年
後の一九七六年の航空写真では家らしき建物が六軒確認できる。都市計画法が
制定され市街化を抑制すべき区域として市街化調整区域の指定制度ができたの
が一九六八年で、それがこの土地に適用されるまで少し時間差があったと思わ
れるが、それもあつて駆け込みでつくられたのではないかと思われる。

その写真を拡大して見ると、木と思われる影が何本か確認できる。それから
また十年近く後の一九八五年の航空写真では木の影が列としてつながってきて
いるのがわかる。その木の列は丁度四角い土地の北西から南東にかけて対角線
状に位置している。建物は四角い土地に平行に建っているので人工的に植えた
木としては配置が不自然である。どうして対角線に木が列をなして生えたのか。
その分野の専門的知識があるわけではないので、あくまで素人考えであるが、
次のようなことだったのではないか。

もともとの地形が土地の北東から南西に向けての傾斜地で、そこを平らに造
成するにあたって、北東の土地を削り南西に埋めたとすると、木の生えている
対角線は表土が比較的残っていたのではないか。裸地のなかでかろうじて育つ
のに適した土があるところに風や生き物の力をかりて偶然降り立つことができ
た種が、一生懸命根をおろした結果だとすると感慨深い。

今は、いろいろなところに木が生えて明確に対角線の木の列は認識できな
い。それから三十五年以上経つので土もできてきたのかもかもしれない。ただ、よ
く見ると同じ種類の木が小さな集落をつくっているように見える。大きな木の
まわりに同じ種類の小さな木が確認できる。ハンノキの集落、ヤナギの集落、
ヤチダモの集落、ミズナラの集落などなど。それがさほど広くない敷地に点在
するように広がり、その隙間を埋めるようにいろいろな種類の木が生えている
のだ。もっと知識があれば、それぞれの集落やその間を埋める木々が、なぜ、
そこに根をおろすことになったのか、水や土壌との関係で説明できるのかもし
れない。

釣り好きのTさんが竹山のこの土地の樹木を見たときに、「日頃、釣りで
くところで見える樹木とその種類とは違うな。」と話してくれた。ここは樹種が
多様で造林された山で見られるのとは違うということだ。多様性は、単にいろ
いろなものが混在している状態ではなさそう。多様性は、それぞれに適した
場があること。その場を選択できるかどうかは自己的に決定できるというより
他者の力や偶然の力が加わる状態であることが大きい。そして、それらがあ
るグループをつくったとして、その間にさらに生きる隙間があるということか。



こうして見てくると、もうひとつ疑問に思うことがある。造成で裸地となったところが、三十五年以上の時間のなかでどのような状態になってしまったのかということだ。前に、側溝が土砂で埋まってしまってミニ扇状地のような状態になり、いわゆる扇端に相当するところが湿地状態になったのではないかと書いたが、そもそも側溝に流れる水はどこからきているのか。

過去の地形図を探してみたところ一九五二年発行の二万五千分の一の地形図があった。まだここが市ではなく村だった頃で、市街地らしきものは見当たらない。つまり素の地形がわかる状態の地図だ。これによると私の住んでいる土地は南北に長い丘陵の頂部近くに位置するようだ。丘陵の頂部からは四方に沢のような筋が確認できる。私の土地がある造成地は、その沢のひとつを何段かに平らに整地してつくられたものようだ。

もうひとつわかったことは、この南北に長い丘陵の端部には明治以降レンガを生産する工場が盛んにつくられ現在もレンガの産地として名の通ったところだということだ。私の土地も、家をつくる際におこなった地質調査の結果を見ると三メートル程度の深さまで粘土層だった。粘土は非常に細かな粒でできた土で、水も浸透しづらい性質がある。

そもそも水はけの良くない粘土が厚くある土地で沢状の地形であれば、雨が降ればそこを水が流れることになる。造成で平らにしてもおそらくその下に粘土層に支えられた水の道が残っているのではないだろうか。そういえば、この周りの土地のいろいろなところに小さな池が見られるのだが、それらは水の道から僅かに流れてくる地表には現れない水を溜めたものかもしれない。そしてそれらの池から流れ出る水が側溝に集まり一年中枯れない流れとなっている。そう考えてみると、数万年の月日を経て堆積され、また風雨に削られてできたこの土地の性質は少々人間が造成しても変わらず今も生きているとも言える。そして、人の手が離れ側溝が埋まったままになったことによって、行き場を失った水がちよつとした傾斜を頼りに僅かな土砂と一緒に土地全体に流れ、常に水の溜まった湿地のような状態になっていったのかもしれない。

造成直後に根をおろした木々も、水はけの悪い土地に適応するハンノキやヤチダモそれにいろいろな種類のヤナギが優勢になり、草花もアシやガマそれに苔のたぐいがあちこちにコロニーをつくっていったのだろうか。枯れた木や草も常に水がある状態では、土になることもできずいわゆる泥炭の状態で粘土層の上に堆積することになる。そうやって半世紀の時間をかけて今の土地の状態になり、そこに私たちが偶然に出会うことになった。

そう考えると、単に人が暮らす上で厄介な湿地に出会ってしまったと言ってしまうのは憚られる。土地は人間の尺度を超えた大きな大きな時間の流れのなかで変わらぬ性質を保ちながら、時としてその形状を変え、その都度多様な動物を迎え入れ生きている。そのほんの一コマに私たちが加えさせていただいている。そう考えるのが自然のような気がしている。



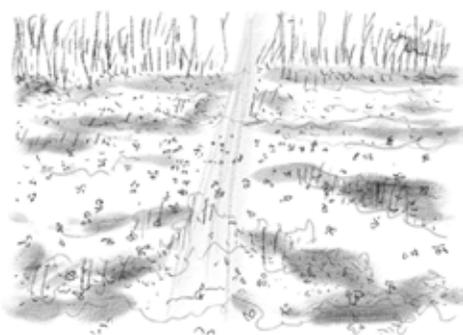
もう少し草花に目を向けてみよう。木もそうだが草花についてはほとんど見分ける知識がなかったのだが、それでも植物図鑑を頼りに日々見ていると何となくわかってくる。なぜかという草花の中には明らかに集団をつくっているものがあり、どんなに節穴であつても目に入ってくるものがあるからだ。

まず目についたのはスミレだつた。最初の年の春だつたと思うが、ヤチダモやミズナラ、ヤナギの木々に囲まれて少しひらけたところがあるのだが、気温が徐々に上がってくると一面丈の低い草が緑色の敷物のようになり、そのうち小さな紫色の花が咲き始めた。木々も葉をつけ始め、その木漏れ日がスミレにスポットライトを当てるようになる。家のあるところからは丁度対角線の角にあたり離れているのだが、そこに行くのが楽しみになる。早々に妻と「すみれヶ原」と名付けた。

次に目についた集団はヨモギだつた。「すみれヶ原」の隣にあつたせいもあるが、特徴的な葉のかたちだし、葉にさわさわと手を触れて鼻に近づけるとヨモギ餅の香りがするのですぐわかる。まあ、その程度ですかと笑られそうだが、色やかたちだけでなく、香りや場合によっては味覚なども使つてなんとか敷地に生えている植物を理解しようとしていたのだ。ヨモギの集団はもう一箇所あるのだが、それを認識するのは少し後になってからだつた。なんせ自分の敷地といつても一面木と草に覆われたところを隅々まで足を運ぶのは結構たいへんなのだ。

ヨモギの集団から先、少し日当たりの良いところに出るとセイタカアワダチソウの集団に出会う。稲穂のようなかたちに黄色い花をつけるので、これは見分けがすぐつく。このセイタカアワダチソウは、根から周りの植物の成長を邪魔する物質を出し勢力を拡大する厄介者らしい。ただ、勢力が拡大しすぎると自分が出す物質で成長が抑えられてしまうという。セイタカアワダチソウを蓄のうちに収穫して乾燥させるとデトックス効果のある入浴剤になるとの情報もあり、最初の年にせっせと刈り取つたせいもあるかもしれないが、三、四年たつた頃には数が減つてきたような気がする。そのかわり増えてきたのがススキである。これも非常にわかりやすいのは良いのだが、セイタカアワダチソウに負けないくらい勢力を拡大する力があつて、あつと言うまにススキが原になつてしまう。

敷地の真ん中あたりは、特に水気が多く分け入るとズブっズブっと足が沈む状態で、木もほとんど生えていない。その中で元気にしていたのはアシとガマだつた。ガマは種の塊である「穂」がお祭りの屋台でみるフランクフルトそっくりなので私でも見分けがつく。この集団が湿地感を高めていたのだが、側溝を復活させ扇状地をつくっていた水をそちらに導くようにしたら急に数が減つてきた。三年ほどたつたら、側溝沿いのわずかに水気が残るところに数本穂をつけるだけになり、その翌年にはまったく目にしなくなつてしまった。それはそれで何か寂し感じになるのは身勝手そのものなのだが。



アシとガマが姿を消していくのと入れ替わりに目に入ってきたのは、フキと野菊だった。それらはアシやガマは丈が高いのでもともとその影に生えていたのかもしれないが、水気が引くのと同時に日の光もたくさん当たるようになり勢力を増してきたように思われる。フキと野菊は今のところお互いに侵食し合うようなことはない。ただフキは家を建てる時に水はけの良い場所にするためにたつぷり積み上げた碎石だらけのところに徐々に姿をあらわし、いつのまにか群落をつくってしまった。土などまったくなく他に競争相手の植物がない場所では健気に仲間を増やしてくれたことで殺風景な場所が変わってきたのは嬉しかった。それは単に植物が生えてきたというだけではなかった。フキの大きな葉が冬になり朽ちて徐々に碎石だらけのところに土らしきものができてきたのだ。数年経つとフキだけでなく木々の落ち葉も加わり、風で飛ばされてきたいろいろなタネが小さな芽を出すようになってきた。五年経つて碎石のところにブドウの生垣をつくりたくなくなって穴を掘ったら、上部三センチメートルくらいに黒々としたものができて、いろいろな植物の根がからまつていたのには驚かされた。

最初のフキの群落のすぐ傍に、不思議なサークルを発見した。春の早い時期にオノコと思われる小さな枯れ木を囲むように正確に定規で計ったような円形の緑の群落ができるのだ。時期がたつとそれにオレンジ色の特徴的な花が咲くことでヤバカンゾウの群落だとわかった。敷地の他には見られないそこだけの群落だったのだが、隣で勢力を増してきたフキがそのサークルに侵入し大きな葉をつけるようになり、だんだん元気がなくなつたのかここ数年花を見ない。

野菊の群落は敷地の丁度中央あたりはかなり広い範囲であり、秋になると白や薄紫の花がそこら一面に咲くのは壮観だった。しばらくするとそこにも小さな群落をつくるものが出てきた。ハンゴンソウという植物で妙に丈が高くなりてっぺんに黄色の花を傘状にたくさんつけるのでよく目立つ。最初は小さな群落だったのがだんだん大きくなり、あちらこちらに分家して勢力を拡大しつつある。

この他にも小さいけれどミズバショウやエンレイソウの群落が確認できたが、それらは日陰に育つのであまり競合相手がないのか、今の所はそれぞれに平和に暮らしている。

私たちがこの土地に住み始めて五年しか経っていないのだが、自分たちが暮らしやすいようにと水路を調整したことで、植生が大きく代わり、景色もほとんど変わってきている。条件が変わるとそこに適した植物が競つて自分たちの場所をつくりはじめる。そのなかで丈が高いつか葉が大きいとか、過酷な条件にも適応できるとか優位な資質をもつたものが勢力を増してくる。ただ、セイタカアワダチソウのように勢力を増しすぎて自滅するものもある、そしてそのあと、じっと機会を伺っていたものが台頭する。かれらは常に動いているのだ。それも短期間にかなりダイナミックに。



敷地内をうろろしているいろいろなものを見つける。まず、目に入ったのはフキノトウ。まだ一面枯れ草色でところどころ雪が残っているときに、鮮やかな薄緑色の蕾は目に入らないわけがない。さっそく二、三個いただいて酢味噌和え天ぷらで晩酌にいただく。独特の苦味と香りが口の中に広がる、何か新しい季節のエネルギーをいただいた気持ちになる。フキノトウを美味しく食べられる期間はそう長くはないのだが、それでもちよつとずつ違う環境で育った群落から時間差で収穫できるので、それなりに長く楽しめる。もうそろそろ終わりがかなという頃にはフキ味噌にして余韻を楽しむこともできる。フキノトウが終われば、今度はフキの軸をいただくことになる。こちらはあくだしなどの下処理が必要だが、当然の美味しさだ。軸が赤いのはまずいと言われるが採りたてのフキなど馴染みがないせいも十分食べられる。大きな葉も肉などを包んで蒸し焼きにするという使い方があってそれはそれで楽しい。

枯れ草色の地面もだんだん色づき始めるとササタケが顔を出す。ササタケは根曲り竹の新芽でタケノコよりは、小さく細い。でも香りは負けていない。問題は採るタイミングだ。早起きは三文の徳の言葉どおり、早朝が勝負。朝でてきたものは手で根元を握って力を入れるとシャキッという感じで折れる。採ってすぐに下処理をするのだけれど、お湯で茹でるだけで良い。これも淡いえぐみがたまらず酒がすすんでしまうのでほんとに困る。敷地の四周に根曲がり竹が自生しているのだが、良いものは採れるのは一箇所だけ。個人的には太短いのがうまいと思うので、それ以外は採らずに立派な竹になって新しい芽を出すのを期待する。無いときは無いですませる。そういうことができるのは家のすぐ近くにあるからで、これがわざわざ車を飛ばして採りに来たのであればそう潔く引き下がれないだろう。

同じ頃に顔を出すのがワラビ。ワラビ目になるまで見つけるのが難しかったが、一旦目ができることとあそこにもここにもと見つけることができるようになる。ただ、ワラビもあまり成長してしまふと硬くなるので、良さそうなのだけを選んで採るが、それでもちよつとした時間で二人で食べるには十分過ぎる量になる。翌年からはだいたいどこに出でくるか場所がわかるのでますます簡単に採れる。採った後、灰汁につけてあく取りをしなければならぬけれど、灰は冬のあいだ焚いていた薪ストーブからもらえば良い。

あと、春の定番にギョウジャニンニクがあるが、残念ながらそれは自生していなかった。ところが、そこに神の使いのようなMさんが登場。Mさんはこの竹山の町内会の会長で私と数ヶ月違いの同じ年だったこともあり、竹山では新参者の私たちに何かと気をかけてくれる頼りになる人なのだ。この人との出会いが無ければこれほど竹山暮らしを楽しめることができなかつたと思う。そのMさんが、時々電話で「石塚さんのところに、これある？」と聞いてきて、無いというとすぐに持って来てくれるのだ。これまでいただいたのは、ギョウジャニンニクのほかに、ウド、ミョウガ、モミジガサなど。贅沢このうえない。



Mさんからいただいたものにシイタケのホダ木がある。家を建てる時にどうしても切らなければならなかった木から選んでシイタケの菌を埋め込んだものを二十本くらい新築祝いに届けてくれたのだ。二年後を楽しみに見よう見まねで寝かしたり立てたりしていたが一向に出てくる兆しがない。Mさんのところも良くないみたいで菌が合わなくなったのかもしれないとのこと。それでも処分するのは忍びなく上下を変えたりしながら置いておいたら三年目くらいに少しだけシイタケらしきものが出て来た。ただ、大半のホダ木は兆しがないままで、また翌年少し出るといふのを繰り返している。昨年には自分で駒打ちという菌を原木に打ち込んでみたが、こちらもどうなるものか。

その間、近くの方が訪ねて来た時に「ここはヤナギタケが良く出ていたけどどう」と聞かれた。そんなキノコは名前さえ知らなかったが、そう言われて凶鑑を頼りに家の前の少し古くなったヤナギの木を見て見たら、特徴的な傘模様のヤナギタケが生えているではないか。凶鑑を頼りにキノコを食べるなど言われるので私は消極的だったが、こういうときは妻が強い。さつさと味噌汁にして夕飯の一品にしてしまった。口に入れると少し揮発性の香りとヌルツとした食感で、かなり美味しい。

これに気を良くして敷地の木や倒木を観察していると、家を建てる時に切った木で薪するには当時の力量では持ち上げることも切ることもできなくて野積みにしたままのものに結構まとまったキノコを発見した。これはMさんに確認してもらったらエノキタケだと言う。エノキタケというとスーパーで良く目にするのは白くて細く束状になったものだが、茶色で太くまとまっているけどそれぞれバラバラに生えていて、とてもそうは見えなかった。でも、天然のエノキタケはそうなのだと言う。Mさんも自分の知らないキノコを凶鑑で調べて食べるなんてことは絶対しないという人で、その人がこれは美味しいというのだから食べない手はない。さつそく酒のあてにいただくことにした。

こうなると妻はキノコハンターとなって、いろいろなキノコを家に持ち帰り二人して凶鑑とにらめっこするのであるのだが、どうも決め手に欠けるものばかりで試しに食べてみるという勇氣はわかかなかった。そんなとき、妻がこれは間違えなくタマガタケだというものを見つけて来た。傘は濃いオレンジ色から赤に近い色で表面は少し艶がある。見るからにこれは毒でしょという姿なのだが、軸の根元に白い殻状のものがあるのがわかる。これが名前の由来で土から出て来たときは卵の殻のような白い姿で、その上部が割れて赤い傘が出てくるのだ。Mさんはそんなもの知らないというし、どうしたものかと思ったが凶鑑によると超美味でヨーロッパでは皇帝のキノコといわれるくらい珍重されていると書かれているのではないか。こうなったら食べてみたい気持ちの方がまさってしまっ。オムレツにして食べたなら、強い揮発性の香りが卵とあってなんとも言えない味わいだった。隣人がそれを聞きつけ、うちにもあったよと見せてくれたのはあきらかに毒のあるテングタケだった。



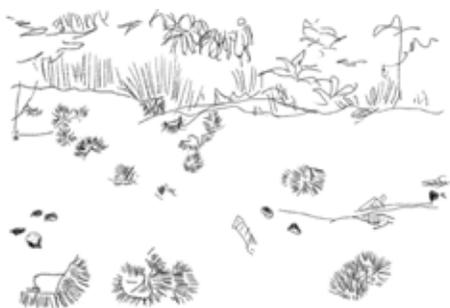
秋になると栗がたくさん実る。あまり大粒にはならないのだが、あちこちから集めれば栗ご飯には十分だ。もとはと言えばエゾリスが孫子のためにとせつせと植えたものというか、冬に備えて枯れ葉の下に埋めておいたものを忘れてしまったものかもしれないが、いずれにしろ彼らの努力の賜物なのだから、遠慮気味に採らなければ申し訳ない。まあ、そんな気遣いをして美味しそうなものは真つ先に虫が食べてしまうのだが。

秋の恵みはそのほかにもヤマブドウがなるのだが、シラカバの木にからまつてどんどん上に成長してしまっていて、採ることができない。高いところに来て採ることができないといえば、クワの実もそうである。サルナシもご近所の森では時々目にするが、残念ながらうちの敷地には今の所見当たらない。そんなに簡単になんでも手に入るわけではない。

春の山菜、秋のキノコや栗などは定番の恵みだが、欲深いというか探究心が旺盛というか、私たちはそこで止まらない。春先に採り放題になるヨモギを韓国好み焼きのようなジョンにして食べてみたら美味しかったので、もつと敷地に生えているもので同じように料理できないか考えてみた。まず目に入ったのがスギナ。なんせ家の周りにはびつちり生えていてふかふかの緑の敷物を敷いたような状態になる。その前のツクシの時にも炒め物にしたりして美味しくいただいたが、どうも袴を取ったり下処理がたいへんなようだ。スギナになるとそのままいけるのではないかとということでジョンにして食べてみた。ちよつとジャキジャキとして食感があるが春を食べているようで、これはこれでいけるということになった。

こうなると、毒でなければなんでも食べられるのではという気になる。次に試したのがタンポポの花。これは花がパツとひらくように天ぷらにしてみたら姿も良いし味もまあまあだった。油で揚げることによつて味の癖が和らぐようだ。タンポポの葉も油で炒めてみるとそれなりにいける。気のせいか野のもの季節の「気」をいたたく美味しさがあるような気がする。スベリヒユという草もいける。ちよつと粘りがあるのだがそれが美味しい。図書館の本棚を見ると道草を食うたぐいの本が結構あり、そのなかでもスベリヒユはおすすめであった。

お茶にして楽しめるものも結構ある。先のスギナもそうであるが、白い花が可憐なドクダミもあちこちに生えている。まあ、身の回りにはまだまだ食べたりに煎じたりして飲めそうな草がありそうなのだが、先のお楽しみをすることにした。なにせ、Mさんからのいただきものが、背丈より高いフキ、立派な太さのウド、ひと抱えもあるヒラタケとか質量とも豊かでそれだけでも満足してしまふ。さらに隣人が育てているカシスやブルーベリー、カリンスズ、ブドウなども採り放題なので最初の年は果実酒にしたりジャムにしていたが、そもそも私たち二人でそんなに飲んだり食べたりにすることができはるはずもない。気が向いたら採つて食べて季節を感じる。それが贅沢ということか。



よく「そんな広い土地を手に入れて、畑をつくって自給自足でも考えられているんですか。」と聞かれるが、そんな気持ちは毛頭ない。そもそもここは湿地状態でスコップを入れると土になりきららない枯れ草が薄い層をつくって、その下は鼠色をした粘土になる。スコップでそれをすくおうとするとヌブツとした重い手応えで、うまくすくい上げられたとしても、その小さな穴がみるみる下から湧いてくる泥水で埋まっていく。そういう土地なのだ。野菜をつくらうとしたら、まず、暗渠排水という穴の空いたポリエチレンのパイプを埋めて水はけを良くしなければならぬ。そのうえで、水はけを良くする火山礫などと土を入れ植物の生育に適した土壌をつくらなければならぬ。土壌もともとらしく書いたが、細菌などの微生物からミミズなど、様々な生物が住む環境が大切なようだ。枯れた植物や死んだ動物を分解して植物の栄養をつくったり、空気中の窒素を植物に渡したり、植物の害になる細菌などを抑えたりしてくれるのも土壌のなかにある多様な生物環境の力ということのようだ。そのような生きている土をつくる必要がある。それだけでも大変な労力と時間を必要とする。

そこまでしなくても竹山にはそれぞれの季節を味覚や香りを通じて感じさせてくれる植物が勝手に生えているのだ。それが竹山の食の中心にある。

その周りがあるのがMさんからのいただいたもののような近所同士のお裾分けだ。五年もいるといういな方と知り合いになる。その方々が「石塚さん、これいらぬかい。」と自分の畑でできた野菜や果物を持ってきてくれる。わたしの方からお返しするものがあまりないので恐縮するが、確かに収穫時期はいちどきにやってくるので、それぞれのお宅では食べきれないほどできてしまうようだ。それぞれのご自慢の畑の実りなので美味しいことこの上ない。贅沢な悩みとしては、ある時期同じにたきものが集中することか。

さらにその周りがあるのが近所の農家さんの野菜だ。隣家のNさんの息子さんが、新規就農され近くで畑をやっている。有機肥料で収穫まで無農薬で栽培することに拘られている。収穫の季節になるとまとめて買わせていただいている。それに良く買わせていただいているのが農協の直売所だ。種類は少ないが地元の農家さんの名前入りで旬な野菜が並ぶ。それも安い。ご近所の農家さんでお年を召された方も、時々、この直売所には出されていた。あのおじいちゃんがつくった野菜と思うと一段と親近感がわく。

さらにその周りがあるのがこのまちとその周辺の数々の農家さんの野菜だ。きちんと土をつくり、丹精込めて育て、丁寧に収穫したものばかり。ただ、店頭に綺麗に並んでいる野菜の影に形が悪い、規格に合わないなどの流通側の理由で日の目を見ない野菜があるのはどうも気になる。農家さんの作業を見せてもらうと収穫までの大変さもさることながら、この流通にのせる選別に必要とする労力がばかにならない。そのようにして店頭に並んだ野菜を買うことまでが竹山の食のベースだと思っている。



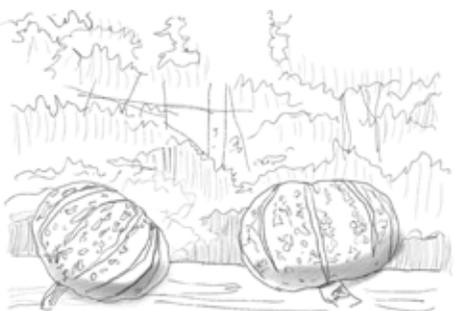
自生しているものを採っていただく。ご近所さんからのお裾分けをありがた
くいただく。ご近所の顔の見える農家さんから購入する。頑張っている地域の
農家さんから購入する。それだけで素人の野菜づくりが登場する隙がなくなっ
てしまう。ただ、そのうえで台所からつつかけで外に出てちよつと彩りや香り
になるものを摘んできて使う贅沢はしてみたい。

家を建てた翌年、雨が降るたびに家の周りにできる水たまりに耐えられず、
Mさんをお願いして、暗渠排水と砂利を入れてもらうことにしたのだが、その
時にMさんから「畑くらいやらないかい。」と言われて、ついでに小さな畑が
できるようにそこにも暗渠排水と礫、それに黒土を入れてもらった。「もつと
広くなくていいの?」と言われてたが、妻が謙虚に「それだけでもできるかどう
かわからないので。」と本当にこじんまりした畑をつくってもらった。

それも、妻の構想としてはワイルドな原野に整然と畝がならぶ畑は似合わな
いということ、できるだけ境界もあいまいに、野菜だけでなく好きな野草も
パッチワークのように畑に共存するのを目指すことになった。振り返ってみる
とこの考え方は正しくて、良く風景に馴染んだ畑になっている。最初に植えた
のはハーブ類とトマト、それにラディッシュだったか。いずれも身近にちよつ
とあると重宝するものだ。ハーブはミント、レモンバーム、オレガノ、タイム、
チャイブ、シャンツアイ、シソなどである。残念ながらローズマリーはこちら
では路地で越冬できないので鉢植えにして畑に置いてある。ハーブは当然料理
にちよつとあると嬉しいものだが、花をつける姿も綺麗で舌だけでなく目も楽し
ませてくれる。トマトは栽培しやすいこともあるし、いくらあっても煮て冷凍
しておけば冬にも使える。この畑はもつばら妻の領域であるが、ちよつと脇に
カシスやブルーベリーの木を植えさせてもらった。まだ、苗に毛の生えた程度
であるが、少しだけ朝のヨーグルトにのせると彩りも綺麗だし、朝から野の気
をいただけるのが嬉しい。

数年経つと妻もは畑づくりに慣れてきてもう少し大きくしたいといふので
Mさんから礫と黒土をもらって少し拡張した。つくる種類も少しだけ増えて
豆、きゅうり、ナスが加わった。といつてもそれぞれ一、二株なのでしれている。
肥料はもつばら生ゴミの段ボールコンポストでつくった堆肥と大量の落ち葉の
腐葉土なので良い循環になっている。そういえば、町内のゴミステーションに
生ゴミが出ているのを見たことがない。そんなもつたいたいことをするわけが
ないということか。我が家の段ボールコンポストは都心のマンションにいると
きからやっていたのだが、その時は少し気になった匂いもこちらにきて野の匂
いに慣れると、とても良い土の香りだったということに気が付いた。

昨年のはかぼちゃも登場したが、それはコンポストに入れたかぼちゃの
タネから勝手にでてきたのだという。ご近所からお裾分けいただいた立派なか
ぼちゃの子供なので成長を期待して見守っていたら、一丁前のかぼちゃが二個
実った。コンポストはそんな粋な循環もしてくれる。



そんな妻の畑の成長を見てみると、わたしの畑も欲しくなってきた。何かを育てるのは楽しそうに見えるものだ。しかし、またMさんに暗渠排水を頼むのも気が引けたし、わたしのわがままをそう大げさにする必要もないと思った。なんせ飽きっぽい性格なので耕作放棄地ができてしまうことになりかねない。そこでいろいろ調べているとレイズドベットという方法があることがわかった。これはイギリスのガーデンングで、庭の片隅に家庭菜園をつくるのに適した方法だという。紹介されるのはいが木製の板で枠をくつつてそこに土を入れ野菜を高植えするというものだ。これなら水はけの悪い土地でも作れるのではないかと思った。ただ、ガーデンングというにはワイルドな原野なので、そこにあるもので作れないか試行錯誤を試してみた。

とにかくうちには折れてしまった枝がたくさん出る。そのうち比較的真っ直ぐで適度な太さのあるものを選んで、鉋で先を鉛筆を削るように尖らせて杭をつくる。最初は一本削るのに結構時間がかかったし腕も痛くなったが、そのうち慣れてくるとどんどんできるようになってきた。その杭を湿地に打ち込み植える樹の形をつくっていく。そのあと、しなやかに曲がる柳の小枝を杭に編み込んでいく。五十センチメートルくらいの高さまで小枝を編みながら積み上げれば樹の完成だ。これだと、もし畑がうまくいかなくても材料を土に還すことができる。あとは礫と黒土と落ち葉でつくった腐葉土と酸性をやわらげるために石灰をまぜ入れてレイズドベットの畑の完成だ。ワイルドな原野にも馴染むのも良い。調子にのって二つもつくってしまったが、はて、何を植えるか。

できるならタネから育てたいところだが、なにせ小学校の夏休みの成長日記以来のことだから無理はしないで、近郊の農家さんの元気な苗に頼ることにした。手に入れたのはパセリ、イタリアンパセリ、セロリ、パクチー、アーティチョーク、オレンジバーム、バジル、セージだったかな。それにミニトマト。あと、彩りにナスタチウムとマリーゴールドも加えた。彩りといってもナスタチウムはわさびのような味がして食べられるし、マリーゴールドはトマトなどと相性が良く病気や虫から守ってくれるようだ。

中央にミニトマトを植えるとして支柱をつくらなければならないが、レイズドベットをつくるときに使った柳の枝を使ってみた。円錐形に仕立ててみたが自然の材料なのであまり違和感なく風景に馴染んでくれた。そればかりかしはらく経つと支柱から葉っぱが出てきて生きた木でできた支柱になった。トマトもこの支柱が気に入ったのか、マリーゴールドに助けられたのか、ぐんぐん育つて実をたくさんつけてくれた。

毎朝、天気が悪くても悪くてもレイズドベットの畑を見回り、ちょうど食べ頃のを収穫して、朝ごはんに添えるのが日課になってしまった。それでもピークになると二人では食べきれない。やはり、身の回りの自然や人々がもたらしてくれる恵みきちんといいただき、そのうえに日々の彩りをそえる作物をいただく。それがわたしたちの地給自足のスタイルとしておこう。



こういうところに暮らすと、どうしても屋外で何かしてみたくなる。こちらのホームセンターも販売戦略としてそこは織り込み済みで、屋外テラスの組み立てキットとかガーデンパソルと椅子・テーブルのセットだとか、春になると並べはじめ。その手のものを買い始めるとこの原野ではかえってチープな感じになってしまうので手を出さないことに決めた。そうはいっても来るか来ないかは別としてお客様をお迎えするのに外テーブルはぐらいは欲しいので自分でつくってみることにした。長尺の板を並べて、馬と呼ばれる大作業用の台の足に乗せるだけの簡単なものだ。それに、家を建てる時に切った白樺を切ってスツールにする。やや不安定なのといつの間にかキノコが生えてくるのが難点だが、それも味のうちということ。

それでホームセンターの販売戦略から逃れたと思ったが、そうはいかなかった。それがピザ窯だった。コンクリートブロックと耐火煉瓦を積んでつくれる簡単なもので、これだったら私でもすぐにできそうだった。そもそも竹山での生活にピザ窯が本当に必要かというところではない。ピザなんて年に何回食べるものか。それも自分で焼いて。それはわかつているのだが、なぜか気が引かれてしまう。本屋でアウトドアのコーナーを見ると必ず「ピザ窯をつくってみよう」という類の本がある。それも、アウトドアの腕自慢たちがそれぞれに工夫したつくり方を披露してくれ、しばし見入ってしまう。古来、男はかまどをつくることを本能的に欲するのだと勝手に納得して買ってしまった。それが、長い長い試行錯誤の始まりだった。

ホームセンターで手に入れたピザ窯セットは、コンクリートブロックを四段積んでその上に耐火煉瓦を敷き詰めてベースをつくり、その上に耐火煉瓦をコの字に三段積んで、一番上は長モノの耐火レンガを乗せて天井をつくるといういたってシンプルなものだ。一応、水準器も買ってコンクリートブロックの下を砂で水平にすることだけは気をつけたがあとはひたすら積むだけの作業でできてしまう。さっそく窯開きということでは薪の中に薪を積んで火をつけてみた。薪が良い感じに熾火になったところで、自家製生地のピザを焼いてみた。春先のまだ寒い時期だったせいもあるが、生地が焼けてくる前に熾火がみるみる弱くなって、なかなか焼き上がらない。一枚目はなんとか焼けたけれど、二枚目が悲惨な生焼け状態に。泣く泣く家のキッチンでフライパンを使って焼くことになった。まあ、それなりに美味しかったが生地の生焼け感がどうもいただけない。

とりあえずできる工夫として、熾の熱がすぐ逃げていかないようにたき口を一段低くし、奥を一段高くしてみたが結果は少しましになった程度ではかばかない。やはり中をドーム型にして輻射熱を中央に集めるようにしないといけないのか。そうなるとドームの型枠をつくって耐火煉瓦を耐火モルタルで積んでいかなくてはならない。妻は、将来共使い続けるはずはないと思い、せっかくの野趣のある庭に、ピザ窯の廃墟を見たくないと主張する。さあ、どうする。

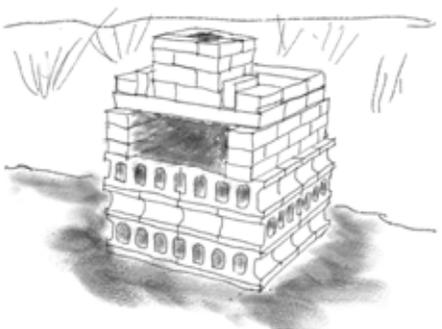


この野趣に富んだ庭をどのようにしていくかは、当初まったくイメージがわからなかったたので、妻の言う通りしっかりと構造物をつくってしまうとあとでやり変えるのに苦労することになる。ここは素直に積むだけの窯でどこまでできるかをチャレンジすることにした。

ものの本によるとピザ窯は四百度くらい高温にする必要があるようだ。オーブン用の温度計で測定すると薪が燃えているうちでも二三百度程度にしかなっていないかった。まずは火力を上げるようにしなければならぬ。そのためには大量の酸素が必要になる。洞窟のような構造の窯では吸気と排気が同じ一つの口になってしまつて、どんどん酸素を送り込めない。そこで煙突をつければるように耐火煉瓦の長尺板に穴をあけることにした。特殊なノコの歯とタガネで穴をあけようとしてみたが、これはこれでなかなか手強く、最後に思い切りタガネを打ち込んだら一部割れてしまった。それでもなんとか穴らしきものができたので煙突をつけてさっそく火を炊いてみた。これは思った通り勢いよく炎が上がるようになって一歩前進することができた。ただ、これでも薪が燃えているうちは良いのだが、熾になつてからは相変わらず温度が長時間維持できない。

煉瓦を積むだけでドーム状の形をつくることができれば窯の内部に熱を貯めて輻射熱も期待できるのだが、煉瓦を台形にハツつて型枠に沿つて積み上げるのは、穴一つ開けるのに苦労したことで腰が引けた。煉瓦を少しずつならして積むことでドームとまではいかないものの少しふくらみのある内部ができないかとやってみた。そうするとあちこちに隙間ができて、そこから熱が逃げそうな気がしてきた。そこで耐火モルタルで隙間を塞ぐことにしたのだが、それが見るからにブサイクな外観になつてしまった。あまり良い例えではないがチエルノブイリの石棺というのがぴったりという感じだ。それでも高温が維持できればよかつたのだが、そうでもない。以前のような生焼け状態にはならななければ、二、三分でパリッと焼ける感じにはならない。

一冬たつてもやはりチエルノブイリの石棺はまわりに馴染まないことは明らかだったので、一旦解体することにした。ドーム状の形をつくることはあきらめて奥が階段状に数段高くなる程度に納め、煙突部分を煉瓦を高く積むことにしてみた。煙突部分を煉瓦で積むことにしたのは、煙突部分も高温の保つことによつて薪の燃焼ガスがそこで二次燃焼することを期待したからである。そうすることで熱効率も高くなるし、煙の発生を最小限に抑えることができる。結果はとても良好で、今までにない火力になり、煙突から煙ではなくロケットのような炎が立ち昇るようになった。窯のなかの温度もほとんどあがり目標の四百度に達した。そうしてしばらく炊き続けると窯の内側の煤けた煉瓦が高温になつて白く変わつてきた。こうなればしめたものである。さっそくピザ生地をこねて焼いてみた。本当に二、三分でパリッと焼けたのには嬉しくなつた。もちろん味は *Buono!*。



一応、目指すピザが焼けるようになったのは良いのだが、案の定、そんなに
出番があるわけではない。そこで、オーブンがわりに使ってみることにした。
冬場は土間の薪ストーブのオーブンでパンを焼いたり、ローストビーフや焼き
魚、さらにはおやつのカレーやクッキーも焼けて楽しいのだが、さすがに初夏
になってからも土間とはいえ家の中のストーブに火をつける気にはならない。
そこでピザ窯をオーブンとして使おうというわけだ。煉瓦を積んだだけの窯な
ので温度管理は運任せのところはあるが、十分使えることがわかった。温度も
四百度などと頑張らなくても良いので炊き上げる時間も短くて済むのも嬉し
い。木々のみどりが風の流れに揺れるのを見ながら、パンの焼ける匂いが漂っ
てくるのを待つ時間は、贅沢この上ないと心から思う。

もうひとつ冬の土間の薪ストーブの楽しみは、明け方のひんやりとした寒さ
に布団を出たくない気持ち振り切って土間に向かい、薪ストーブに火をつけ、
そのパチパチという明るい音を聴きながらお湯を沸かして入れるコーヒーマ
と時である。気分の問題だとは思いますが薪ストーブで沸かしたお湯で入れるコー
ヒーは一段と美味しい気がする。それを初夏になってもできるとなると、その
まま外のテーブルでコーヒーを飲みながら、明るい様々な声で鳴き交わす鳥の
声に耳を傾ける時間を持つことができる。

そこで、ピザ窯の隣に煮炊きのできる薪かまどをつくることにした。これも
ピザ窯と同じように、煙突部分で薪の燃焼ガスを二次燃焼させる構造にした。
そうすることによって、焚き口のところで煮炊きできると同時に、煙突の先
から出る炎でも煮炊きができるのだ。この二口かまども現在の形になるまで何
度もやり直して、効率的な空気の取り入れ口の工夫や、煮炊きに適した煙突の
高さの調整などをした。そういう試行錯誤ができるのは、単にコンクリートブ
ロックと耐火煉瓦を積んだだけのもののでつくるということにこだわった結果
だ。折に触れダメ出し指摘をする妻のひとことに感謝しなければならない。く
やしいけれど。

これらのピザ窯と薪かまどは、正直、そう沢山の出番があるわけではないが、
心からあって良かったと思ったのは、二〇一八年九月六日の胆振東部地震の時
だった。地震直後から発生したブラックアウトは翌日も続いたのだが、煮炊き
には不自由することがなく済んだ。薪さえあれば、暖も取れるし、灯にもなる。
そして煮炊きにも不自由しない。趣味のような薪ストーブやピザ窯であるが、
それがいざという時の支えになるのは嬉しい。災害への備えといっても多くは
喉元過ぎれば暑さを忘れるように、持続的に意識し続けるのはなかなか難しい
が、日頃の楽しみがいざという時の備えになるように考えると意外とできてし
まう。

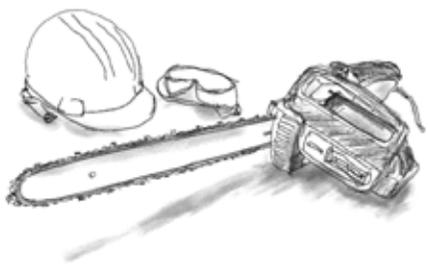
ピザ窯の出番はそれだけでなかった。これだけ粘土土質の土だらけなら陶器は
できないかと思って、煙突の位置を後ろにもってきて陶芸窯に変えて見たら、
千度は無理だったけど、八百度まで上げることができたのはびっくりした。



薪ストーブは、あくまで補助暖房で時々調理に使う程度のものであるが、何度も繰り返しになるが、それでもつくづくあつて良かったと思う。ただ補助暖房といっても一冬で使う薪の量はおおよそ三、四立米が必要で、ちょうど長い軒下に収まるくらいの分量になってしまう。最初の年は家を建てる時にやむなく切った木が使えると思っていたのだが、そう甘くはなかった。薪ストーブを買った店に言わせると、薪は乾燥させなければタールが出てストーブを痛めるとのこと。それも、木の芯まで乾燥させるには割った状態で乾燥させなければならぬようだ。薪を買わせる口実かと勘ぐったりしてもせつかくのストーブを痛めてしまったては元も子もないので断念することにした。そのかわりその店から薪を買ったら三立米で七万円くらいになった。薪も結構な値段がするのだ。そうとわかれば、翌年は自分で薪をつくるしかなくなると思つて頼みの町内のMさんに相談してみた。まずはチェーンソーでストーブに入れられる長さに丸太を切つて、それから斧で割り、半年から一年乾燥させてようやく燃やせる薪になるとのこと。ただし、乾燥させすぎると木の油も飛んでしまつて火持ちが悪くなるようだ。木の種類によつて燃え方も違ふらしく、薪にしようとした白樺は、火付は良いが火持ちが言われないと言われてしまった。ナラの木は良いようだが、シイタケのホダ木に適しているので燃やしてしまうのはもったいないとも言われた。木を薪にするといつても奥が深い。

さて、薪にするためにはまずチェーンソーが必要ということだが、やたらハードルが高くなつてしまった。確かに家を建てる際に切った木の太さからするとノコギリでは日が暮れるか、腕が疲れて使い物にならなくなるのは目に見えていた。さてどうしたものか。Mさんのアドバイスは的確で「石塚さんはチェーンソーを使うのは初めてだと思つたので、エンジン式じゃなく電動式にした方がいいね。替え刃もついて手頃な値段のものがあるので、それにしたら。」とのこと。さつそく勧められたものを探しにホームセンターに行つたら、いろいろな種類のチェーンソーがずらつと並んでいて、さすがここのホームセンターは違ふと感じ入つてしまった。お目当のものもあつて、ヘルメットとゴーグルと一緒に買つてきた。戻つてさつそく開封すると、素人にはちよつと尻込みするような立派に凄みのあるチェーンソーだった。

付属のマニユアルを見ると、ほとんどが注意事項で特にチェーンソーが木に跳ね返されるキックバックというのが怖かった。これまでも仕事で行つたまちで、チェーンソーで大怪我をしたとか、死んだ人がいるという話を一度ならず聞いていたのでなおさらだ。恐る恐るスイッチを入れて見るとエンジン式のチェーンソーのような爆音はしなかったが、それでも刃の並んだチェーンが高速で回のを見ると、本当に自分が使えるのか正直腰が引けた。でも、そう言つてももしようがないので試しに切つて見ることにしたが、血しぶきのように木の切り屑が飛び散るのでアドレナリンがドバツと出た。その勢いで次を、そして次をと切り進むとちよつとした快感に変わつてきた。



当時チェーンソーで切っていた丸太の太さは大きいもので直径二十五センチメートルほどで、今から振り返ると大げさな気がするが、切るのになんか神経を使い疲れ果てた記憶がある。我が家の薪ストーブは少し小ぶりなので丸太は三十センチメートルに切り揃えるのだが、それを玉切りと言うそうだ。少ないとはいえ一年分の薪をつくるのだから玉切りの数も相当になる。それに、最初の頃は丸太を玉切り用の台に乗せて切るようにしていたので、太い木は重くて台の上に持ち上げられなくて切るのを断念したこともあった。

なんとかチェーンソーで怪我をすることなく玉切りが終わったら、今度はそれを薪のサイズに割らなければならない。薪を割るといったら斧を振り下ろすイメージがあるので、早い段階でホームセンターの斧コーナーに行つて目星をつけていた。大草原の小さな家で父親が振るういかにも斧というものが並んでいた。太い柄がわずかな曲線を描いていて見るからに美しい。さつそくそのひとつを持つてみたらズシリと重い。とてもこんなものを振りかざして打ちおろすなんてことはできそうもなかった。その脇に、グラスファイバー製の柄のものがあり、そちらは軽くて扱いやすそうだった。柄が真っ直ぐで鮮やかな黄色というのが残念だが扱えなければ始まらない。そこで買っておけば良いものを玉切りが終わつてからじっくり選ぼうと先送りにしたのが間違えだった。いよいよ薪割りだとワクワクした気分で売りに行ったら、目をつけていた斧は売れてしまつて無かった。残っているのは、「どうだい、あんたに使えるかね。」と言いたげな重い斧ばかり。呆然と売り場に立つてばかりいても薪はできない。とにかく買うしかない。それでも、レジから駐車場の車まで買った斧を持つて運ぶ間に何度、本当に使えるかと思つたことか。

結果的にはそれが正解だつたとあとになってわかつた。最初はまったくダメだった。何がダメと言つて斧が木にまともに当たらないのだ。重い斧を振り上げて力一杯叩きつけるところに当たらない。下手に空振りすると自分の足に当たつてしまうので、屁っ放り腰で斧を振るのもいけないのだが、とにかく木の芯に当たらない。それも刃が斜めに当たつたりするので、その都度、手に痺れが走る。木にうまく当たると衝撃が少ないのだが、あたり損なうと痛い目にあう。

それでも、せっかくな買った斧を捨てて高い薪を買うのは意地でもいやだったので我慢して続けていると、そのうち偶然芯に当たることがある。その時、パンと割れるとまんざらでもない気分になる。まあ、二度偶然は続かないのだが。やっかいなのは芯に当たつてもパンと割れずに、刃が木に刺さり込んでしまうことがある。刃を抜こうと思つてもなかなか抜けない。思わず木ごと振り上げて叩きつけようかとも思うが、体力に自信がないので斧をなんとか抜こうとするのだがなかなか抜けない。なまじ体力があつて木ごと振りかざしていたらもつとひどいことになつていたかもしれないと後から思うが、刃が食い込んで抜けなくなった斧も惨めだ。



そうこうしているうちに、少しは薪らしきものができてきた。やっているうちに木によっては割りやすい方向と割りにくい方向があるのがわかってきた。いわゆる節というものだ。木の幹から枝が出た部分は年輪が幹と枝でそれぞれに作られるのでそれらが重なってとても硬くなるのだ。そこに当たると斧が跳ね返されるほど強くて割れない。節は枝として育って見た目でわかるものもあれば、枝になりきらずに幹に埋もれた隠れ節もあるので厄介だ。最初は、見た目でわかる節は、それを外して斧を当てれば良いと思っていたのだが、幹の芯の方から枝はできてくるので、そううまく外して当てることはできないのだ。外仕事の達人のMさんのアドバイスだと幹の芯と枝の芯がおったところをねらうのが良いという。そんなことしたら、かえって割れないのではと思ったが、実際にやってみると意外とパンと割れることがわかった。割れた断面を見ると幹と枝の年輪が一体化した造形に、生命の力を感じてグッとくる。

だんだん薪割りに慣れてくるともつと太い木を割ってみたくなる。さすがに太い木は一発でパンと割れることはめつたにない。同じところに何度も斧を当てて割るという方法もあるとは思うのだが、あいかわらず思ったところに当てられないので諦めた。いろいろ試行錯誤してみた結果、ケーキカット方式が私にはあつているようだった。ホールケーキを切り分けるように芯から放射状に斧を打ち込むのだ。最初は何の手応えもなく跳ね返されるのだが、二度三度ずらして打っているうちに、打ち込んだ力がすつと木に受け入れられる時がくる。おそらく少しずつ木の年輪の繊維が断ち切れ、ある時弱い方向に深く亀裂が入るようになるのではないか。そうなると太い木も部分的に割れて、あとほどんだん楽に割れるようになる。そこまでできるようになるとまんざらでもない気分になる。

Mさんによると、太い木は芯に当てるのではなく、端から削ぎ落としていく方法もあるという。確かにそうすると年輪の抵抗は少なくなる。徐々に端から削ぎ落としていくと太い木の径も細くなってくる。そうなれば普通通り芯に当てて割ることもできるようになる。

そうこうして薪割り三年目になったら斧の柄が折れた。相変わらず思ったところのうち下ろせず刃の付け根の部分の柄を木に当てているうちに柄が劣化してついに折れてしまったのだ。まあ、それだけ一生懸命薪割りをした結果だと思ふことにして斧を新調した。ちよつと季節が悪くて店頭の斧の品数も少なく、前より重い斧しか残っていなかった。まあ仕方がない。

新しい重い斧を振る方法を少し変えてみた。それまでは斧を振り上げて振り下ろす方法だったが、今度は後ろに大きく振って円運動のように振りかぶるようになった。振り下ろす時に力を入れるのではなく、振り下ろす時に腰を沈めて重い刃が落ちる速度を加速させるのだ。そうすることで木に当たるときに余計な力が入らないので正確に芯に当たるようにもなった。薪は力で割るのではなく斧の重さで割るといふことのようにだ。



薪ができたなら今度はそれをストックしておかなければならない。田舎暮らしの家の軒下に薪を積んであるあれだ。両端に積む薪の高さにあつた支柱を立てそれを支えに薪が崩れないように積むようだ。ところが、最初の年に買った薪を運んできた人たちは、そんな準備をしていない我が家の軒下にいとも簡単にヒヨヒヨいと積んでいく。それでは崩れてしまうだろうと思つたが、そこは積み方にちよつとした工夫があつた。両端の薪を積む時にところどころ横向きに薪を積みそれをちよつと内側に傾いたようにセットするのだ。そうすることによつて、両端の薪は内側に転がる力が働いて互いに突つ張り合い崩れることが無いのだ。

翌年、試しに同じ方法で積んでみたが意外と難しい。どうしても両端が積むうちにだんだん内側に傾いてきて美しくない。支柱が無いのに両端がまっすぐ積み上がっているのが美しいので、そうでなければ単に積んだだけに見える。まあ、人に見せるものではないのだが自分的に納得がいかない。横向きに積む薪を少し外側にせり出させるとなんとかそれらしくなつてきた。

次の問題は、どこに積むかだ。冬の便りが届く頃には、薪ストーブの置いてある土間から軒下伝いに行き来できる縁側に積むと便利で、一応、一冬で焚く薪の量を積むことができる。ただ、夏の間とか季節の良い時に縁側が薪に占領されているのはいただけくない。幸い、敷地は広いので積むところはどこにでもあつた。ちよつと食卓の窓から見える木々の一角に積んでみることにした。

都心のマンションのベランダで使つていたすのこ板を下に引いて地面からの湿気が薪を腐らせないように自分なりに考えてみた。そこは野ざらしになるので積んだ薪の上にポリカーボネートの波板を乗せ雨も防ぐことにした。その屋根を固定するのに木の枝を乗せ、縄で下のすのこ板に結びつけた。我ながら立派なものできたと思ひ自賛。食卓の窓から遠くにオブジェのように見えるのも悪く無い。

妻が「それを木熊(きぐま)と呼ぶことがある。」と教えてくれた。木々に囲まれて立つ姿は、熊と言われればそう見えなくもない。それに「薪を積んだ」というよりも「木熊をつんだ」という方がなんとなく様になる。すつかりこの木熊という言い方が気に入つて、まわりの人に言いふらしていた。

そのように調子に乗っていると足を掬われるのが常である。

一年、風雨と雪に晒された木熊は、縄が切れ屋根は飛ばされ、すのこ板の効果などどこえやらという感じで下の薪が腐りかけ、凸凹した地面のままに積んでいたのであちこち崩れてしまった。厳しい自然に耐えた老熊の威厳は、少しも感じられず、単に素人の薪積みの悲しい末路を晒すことになった。

すつかり野のなかでも薪積みに自信を無くし、大人しく縁側とは反対の屋根の下に支柱付きの薪積み台をつくつてそちらに大人しく積むことにした。そんな時に、町内のKさんから「どこかで円形に薪を積んでいるのを見たよ。ああいう積み方もあるんだね。」と言われた。



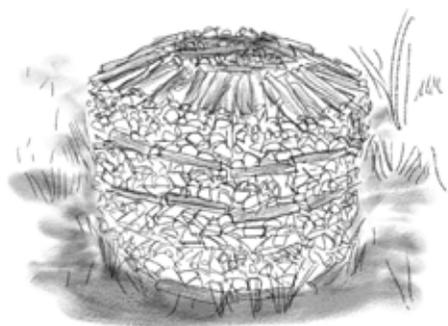
薪を円形に積むというのはどういふことか、さつそく調べてみた。シベリアで見たとか、スイスで見たとかいろいろある。「スイス積み」という名前もよく出てくるのだが、あちらでは「holz hausen=木の家」と言うらしい。積み方を教えてくれるテキストや動画もいろいろあるが、それらによると薪を円形に並べて積んでいき、円の内側の空洞にも薪とか枝とかを詰めていくというシンプルなものだ。これならできそうだし、形も悪く無い。基本は円筒形なのだが、ものによっては上にいくほどゆるやかに広がっているものや逆に狭まっているのとか形は微妙に個性がある。また、薪のいろいろな形の断面が円のカーブに沿って表情をつくっているのも良い。なかには枝だけで積んでいるのもあつて大小の丸で壁ができているのはちょっとしたアートだ。

さて、どこに積むか。こんな形なら草や木々に囲まれたところにこそ似合う。昨年の反省も造形美への憧れの方が優つてしまうのは困つたものだ。場所を決めたら円形に草を刈りさつそく積み始める。昨年の経験のあるし、少しぐらい凸凹があつた方が味が出るような気がして、直線上に積み上げるより精度が要求されない分、楽だと思つた。ところが思わぬ落とし穴があつた。やはりね。

円筒形に積むということは、筒の内側の円と外側の円では長さが違わねくたはいけない。ほぼ同じ幅の薪を積んでいくとなると、どうしても扇状に外側が開いてしまう。その外側の隙間を埋めるように次の薪を積んでいくと徐々に外側に傾いた状態になってしまうのだ。そのまま積み続けるとどんどん傾斜は急になり積んだ薪が滑り落ちてしまう。積む薪の傾きの調整は、昨年の木熊積みでやった方法を応用し、ところどころ外側の円に沿つて横向きに薪を置き、それを枕にして次の薪を積むことにした。そうすると外側への傾斜は修正され地面と平行に戻るのだ。そうやってどんどん積んでいったら、中の隙間に薪や枝を入れて崩れにくくしなくてもいけそうだった。

出来上がった円形の木熊はなかなかの造形で、環境アートのようだった。若い頃に好きだったニルス・ウドとかアンディー・ゴールズワージーといったアーティストの名前が思い出されて、一人世界に浸つてしまった。夕暮れになったらランタンを持ち出して円筒形の筒の中に置いて、木熊にできたたくさん薪の隙間から漏れる光を楽しんだりもした。そんな木熊も冬はすっかり雪に埋もれて雪の小山になってしまったが、それも季節の風景のひとつとなっているのでよしとしていた。

そんな思いは、春の雪解けとともに消えて後悔だけが残つた。雪の小山から出てきた木熊はデジャブのように昨春の無残な姿に似てあちこちの薪が崩れてしまつていた。さらに設置した場所が最悪で、春の雪解け水にすっかり浸つてしまい地面に近い方の薪は見るからにそう遠くない先に土に還らんとしていた。草や木々に囲まれた場所に木熊が凜と立つ姿は風景としては心を打つものがあるが、良い薪をつくるという視点からは最悪だと二度目にしてようやく納得することになった。



同じ過ちを繰り返さないように木熊は絵になるかどうかより水はけの良いできるだけ平らな場所を選ぶことにした。そうなると適地は限られる。家を建てるための重機を入れられるようにつくった駐車場は厚く碎石を敷き詰めているので水はけもよく条件は満たしているのだが、なんせ殺風景の上ない場所なのだ。植物を植えようにも碎石を掘り返して土を入れなければならぬので手が出せないままでいる。そんなところに木熊を積んでもなあという気持ちは捨てて実を取らなければ冬場の良い薪が手に入らず薪を買い続けなければならぬことになる。

それに、この頃になると町内のMさんが、「石塚さん、薪にする木はいらないかい。」としきりに声をかけてくれるようになってきた。あちこちから「冬になる前に、この木を切っておいて欲しい。」という依頼があつて、切った木の始末に困っていたこともあるのだらうけれど、ありがたい話で断る理由がなかった。そういうしているうちに秋も深まるころには、大小の丸太や枝が敷地に山積みになってしまい、それをなんとかしなければ冬の除雪に支障が出る状態になったという事情も後押しした。

積む場所を決めるのも周りの風景など手がかりがないので、とりあえず車の出入りの邪魔にならないところにした。場所が決まればこれまでの試行錯誤の積み重ねがあるので手早く積むことができた。いただいた丸太などで薪はたくさん出来たので、結局、三基つくることになった。それに、作り方の情報にならなくて木熊の中の空洞は細い枝をぎっしり詰めて崩れにくくしてみた。

出来て見ると、これまで見て見ぬ振りをしてきた殺風景な駐車場に何かしら表情が生まれてきた。特に、そのうちの一つを枝を主に積んだ木熊にしてみたのだが、これが柔らかな曲面をつくってなかなか良いのだ。木熊の姿が映えない場所だと思っていたが、逆に木熊が風景をつくる力があつたということだ。

よくデザインされたランドスケープというのはいろいろある。特に田舎暮らしとガーデニングは対のような関係に捉えられる。しかし、この湿地同然であった敷地で絵に描いたようなガーデニングは無理だし、そもそもあまりする気もなかった。一方で、日々の生活の中で必要とされるものが巧まずに優れた風景をつくるということがある。小さな農村や漁村には、そのような風景をまだ見ることができが、ここ竹山でのランドスケープデザインのひとつの方向性が見えてきたような気がした。

一冬越して、春先になっても水に浸ることもなかったし、崩れてもいなかった。少し気温も高くなり始めた頃、枝を積んだ木熊の足元から小さな動物が顔を出しているのを見つけた。野ネズミだ。ネズミといっても大型の灰色のネズミではなく、小型で茶色の愛らしい表情のネズミである。そのネズミは木熊の中から周りを伺うとちよこちよこ足早に外に出てきた。と、続いてその後を追うようにもう一匹。さらにもう一匹。この木熊は冬場暖かく安全に暮らせるネズミ一家の住処になっていたのだ。これはまずい。



竹山に家を建てた翌年、小さな畑作りを手伝ってくれた町内のMさんから「石塚さんのところで木は植えないのかい、マルメロなんか香りが良くていいよ。」とすすめられた。Mさんからの提案は疎かにできないので畑の近くに少し大きめの穴を掘ってMさんからもらった土を入れて植えることにした。木の苗を扱っているところを数件見て歩くうちに、食べられる実のなる木も植えたくなった。その時植えたのはマルメロの他、梅とブルーベリーとカシスだった。その後、梅とマルメロは実ができるまでには時間がかかるが毎春、香りの良い花を咲かせて家の周りに彩りを添えてくれた。ブルーベリーとカシスはすぐに実がでる年々収穫も多くなってきた。

さらに欲を出してプールの苗を二株植えた翌年の春。雪解けとともに姿を現した木々の根元の様子がなにかおかしい。妙に白っぽいのだ。近づいて良く見ると細かに削られた跡がある。それも根元を一周し高さ十センチメートルくらいがそうになっているではないか。プールに至っては五十センチメートルほどの苗の全てが削られていた。Mさん曰く「これはネズミにやられたね。」

木の表皮のすぐ下には、葉が光合成でつくった炭水化物などのエネルギー源を根に運ぶ重要な管があるのだが、そこをやられてしまったのだ。土の中の水を葉に運ぶ管はさらに奥にあるので傷つけられていなかった。なので、その年は何も無かったかのように花を咲かせてくれた。ただ、翌年になると元気がなくなりマルメロは葉を落とすこともなく立ち枯れてしまった。梅は蕾をつけてもう一年かなと思ったが、その蕾も硬いまままで終わってしまった。

木熊の下からネズミの家族がぞろぞろ出てきたときには、これ以上食べられてしまわないようにすぐに木熊を解体し、芯の小枝を取り除き風通しの良い状態に積み直した。そして冬を前にした雪囲いの際には、木の根元と土の間を覆うように頑丈なシートを被せておいた。ただ、それでも何本かのブルーベリーが犠牲になってしまった。このような食害はネズミだけでなく、ここK市ではエゾシカ、アライグマ、キツネなどによる農業被害は年間延べ五・五ヘクタールにもなるようだ。

植物にダメージを与えるのは動物だけではない。あれは竹山での最初の夏だっと思うけど、敷地のなかで一、二をあらそう大きな木であるハンノキが夏の盛りなのに葉が茶色になってしまった。良く見ると葉はレース模様のように葉脈を残して向こうが透けて見える状態になっていた。近くには小さな黒い甲虫がウヨウヨうごめいている。調べると文字通りハンノキハムシというものらしい。この虫は大発生することがありほとんどの葉は食べられてしまう。なんせ、葉に産み付けられた卵が孵化して幼虫になると一ヶ月ほどもりもり食べ続け、その後土に潜り蛹になるのだが、二週間ほどで羽化して成虫になり、また、冬が来るまでもりもり食べ続けるのだそうだ。ハンノキが枯れてしまうのではと心配になり駆除を試みるがきりが無い。これが二、三年続くとピタリといなくなり、ハンノキもその間、枯れることはないのだそうだ。



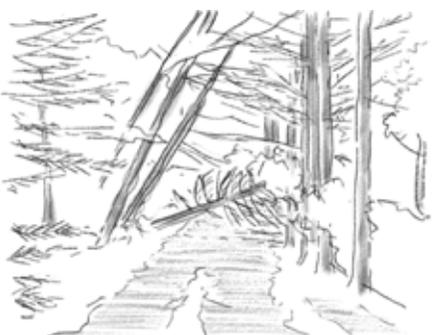
敷地の中を歩いていると時々、比較的太い枝が落ちていることがある。風で折れたのかなと思っていたがそうでもなさそうだ。木々を見上げてみると枝の付け根の樹皮がきれいに無くなっているのが目についた。ネズミはあんなに高いところまでわざわざ登っていくとも思えなかつたし、ブルーンだとかの若木に比べると硬くて不味そうだ。現場を押さえたわけではないが、どうもアカゲラやコゲラなどのいわゆるキツツキか、ゴジュウカラの仕業というかお仕事のような気がする。これはまったくの推測だが、そもそも枝の付け根はその先の枝や葉の重みや風などの力に耐えなければならぬので亀裂が得意やすい。ほんの小さな亀裂でも、できてしまうとそこは菌類や昆虫の絶好の棲家や栄養になる。鳥は樹皮の下に潜む昆虫を狙って樹皮を剥ぎ取りにかかる。そうすると水分や養分の行き来が妨げられやがて枝は枯れて落ちる。そんなところかもしれない。木も元気な枝や葉に生きる力を集中させたいところだが、自分では剪定ができない。それを菌類や昆虫や鳥が手伝っているのではないか。ここに暮らしてただただ樹木や草の様子を見てみると、そのような意図せぬ繋がりがいろいろなところで感じられる。ただ、ときには荒々しい試練もやつてくる。

二〇一八年の九月五日の未明、前日に近畿地方に大きな被害をもたらした台風二十一号が日本海を北上し、ここでは珍しいゴーツ、ゴーツという唸り声がかしぱらく続いた。朝になれば雨風も収まっていたが、家から出る道に大きな木が何本も倒れ行き来ができない状態になっていた。敷地のなかも見慣れた景色が少しおかしいと感じ見て回ると、あちこちに根ごと土から引き剥がされた木が何本も横たわっていた。あれだけどっしりと立っていた木がいとも簡単に倒されているのを見ると、地球の大気の移動である風だが、その力の凄まじさに怖気付く。

空を見上げると鬱蒼としていた場所が、妙に明るくなっていた。それまで空を覆っていた木々の葉が木ごとなくなってしまうのだから。その後どうなるのか。おそらく倒れた木のうちヤナギなどは生命力が強いので根が少しでも土に残っていれば、すぐにでも新しい芽が出て枝になっていくだろう。日当たりの悪かったところは、春先のまだ木々の葉が茂らない前に目覚めるスミレがほぼ独占していたが、これからは、そうはいかなくなるかもしれない。この時を待っていたヨモギやセイタカアワダチソウが準備を始めているだろう。

このように大風、大雪、洪水、大火事など、それまでの環境を一変させる出来事を「攪乱」というらしい。この攪乱があるおかげで、その環境で優位な種だけが占有を続けるのがリセットされ、生命の更新が促進されたり、種の多様性が保たれるということか。それにしてもやるのが荒っぽい。

台風が通り過ぎた翌六日の未明に、震度五弱の地震に襲われた。胆振東部地震だ。我が家の被害は、棚のガラス器が床に落ち飛び散っただけで済んだが、震度七の激震に襲われたところはいたるところで山体崩壊が発生し、木々だけでなく多くの方の命が失われた。



昨年春には集中豪雨があり一時間当たりの雨量としては過去最高を記録した。また、冬には二十四時間降雪量として過去最大を記録した。雪はその後も断続的に降り積もり今までにない積雪量になってしまった。これには樹木も悲鳴を上げ、多くの木の枝が折れてしまいヤナギの木などは幹自体が裂けてしまったものもあった。

私たちが竹山に暮らして五年であるが、その間に、大風、地震、豪雨、大雪といった攪乱を体験したことになる。過去もこんなに頻繁に攪乱があったのだろうか。攪乱は再生と多様性を保つための仕組みだとしても、頻度や規模が大きくなると、自然の再生力が追いつかない事態にならないか心配になる。

錯乱といえば、私たちが暮らすこの土地も人の手によって引きおこされた錯乱から始まっている。なだらかの丘陵を掘って埋めて平らな土地をつくるのに災害の威力とまでは言わないけれど、重機の力でさほど時間をかけずに済んでしまう。それも植物が再生するのに重要な表土をほとんど剥ぎ取って形を整えてしまう。幸いにして、この開発は規模も小さく、その後には続くことがなかったから、まわりの自然の力をいただいて半世紀かけて再生しつつあるが、もしこれが、規模も大きくなって続けに拡大する開発だったらこれもどうなっていたか。人が手に入れた重機という道具は、錯乱と同様の環境変化を頻繁に際限なく引き起こすことができるのだ。そして、その結果は再生と多様性とは異なり、不可逆的にして均質な場所になってしまう。

この土地を手に入れたときにいただいたアドバイスに中古のユンボを手に入れるべきというのがあって、妻が苦い顔をしたのを思い出す。この程度の規模の土地であれば、小型のユンボさえあれば掘るのも運ぶのも積み上げるのも燃料さえあればなんでも簡単にできてしまうだろう。そして、やってしまった結果には長い時間付き合わなければならぬことになる。人の手が入るということは、大なり小なり攪乱的な行為であるが、その結果については再生と多様性を失うものであってはならない。この竹山で時間を過ごすうちにそういう気持ちになってきた。

人の手が入るといっても手作業であれば自然の再生力の方がはるかに勝る。草を刈ることひとつとっても、鎌で刈る程度であればちょっとぐらい妻が大切にしていた草花を切ってしまったも、いつの間にか知らん顔で戻っていてくれる。さすがに太丸太の玉切りはチェーンソーがなければ苦しいが、ここでの作業はできる限り手作業にこだわることにした。そうすることが自分自身にも良いことがある。おかげで食事制限などせずに自然にダイエットできるし、年をとっても筋肉を維持できる。S市のまちなかにいたときは近くのホテルのジムに通っていたこともあるが、それに比べてお金もかからないし、筋肉自慢のおじさんたちの圧に耐えることもなくて済む。なにしろ気持ちが良いのだ。清々しい空気をいっぱい吸って、穏やかな風景に囲まれ、汗を流す。こんな贅沢を味わわない手はない。



湿地状態だったこの土地も、住み始めて数年経つと水がたまっているところが増えて見当たらなくなった。歩くとなブツ、なブツとしていたのが、今ではフニユ、フニユという程度になった。当初、こんなところで暮らすと湿気で体を壊すのではないかと真面目に心配していたのが嘘のようだ。それにともなう景色も変わってきた。湿地の象徴のようだったガマの群落がまばらになってきたのだ。そしてその翌年には2カ所に数本が見られる程度になり、その翌年には姿を消したのだ。水環境がちよつと変わるだけで植生はこんなに劇的に変わるのに驚いた。同時にガマの特徴的な穂が見られなくなったことに、ちよつと物足りなさを感じた。わがままな話であるが、ガマが消えただけでなくまだ名前も知らなかった草花も種類が減って、数種類のイネ科の植物と、野菊とセイタカアワダチソウとハンゴンソウがやけに目立つようになってきたのだ。以前、植物の専門の方から湿地は陸地と水辺の両方の性質を持つことから、多様な動植物が見られ生物多様性の観点から重要な環境だと聞いたことがある。ああ、それはこういうことなのだとか納得した。

ただ、春先の雪解けの時期になるとそこかしこに水たまりができるのは以前のままだった。それも一ヶ月も経たないうちに消えていくのだが、あるときそれを二階の窓から眺めているとあちこちにある水たまりが連続した点としてひとつの線が見えてきた。造成された土地なので平坦な土地と決め込んで見ているが、そのなかに水がたまりやすい低いところがあることがわかってきた。そういう目で改めてこの土地を見てみるとかつての丘陵の傾斜に沿ってかすかに北側の隅が高くなっていて家を建てたあたりが一番低く、また南の隅にかけて高くなっていることがわかってきた。水準器で計測したわけではないが、人の目でもそのような微妙な傾斜はわかるものだ。それに考えてみれば北の隅から東の隅に引かれた側溝に水が流れているのは、そのような傾斜があるからに他ならない。その時に、北の隅から家の周りを経て西の側溝に流れる川をつくることができるのではないかと閃いた。そうすれば、水辺の環境ができ以前の植生には戻らないにしても多様性は少し回復し、景色も豊かになるのではないか。そう思ったのだ。さっそく妻に提案してみたら、返事は以外にも「良いね」だった。「川ができれば池もできるかもしれない」と妄想を広げたのは彼女の方だった。確かにジベルニーのモネの庭とはいかないにしてもスイレンの咲く池ができたならこの土地にも彩が加わる。それにここは粘土質の土地なので川や池の底に人工的なシートを引く必要もない。

問題は、どうやって川を引くかだ。ウンボをつかって掘れば一週間もかからずにできてしまうが、それはしないことに決めたばかりだ。それに、どれくらい幅と深さの川にすれば水が少ない時期にも川が枯れずにすむか。それには、試行錯誤が必要だと感じた。じゃあどうする。私の手元にあるのは先の尖ったスコップが一丁だけだ。掘る川の長さは少なく見積もっても百二十メートルはある。それをスコップ一丁で掘れるのだろうか。



ここに暮らして思うのだが、どうしたら良いか迷う時は、とにかくやってみることだ。やってみてわかることもあるし、思い通りにならなければやめれば良い。それも人一人の力でできることの良さである。

まずは川のルートを決める必要がある。普通は上流から下流まで水勾配を確かめながらルートを決めるのだが、測量する道具もないし、ホースに水をはって高低差を確かめるのも、この広さではやる気がしない。あれこれ思いながら雪解け水がたまつたところを実際に歩いてみることにした。歩きながらきながら水たまりを追ってみると、確かに飛び飛びであるが繋がる線が見える。いや、見えるような気がした。この見えない線に従って歩き続けると起点となる側溝までつながりそうだ。ここまでくれば自分の勘を信じて掘ってみるしかなさそうだ。

最後まで迷つたのは側溝のどこから川を始めるかだ。一番勾配が取れるのは当然、北隅の側溝の起点になる場所だ。ところがそのあたりはかろうじて水芭蕉が残っているところでそこを掘り返すのは気が進まなかった。その水芭蕉の小さな群落を過ぎた側溝の下流に起点を決めた。

掘り始めるのは下流からと決めた。私がまだ小さかった頃、実家のまわりは未舗装で雪解けの時期にはあちこちに水たまりができていた。その水たまりから棒切れで細い溝を刻んで川に見立てて水を流して遊んだのを思い出す。水たまりに向けて下流から溝を掘って水たまりの水が流れたら成功。次の上手の水たまりからまた溝を掘って水たまりがあつたところに繋げる。そして水が流れたら成功。それを繰り返して上流の起点まで行きつく作戦だ。まあ、原始的試行錯誤法だが、これは経験的にも確実な方法だと思つた。

最初の水たまりの水が流れた時には、おそらく私の目は子供の頃の水遊びの時のようにキラキラと輝いていたのではないだろうか。粘土質の土はスコップも入りやすく結構いけるような気がした。ただ、その期待はすぐに壁にぶつかった。木の根っこだ。大きな木のあるところは幹のまわりを大きく迂回するようにルートをとつたが、それでも太い根にあたる。その根を切ってしまう勇氣はなかつたので根の下の土を掻き出して水が流れるようにした。それは結構大変で太い根からは無数の細いヒゲ根が土の中に網の目のようにあつて、それを先の尖つたスコップで切りながら掘らなければならぬのだ。それでも、次の水たまりまでという小さな目標があるからなんとか挫折せずに次に進むことができた。次に当たつたのは石だ。隣人も言っていたがここの土地からは丸石が沢山出るのだ。かつて、ここは海の下だつたことがありそれがつながり川ができた名残だと思う。スコップを突き刺してカツンという感覚が手に伝わったら当たりだ。どんな大きさでどこまで深く埋まっているのか探りながら掘り起こすことになるのだが、中には結構、手こずるものがある。

夢中になって掘っていたら、木々の間から我が家が見える場所まで来た。このペースで行けば一週間かからずに川は掘れるかもしれない。



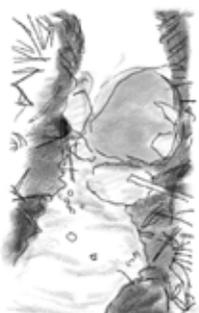
川を掘ると言っているが、幅はせいぜい三十センチメートルで、深さもスコップひとつが入る程度。それじゃ川というより溝ではないかと言われそうだが、そもそも水源が側溝を流れる水なのでしようがないのだ。町内のMさんからも、もっと広くしないのかいとダメ出しされているが、こればかりはどうしようもない。川幅を広くすればその分水深が浅くなり、夏の水が少ない時に川底が露出してしまう可能性がある。そんな規模だが、私たちにとっては立派な川なのだ。

時々、溝を水たまりまで掘ってもたまった水がうまく流れないことがある。原因は勾配が上流から下流にうまく取れていないからなのだが、どう修正すれば良いか。最初のうちは山勘であちこちスコップでさらってなんとか流れるようになっていたが、そのうち溝を掘る段階で足の裏の感覚で傾斜を把握できるようになってきた。人にはまちなかの生活で使わなくなってしまう感覚がいろいろ眠っているんだと思う。何かに夢中になってそれが蘇るのは気持ちが良い。これも原始的試行錯誤法の良いところか。

この方法の良いところはいろいろある。そのひとつに川のルートデザインがある。最初から計画的に掘り進めようとするのと全長の高低差と比較して程よい高低差の二点を探して、その間を直線的に掘ることになる。そうすれば結果的に最短のコースとなり労力も節約される。ただ、人工的な水路のようなデザインになってしまう。そこに曲線を入れようとするとなぜとらしくなる。それに対して原始的試行錯誤法は、自然にできたくばみを読み取りそれを繋いで掘っていくのでその地形に合わせて自然と水が流りたい形になってくる。そもそも自然に川が流れをつくっていくのと原理は似ている、自然の川は上流から形を決めてくるが、原始的試行錯誤法は下流からつくっていくという違いだ。

家の近くに川を掘る際には、掘った土を家側に堤防がわりに積んでみた。川を掘ったために増水時に家のまわりが水浸しになっては元も子もない。川上に行くにしたがって勾配も急になってきて上流の雰囲気が出て来た。結局、水源の側溝に行き着くまで四日で済んだ。あとは、側溝に堰をつくってコンクリート壁を壊すだけだ。コンクリート壁を壊すのには外かまどを作る時に手に入っていたコンクリート用のノコギリとタガネが役にたった。切れ目を入れたコンクリート壁に最後、金槌を打ち下ろすと側溝から掘った溝に水が流れ始めた。流れ落ちると溝の幅に水が広がって行くのを確認しながら、川に沿って下流まで辿っていった。途中勾配がゆるくなるあたりからは流れのスピードはゆるくなったが止まることはなかった。家の前のひらけたあたりを過ぎ、木々の間を縫うように流れ、一番下流の少し太い溝までたどり着き、源流の側溝と反対側の側溝に流れ落ち、川は貫通した。

上流の勾配が比較的急なあたりに掘った時に出て来た石を積んでみたら、そこを水が流れ落ちる時にチョロチョロと明るい音が聞こえるようになった。妻は「せせらぎが聞こえるおうちになったね。」と言って喜んだ。



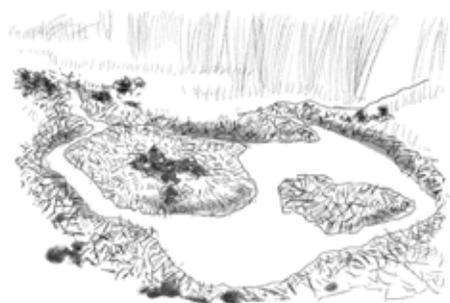
第四十七回 川と池を掘る(四)

次は池だ。これはどうすれば良いか結構悩んだ。一番心配したのは池がボウフラの楽園になってしまわないかということだ。ボウフラ対策にはメダカを飼うと良いと言われるが、適当に掘った池にメダカを放つと動物虐待にならないか。そもそも越冬できるような池にするにはどれだけ深くしなければならぬことか。いろいろ考えた末に、流れが常にある池をつくることにした。つまりそこだけ川幅を広く大きく曲がった川にして、その間をつなぐ水路もつくるのだ。そうすれば見かけは楕円形の池に中の島がある形になる。メインの広い川には石で堰をつくり池の水深が川より深くなるようにした。つなぐ方のサブの川にも堰をつくりある高さまで水が溜まったならそちらにも流れるようにした。増水時には調整池の役割も果たすのではないかと。

池のところは川よりも深く掘ることにしたが、そうすると急に石に当たる頻度が増して池のかたちができるまで二日かかってしまった。それでも川との境の土を切り崩すとどんどん水が流れ込み期待通りの池らしい姿になった。水面に目をやると池のように溜まっているけれど、流れがあることが確認できた。

川と池が完成してから数日たったら急に水量が減って来た。川下から川上に点検して歩くと、どうも側溝に設けた堰があまりうまくいっていないようで、多くの水がこれまでどおり側溝の方に流れているようだった。もし、側溝の水が増水した場合にそれが全て川に流れると氾濫して敷地が水浸しになってしまうかもしれないので、堰は側溝と川と両方に水が流れるようにしてあったのだが、その塩梅が難しい。それでも川が干上がってはもともとこもないので板を石で支えただけの堰を粘土も加えて水が漏れにくいようにしてみた。それと、そもそも側溝の水は常に水量が多いわけではなく落ち葉もたまり放題にしておくとしょこしょことした流れになってしまうのだ。今までは、それでも側溝が落ち葉で完全に埋まってしまわない限り問題はなかったのだが、これからは川のために落ち葉掃除が欠かせなくなってしまう。水を自分たちの役に立てようと身近なところに引き込むとそれだけ丁寧に面倒を見なければならぬということか。

そして、心配していた大雨もほどなくやってきた。川は掘った土を盛り上げた堤防のおかげで問題は無かったが、池が溢れてしまい中之島も水没してしまった。とは言ってもまわりに大きな影響を与えるほどではなくかえって植生の変化につながるかもしれないと思うことにした。ただ、水が引くまでの間、池の周りを歩くことができないのが不便だ。これまた家をつくった時の端材を見つくるって木道をつくることにした。木道と言っても板を引くだけなのだが、さすがに土に接する部分を少なくするために角材でかさ上げすることにした。さらにその角材を外かまどの火で焦がして腐りにくくするぐらいのことはしてみた。ついでに中之島に渡る小さな橋もつくってみた。この木道があれば池の周りが少々水没しても様子を見回ることができるし、水没していいときでもそれなりの景色をつくってくれた。



池ができれば次は植物か。池に合う植物を探していたら、お隣で増えて持て余しているクレソンを整理するとの情報をもらって、さっそくいただいてきた。急な話だったのでとりあえず、池の端に植え込んでみた。

でもやはり本命はスイレンだろう。さっそく庭木や野草を売っている園芸店に相談にいった。店のひとも庭の池はイメージできるが、原野に掘って作った池で育つスイレンとなるとあまり自信がなさそうだったが、少し小型のスイレンのヒツジグサならなんとかなるかもしれないとのことだった。ただ、水深は最低でも三十センチメートルはないと冬越できないのではないかと言われた。それも手に入るのは六月末になるという。がっかりした表情を読み取られたのかエンコウソウという黄色の花の咲く水辺を好む植物をおまけにくれた。

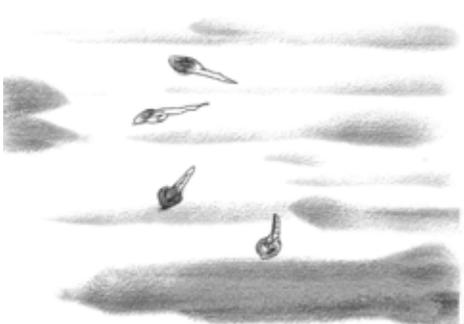
さっそくエンコウソウを岸辺に植たが、ヒツジグサを植えるのはそう簡単ではなかった。一旦通水した池を三十センチにヒツジグサを植える深さをプラスしたところまで掘り下げるのは容易ではない。まずは股まである長靴を調達し池に入ってみたが、足を入れて移動するたびに底の土がかき回され水がどんどん濁ってしまう。池の底にスコップを突き立ててもどこがどう掘れているのか確認ができない。それに大きな石に当たるとも一度ではない。ここは原始的試行錯誤ではなく、周到に計画して臨むべきだったと反省した。

六月末によくやく色の違う三種のヒツジグサの株を手に入れることができたが、店のひとが言うにはそのまま土に植えても浮力で株が浮いてくるので、石をくりくりつけるなど重りが必要だとのこと。これも通水前ならやりようがあったがさてどうするか。結局、ハンギングバスケットの網にシユロを敷き、そこに苗と土を入れ、最後に上に重しの石を乗せてバスケットごと沈めることにした。バスケットをつるすチェーンを持ち上げながら静かに目的とする場所に沈めると、これが意外とうまくいってなんとか池におさまってくれた。

川と池を掘った頃は一面茶色のモノトーンの世界だったが、五月になると水辺も淡い明るい緑色に変わってきた。そして六月に入ると早々にクレソンの白い花が咲き始めた。それを追うように六月の半ばにはおまけにもらったエンコウソウが黄色の花を咲かせた。こちらの春ははじめはあまり彩がないなかで、白い花と黄色い花が点々と咲く姿は心を和ませた。七月に入ると六月の末に植えたばかりのヒツジグサも負けじと花を咲かせた。

池の水も暖かくなってきて、アメンボウやミズスマシ、そして長いオールで泳ぎをするのマツモムシなど、水中昆虫の種類と数が一気に増えてきた。それにトンボも灰色のシオカラトンボや細身で鮮やかな青のイトトンボ、時には大型のオニヤンマまで池の水に惹きつけられてきた。

いち早く「石塚さんのいえに池ができたよ。」と生き物通信にのったのだろうか。八月に入るとオタマジャクシがいっぱいいるのに気が付いた。卵を見た記憶がないのだが、そもそも池をつくって数ヶ月でカエルが卵を産むなんて想像もしていなかったので見落としたのかもかもしれない。



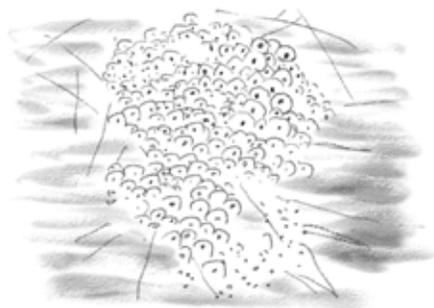
オタマジャクシの姿を見たその日から、オタマジャクシの成長を見るのが日課になった。まるで小学生の夏休みの成長間観察みたいだが、それを自然の状態で観察できるのは嬉しかった。最初に見てから十日もたったころオタマジャクシに足がでてきた。さらに十日後にはすっかりカエルらしい姿になってきた。そのころになると立派なカエルが姿を現すようになった。親ガエルが子どもの成長を見届けに来たのかなとも思ったが、大型と中型のカエルの二種いるのが気になった。

と、数日経つとあれだけいたオタマジャクシの姿がよくよく探さなければ見当たらなくなってしまった。急にカエルとして自立したとは思えない。あまり想像したくないが子どもは成長を見届けに来た親ガエルと思ったのは、単に腹を空かせたカエルだったのではないだろうか。ずっと成長観察を続けて来ただけになんともいえないエンディングだ。今になって振り返ると、オタマジャクシはこの小さな池でも常に過酷な生存競争に晒されていることがわかる。翌年の四月の初めに今度は立派なカエルの卵を見つけた。四月の半ばをすぎると卵の中心の黒い勾玉状のものがモゾモゾ動き始め、その数日後にはオタマジャクシとなり泳ぎ始めた。昨年のオタマジャクシより小さく別の種類のカエルなのかもしれない。今度は成長を見届けようと思ったが、それから数日したら姿が見えなくなってしまった。さらに次の年は、同じく四月の中旬に卵を見つけたが、それはオタマジャクシになったのを見ることなくいつの間にか消えてしまった。この三年間で一匹でも生き延びてカエルになり卵を産みにこの池に戻ってくるのができればと思ってしまう。

さて、話を川と池が完成した年に戻そう。夏の暑さがようやく収まって来た頃、池のまわりは草ぼうぼうの状態で何がはえているのかわからなくなっていた。そんなとき、池の水の中から細い葉をもたげているのが目に止まった。他とは違って少し肉厚の細い葉はガマのそれと思われた。もし、そうだとするとこの敷地から姿を消したのが、私が川と池を掘ったことよって蘇ったということになる。それも掘ってからわずか半年足らずのことだ。川上から種が流されて池に落ち着いたのか。それとも、じっと地下でまた環境が変わるまで身を潜めていたのか。いずれにしろその復元力には驚かされた。

そもそも川と池を掘ることを決めた大きな理由は、水辺が無くなったことによる植生の変化をもう一度再生し多様性のある場所にできないかということだった。それが自分たちの手でスイレンを植えたりなんだりしている間に、水で暮らす昆虫が集まって来て、水辺を産卵場所にするトンボやカエルも目ざとくやってきて、ついには姿の消えたガマがもどってきたのだ。それも半年という短い時間で。

粘土質の水はけの悪い土地だったこともあり、いわゆるガーデニングを自らやることには関心が無かったが、植物を植えるのではなく環境に若干手を加えることで生まれてくるランドスケープを楽しむことをできればと思った。



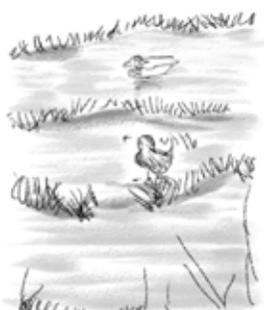
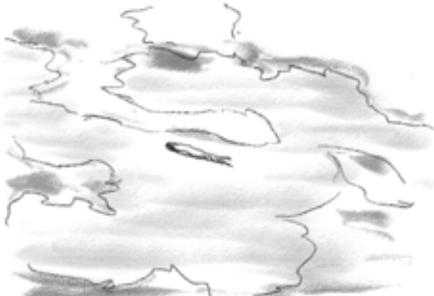
川と池ができて二年目の四月の末に大雨が降った。前の日から降り続いた雨は朝になってもまったく止む気配が無く、池は中之島も形を失い、大きさも二まわりも大きくなったかと思えた。氾濫の状況を確認しようと二階の窓から池を見ると、なんとそこには二羽のカモが巣しそうに泳いでいる。色姿からオスとメスであることがわかる。わたしたちの池にカモが。家の中から息を潜めて観察していると、カモたちは池から川を上流に泳ぎ始めた。時々、オスが水から上がり、メスが川を泳ぐのを見守ったりしている。ちょうど、家のまえの畑の脇を通り過ぎてしばらく行つたところでUターンして池に戻ってきた。確かに上流は細かに曲がりくねって勾配も急になるのでカモには泳ぎづらかったのだと思う。結局小一時間居た後、飛び立って行つた。

池を掘ってトンボやカエルがやって来たのはなんとなく想定範囲だったが、まさかカモまでやってくるとは。そもそもどうやって知つたのか。空から見てなのか、水の匂いを頼りにかそれはわからないが、小さな川と池と思つて居たが、自然界では立派な水辺として認識されたと言つて良いのではないかなんせ、カモはその時だけでなく十日後にもまたやって来たのだ。さすがに、ここに巣をつくる決断はしなかつたようだが、それでも大したことだ。

六月に入ると、池に黒いものが泳いでいるのが見えた。そのシュツとした姿はオタマジャクシではない。池の端の草に身を潜めて観察していると、それは紛れもなく魚だった。それも一尾だけでなく、少し大きめのが二尾、中くらいのが三尾そして小さいのが二尾と結構な数だ。それこそ上流から流れて来たのかもしれないが、ついに魚が放流もせず池を泳いでいるのを目にすることができたのだ。ただ、これもオタマジャクシの時のようにいつの間にか姿を見ることができなくなつてしまつた。

同じ六月の下旬には池の周りに地面を掘り返したような跡が見られた。明らかに獣の仕業と思われたが一体誰だろう。さつそくおもちやのような暗視カメラを手に入れてセツトしてみた。最初に日は何も写つていなかったの、少し場所を変えてセツトしてみたが、それでも成果はなかつた。やはりおもちやではダメかと思つた三日目、何かが写つていた。白黒動画でさらに気温が下がつてモヤのかかつたような画像だったが、尻尾の縞模様はアライグマと思われた。続けて同じ場所に翌日もセツトしてみたら、今度はモヤが発生していなくて鮮明な画像が記録されていた。

おもちやカメラなので生き物の温度を感知してから録画が始まるタイミンが遅く近づいてくるところは写つてなくて、突然、池の中之島に掛けた小さな橋からぬつと顔を出してこちらに近づき、それも二匹。いや、三匹、いや、四匹。つぎつぎと池の方から出て来て木道に濡れた足跡をつけていった。親とおぼしき大きいのがしきりにカメラの匂いを嗅いでいる。そのうち視界から消えたのだが、子供たちに手洗いを教えていたのか。アライグマは農家も困るやっかいものだが、その後は警戒して姿を見せなくなつた。



川と池を掘るといった手を加えることで、植生やそこに生きる昆虫や動物の様子が変わっていくのを直接目にするのができたのは興味深い体験だった。これからも何か少しずつ変わっていくのだろうが、それをできる範囲で記録しておきたくなった。そのためにはベースになる現状の地図が必要になる。それもどこにどのような木が生えているのかなど細かな情報がのっている地図があると良い。当然、それは自分でつくらなければならない。

敷地のことでわかっているのは、土地を購入するときにもらった測量図で敷地の四辺の距離と、建築確認申請に記載した建物の位置と大きさだけである。そこから木の一本一本の位置を調べて地図に書き込んでいく必要がある。いったい敷地に何本の木があるものか検討もつかない。それでも、調べたいという気持ちはかなり強かった。自分の敷地にどのような木が生えているのかも知らないでいるのは、何か情けない気がした。木の種類が細かくわかっていると、またこの土地の見え方もきつと変わってくると思われた。

さて、どこから手をつけようか。まずは、地図を書き込むおよそ畳半分の大さきの紙を用意し敷地の形と建物を描いてみた。次に、建物から近い比較的大きな木を目印として地図に落とすことにした。建物の端から木の方向と距離を測ってそれを地図に書き写すことを繰り返せば、いつかは地図が完成する。木の方向はスマホの方位磁石で北から何度と測ることができそうだ。問題は距離だ。ゴルフで使うデジタル機器でピンまでの距離とか障害になる木の高さなどが測れるものがありそれを使うことにした。ゴルフはまったくやらないのだが、仕事で建物の位置や高さを計る必要があったときに購入したものが役にたった。建物の両端から見える範囲の木を測ってはメモをして、それを地図に書き写す作業をしていたら、どうも実際の木の位置と地図上の木の位置が明らかに違うところがでてきた。方位磁石は水平に構えないと正確に方角を示さないの、で何度か同じ場所を計るとその都度ちよつとずつ違ってくる。これではだめだ。次に考えたのは、建物の両隅から木までの距離を測って、それを地図にコンパスで円で描くと、その二つの円が交わるところが木の位置になる。そうやって建物のまわりに目印になる木を増やしていけば、さらにその目印からの距離でその他の木の位置を地図に落とすことができる。これもやっているうちに変な場所に木があることになってきた。ゴルフ用のデジタル機器の精度に疑問を持ち同じ場所を何度も測ってみると都度、変な値が出てしまう。

ここはデジタルに頼らずアナログに行こうと決めて、伊能忠敬方式を試すことにした。伊能忠敬は距離を歩数で何歩あるかで測ったという。これなら怪しい道具を使わなくて良い。まず一步の歩幅を測って、そのあと十歩歩いて実際の距離を測ってみる。たったそれだけでもびつたり同じ値はでない。伊能達は同じ歩幅で歩く練習を何度も何度もしたそうだが私にはできるとは思えない。いったいどうして伊能忠敬は、あんなに正確な日本地図をつくる事ができたのか。ただただ敬服するだけだった。



最初からそうすればよかったのだが、ホームセンターに直行して五十メートルまで測れる巻き尺を買ってきた。これで二方向から木までの距離を測り地図に落としていくことにした。しかし、これもやってみると意外と大変なことがわかった。何も障害物がなければ簡単なんだが、木や草が巻き尺をまっすぐに伸ばすのを邪魔するのだ。その都度、後戻りしてできるだけまっすぐに伸ばせるルートを探して計ることになる。それでも、巻き尺は嘘をつかないという信頼感で作業は進んだ。それをまとめて地図に写そうとするとコンパスで描いた円だらけになってどの交点がプロットしたい木の位置なのかわからなくなってしまう紙はどんどん黒くなるばかり。これも最初からそうすればよかったのだが、パソコンの作図ソフトで作業することに変更した。

パソコンの作図ソフトを使うと円の補助線を色分けすることもできるし、補助線と木の位置の印を別の紙(レイヤー)に描いて重ねてみることもできるのだ。作業が格段にしやすくなった。木の位置を地図に落とす作業がかなり進んだ頃、東側から測っていた木と西側から測っていた木が、同じ木なのにずれていることがわかった。どの木を測り間違ったのか、測った誤差が塵も積もって大きくなってしまったのか。実際の木の見え方も参考にしながらチェックして修正を繰り返す作業にずいぶん時間をとってしまった。

どうにかこうにか木の位置を地図に落とし終わってからはまた大変だった。その木が何の木か一本一本調べなければならぬ。そのような知識はまったく無いも同然だったが、樹木図鑑を頼りに調べることにした。これにはずいぶん時間がかかった。なにせ、木の位置を測るのに都合が良いのは、まだ草丈が高くない雪解けの時期なのだが、その時には木に葉が無いのだ。図鑑には木の幹の肌の違いも書かれているが、とてもそれだけではわからない。目につく大きな木は四季をつうじてよく見ていたので、例えばハンノキは特徴的な雌花と雄花で特定できていた。また、ヤチダモはゴツゴツとした大きな冬芽でわかった。春一番にまだ葉が出る前に雄花が咲くバッコヤナギも大ぶりの花から区別がついた。ただ、それ以外の木々についてはせいぜい、紅葉する木があるな程度の認識で、葉の形や、花や実の姿について詳しく観察することがなかったのだ。なので、木の種類を特定するのは長期戦と構えることにした。

若葉が出る頃になると忙しくなる。原寸大の葉の写真で検索できる樹木図鑑を手に入れてそこらの木の葉と見比べてみたが、それでも「これだ」という確証が持てない。この図鑑は全国の樹木を対象にしているので、ここ北国の樹木まで細かくカバーされていないかったのだ。やはり「北海道」と明記した本でなくてはならない。それでも本に掲載されている写真から、これと同じものだと見分けるのは難しかった。むしろ一九二〇年からほぼ十年がかりで刊行された手書きの絵による樹木図鑑の方が、特徴を捉えて描かれている分、同定の手がかりとしては随分助けられた。そこには、木の様々な部位が季節を超えて描かれており、一枚の絵にその木の全てを捉えようとする意思が感じられた。



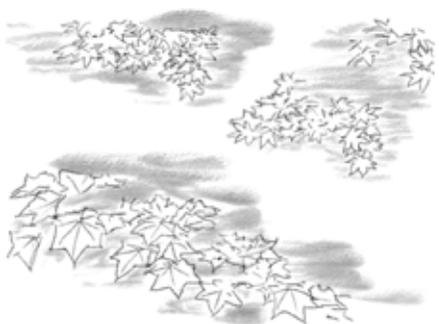
図鑑と見比べているうちに特徴的な葉の木は見分けがつくようになった。例えばミズナラとコナラ。どちらも楕円形で根元が少し細長くなっており、縁が大きくギザギザしていて他の木の葉と違いが良くわかる。やっかいだったのはミズナラとコナラの見分け方だった。最初、小さな葉の方がコナラと思っていたのだが、それは個体差で葉の根元に軸があるかどうかが決め手のようだ。ミズナラは軸がなくて枝からすぐ葉のギザギザが始まる。針葉樹も常緑だったのでトドマツかエゾマツということにした。その見分けは木肌の色と肌合いが決め手と考えた。そうやって見分けるポイントを自分のものにすると思える。

手のひら型の葉も他の葉とは見分けやすいのだが、それが何の木か同定するのは結構手間取った。手のひら型の葉はおおむねカエデ科だと思うのだが、それには何々モミジというのと何々カエデというのがいろいろあるのだ。モミジが指の股の切れ込みが深く、カエデは手のひらが立派と思っていると、指の切れ込みが深いハウチワカエデもあつたりする。それに個体差もありそうなので迷ってしまう。そもそも私には植物を見分ける観察力が無いのかとも思ってしまうが、日頃あまり注意して木や花を見てこなかったことで植物目が未熟なのだということにして、ひたすら観るように努めた。その結果、私なりに春先に咲く花が濃い赤色で葉が深く切れ込んでいるのをヤマモミジ、花が緑色で葉の切れ込みが浅く手のひらが立派なのをイタヤカエデとしてみた。中には微妙に違いそうなものもあるのだが、それはあとでもっと植物目が養われてから見分けることにした。

そんな感じで、とりあえず全樹木の同定が完了して図面に記録し終えたのが六月の頭だった。もつとじつくり一年を通して、紅葉の様子や実のなり方、木肌の様子など観察してから決めれば良いのだが、それは今後の楽しみとして一旦の樹木配置図の完成とした。いろいろ間違えはあると思うが、その時点で確認された樹木は三十一種類、三百二十三本。

最も本数が多かったのはトドマツで四十八本。これは、造成当時のことを知っているご近所さんの話だと造成に伴って植えられたもので、確かに道路ぎわに並木のように並んでいる。それに太い。次に多かったのがカワヤナギで三十八本。これは湿気の多いこの土地に適した樹種で造成後に生えてきたものと思われる。ヤナギもいろいろな種類があつて同定が難しかったが、その他にイヌコリヤナギ、バッコヤナギなどが確認できた。次に多かったのがコナラ、ミズナラとクリ。これらは、おそらくエゾリスが植樹したものだだろう。特にクリは日頃エゾリスが良く行き来する姿を見るあたりに点々と生えている。

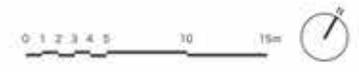
大木に育っているのはハンノキとヤチダモ。特にヤチダモは家の窓の正面に堂々と立っている。春先に葉が出てくるのが一番遅いのだが葉の茂り方は立派だ。樹木調べでわかったのだが、そのヤチダモの大木から南の方角に無数のヤチダモの小さな木が生えて小さな森ようになっていた。冬の間の北風で種を飛ばして子孫を残しているのだった。





凡例

01) トドマツ (トド)	●	26) シナノキ (シナ)	●
02) クリ (クリ)	●	27) ヤマグル (ヤマ)	●
03) シラカバ (シラ)	●	28) アキウシ (アキ)	●
04) ヤマキスミ (ヤマ)	●	30) ハギ (ハギ)	●
05) イナヤシエダ (イナ)	●	31) ノボク (ノボ)	●
06) ハウチワシエダ (ハウ)	●	32) ツツジ (ツツ)	●
07) ハンノキ (ハン)	●	33) ストローブマツ (スマ)	●
08) ヤチヂモ (ヤチ)	●	34) コシアツラ (アツ)	●
09) ハハヒレ (ハハ)	●	35)	○
10) ノコシ (ノコ)	●	36)	○
11) ヒメギ (ヒメ)	●	37)	○
12) カウヤナギ (カウ)	●		
13) イヌコリヤナギ (イヌ)	●		
14) ハクコヤナギ (ハク)	●		
15) キノエヤナギ (キノ)	●		
16) コブシ (コブ)	●	0A) ヤシキ (ヤシ)	●
17) スズ (スズ)	●	0B) フシゴクメ (フシ)	●
18) ツリハナ (ツリ)	●	0C) カラス (カラス)	●
19) ヤマヤナギ (ヤマ)	●	0D) フルヘリー (フル)	●
20) エリヤナギ (エリ)	●		
21) オウノキ (オウ)	●		
22) トチノキ (トチ)	●		
23) コナラ (コナ)	●		
24) ヒメナラ (ヒメ)	●		
25) イチイ (イチ)	●		



敷地内の樹木の位置を地図に落としてわかったことがいくつかある。まず驚いたのは私が敷地として認識していたのは全体の四分の三くらいだったことだ。ちょうど魚眼レンズで敷地を上から見たような感じで、家の周りが実際より広く見え周りはほとんど知らない世界だったのだ。調べたのは雪解け直後だったので敷地の隅々まで足を踏み入れることができたが、六月ごろになると、根曲がり竹が勢いを回復して視界も遮るし入るのも拒まれる。そのエリアが結構広いのだ。根曲がり竹を刈り取ってしまえば一段と敷地が広く感じるようになるのは確かだった。だが、樹木調査中にそこに鳥の巣があることがわかったのだ。確かに茂った根曲がり竹の方から鳥の鳴き声も聞かれる。敷地として認識していなかったところは鳥たちの生活で重要なところだったのだ。

もうひとつ、樹木の位置と樹種がわかったことで、季節がかわるごとに「あの木はどうなったかな」と見に行くことができるようになった。ただ木が生えていただけだとそのような気持ちにならなかったと思う。一年を通じていろいろな植物がどのように変化して行くのかを自分のペースで観察することができ。今まで考えたこともなかった贅沢だ。

最初に気になったのはバッコヤナギだ。これは前に触れたように雪解けすぐに葉が出ないうちに花を咲かせる。花といっても繭のような形に花が密集している。緑色をしたのと白い毛がふさふさしたのがあるので良く見て見ると二本の木が絡み合つてそれぞれ違う花をつけていることがわかった。図鑑によると雄の木と雌の木ようだ。白いふさふさした方は、時間が経つと先端が黄色になってきた。雄の木で花粉がしつかりできてきたのだ。雌の木の方はだんだん細長く大きくなって先の尖つたそれぞれの小さな花の形がはつきりわかるようになってきた。その頃になると黄色く一際目を引いていた雄の花は茶色く小さなくちやくちやくの塊になってしまう。雌の花は尖つた先が綿毛のようになりどンドンその数を増してきた。やがて綿毛は膨らみバラバラになり小さな種を抱えて風に飛ばされて一仕事を終えることになる。それが四月半ばから六月半ばにかけての出来事だった。

六月になってからはクリを観ることにした。クリは白い鎖状の花やイガグリは見たことがあるが、その間がどうなっているのか詳しくは知らなかった。白い花はいつ頃咲くのだろうと思っていたら、六月の半ばにはもう鎖状の蕾ができていた。このころはつやつやとした立派な葉に押されて目立たないのだ。やがて蕾が開くと良く見る白い鎖状の姿になる。たくさんのつぶつぶからイガのように無数のツノが出ているのだが、どれがあのかのクリの実になるのだろう。図鑑を見るとこれらは皆雄の花のようだ。ではどこに雌の花があるのか。それは鎖状の雄花の根元にできるのだ。全ての雄花の根元にできるわけではなさそうだが、良く見ると根元にふくつと一段と大きな塊がある。やがてそれがイガのようにトゲトゲした塊になってくるのだが、そこからさらに白いトゲトゲした花を咲かせるのだ。そして雄花は茶色く枯れて行く。



今更で恥ずかしいが、一本の木に雄花と雌花をつけるものと、雄の木と雌の木が別のものがあることは、銀杏のなるイチヨウとならないイチヨウがあるということでも薄々知っていたが、実際この目で詳しく観察したのは初めてで新鮮だった。私について言えば、植物について知っていることはほんの一部で本質的には知らないことだらけだ。

フキのこともそうだった。春、雪解けとともに家先に顔を出すフキの臺は味噌で和えると酒が進むんだなど悦にいつていても、そのフキの臺にも雄と雌があるのは知らなかった。確かに花が開いていない食べ頃のフキの臺の雄雌を見分けることはできないかもしれないが、食べられるのを逃れたものを観察しているとそのうち違いが見えて来る。外側を覆っていたものが開くと中からぎつしり蕾がつまつた鞠のようなものが見えて来るがどれも同じに見える。その蕾が開き始めると白くパツと花が咲くのと、先が濃い紫がかつた色の花が密集した状態のときに見分けがつくようになる。白いのが雄。紫のが雌。白い雄花が満開になる頃、雌花の丈が高くなり始める。やがて雌花は茶色く小さくなるが、雌花はほとんど丈が高くなり、花の形も白い綿毛の状態になってくる。かなり高くなつたところで種のついた綿毛を飛ばし始めるのだ。そのうち雄花も雌花も姿を消し大きなフキの葉に覆われるようになる。家の周りには大きく3つのフキのコロニーがあるが、そのうちの一つについて雄花と雌花の数を数えてみたが、若干、雄花が多かつた。そもそも私たちが雄花と雌花のどっちを多くフキ味噌や天ぷらにしたかわからないので、雌雄ほぼ同数としておこう。

あれだけ再生を期待して池まで掘つたガマについても何も知らなかつた。ガマの再生を確認した最初の年は葉だけで穂は見ることができなかつた。ようやく穂らしきものを見ることができたのは三年後だった。それもちよつと太い茎程度のもので、良く見ると先の方が少し長く膨らんでいるように見えなくはない。一週間ほど経つと穂のようなものの先が割れて濃い緑色のものが現れてきた。てつきりこれがガマの穂になると思つていた。確かにそれから二日後には茶色い色に変わつてきたのだが、どうも形が溶けたソフトクリームのように、あの立派なフランクフルト型とは程遠かつた。まだ株が未熟なのかなとも思つたが、さらに十日待つと溶けたソフトクリームは小さくなりその下の部分が太くなつてきた。色も緑と茶の混ざつた状態になり、テクスチャもあのマットな感じになつてきた。上部は雄花で下が雌花と思われる。きつと、これが成長し上部は徐々に消滅しあの見慣れたガマの穂になるのだ。そしてあるとき穂の一部がほころびそこから白い綿毛が爆発するように出てきて、あとは風や水の流れに託すのだ。

こんな感じで、見慣れていると思つているものでも知らないことばかり。ましてや、今まで馴染みのなかつたその他の多くの樹木については一年が未知の世界といつても良い。いつたいいつ花が咲くのか、どこに実がなるのかなど図鑑を頼りにひたすら観るしかない。

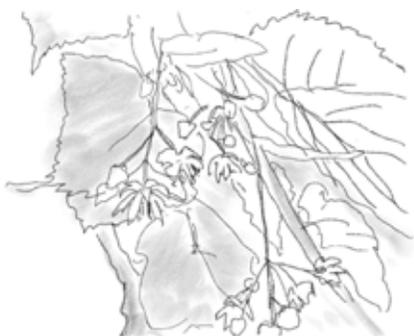


一年を通じて観察するのに最も変化を捉えやすいのが秋だと思っていた。今まで緑だった葉が黄や赤になる。でも、そのように色変するのは秋だけでないことがわかった。葉の形からイタヤカエデと思つて秋にはオレンジがかった黄色になるのを期待していたら、五月に緑の葉が赤くなり始めた。凶鑑で調べ直すとイタヤカエデの仲間のベニイタヤというのが春に若葉が赤くなるとあつた。花にも色変がある。最初は淡い色だがそれがだんだん濃くなつたり、その逆で濃いのが薄くなるというのは良くある。ところがズミという木の花は劇的な色変をする。春に蕾が膨らんで来ると鮮やかな赤色が目を引く。そして満開近くになると純白になるのだ。最初は違う種類の木かと思つたぐらいの変化を見せる。

花といえば、春になるとご近所ではソメイヨシノやエゾヤマザクラが満開になる。コブシの白も良く目を引く。でも、うちにはそのように目を楽しませる花が見当たらない。まあ、ご近所との間には特に塀などもなく良く見えるのでお花見には事欠かないのだが。樹木調べをしているうちに一輪だけ花をつけるコブシを見つけた。葉の形からしてコブシと思われる木も数本あつたが花は確認できなかった。木が密集して生えているところにあるので花をつけるには条件が悪いのかもしれない。サクラは葉が出る前に咲くと思ひ込んでいたが、ミヤマザクラはそうではなかつた。葉が茂つたあと、それもサクラの季節をすっかりすぎたあたりで、白い清楚な花を咲かせる。この木も敷地の奥に生えていたのでそれまで見落としていた。そのほかにも見落としていた花はいろいろあつた。シナノキもそのひとつだ。他の木に埋もれがちに生えていたのだが、ハート型の特徴のある葉だつたのでシナノキとわかつた。何度かその木の前を通るうちに茂つた葉の間から長めの軸が伸びその先が分かれて丸いものが見えているのを見つけた。しばらく観察し続けているとそれが蕾でやがて白い花が咲き始めた。遠目にはあまり目立たないが、近づいて観ると下向きに細い白い花弁が開いた姿は、ちょうど線香花火のようで可憐であつた。

秋の紅葉の季節は確かに風景が変わる。特に、ヤマモミジの紅色を太陽の光を透かして見るときは格別である。ただ、一年を通して見ると冬を前に全ての葉が落ちた後もすてがたい。樹種を特定するのに葉の形を観察していたので落ち葉からそこに生えている木を思い出すことができる。ここにミズナラの大木があつたこと、ここにシラカバが数本あつたこと、もちろんヤマモミジやイタヤカエデも半年のいろいろな変化を楽しませてくれたことと一緒に思い起こさせてくれる。

ややもすると植物のある瞬間を取り出し、それがその植物の姿と思ひ込みがちであつたが、そんな単純なものではなく日々刻々と変化を繰り返し、また、成長していく姿があり、その時間に寄り添うことができたのは得難い体験だつた。これも、色々苦労して敷地内の樹木を隅々まで調べたことで内在化という大げさだが、植物たちとの距離が縮まったおかげかと思う。



私たちが木々に囲まれた生活を始めたことを知った方々から、「今度遊びに行くよ」と声をかけていただくことが多くあった。ずいぶん遠方からKさんがわざわざそのためだけに訪ねてきてくれたのには恐縮した。どんな世捨て人のような暮らしをしているのか見にくられたのであれば期待はずれであったかもしれない。それでもいろいろな方から「羨ましい生活ですね。」と言っていただけたのは素直に嬉しかった。しかし、そんな時は長くは続かなかった。WHOがパンデミック宣言をして以降、お客様が来られることは途絶えてしまった。それでも我が家は千客万来。

まず最初に来られたのがキタキツネだ。時々、敷地内を歩き来しやすくするために草を刈ってススキや木屑を敷いてつくった園路をとことこと散歩している。キタキツネは寄生虫を媒介しエキノコックス症を引き起こすので親しくはできない。向こうも親しくする気はなさそうで、こちらの顔を見てもすぐに逃げ出すでもなく何事もなかったように悠然と立ち去るのである。ただ、夜中に鳴かれるとちよつと怖い。コンコンと鳴くと思ったら大違い。ギャーアーワーと大きな声で、まるで人間の大人が奇声をあげて叫んでいるようで事件性が高いのだ。

タヌキも数度いらした。一応、畑もあるのであまりお近づきになりたくないでお引き取りただこうと外に出たら、何を間違ったか縁側の下に潜り込んでしまった。姿は見えたので縁側に向かって一歩踏み出し圧をかけて見たが小さく丸まったままで動かない。少し可哀想だが冬だったので雪玉を投げつけて追い出すことにした。ところがそれでもピクリとも動かない。タヌキの「死んだふり」というのは本当で、それもかなり名優だ。諦めて家の中に戻って様子を見ていたが動き出した気配は無かった。このまま同居するのは勘弁して欲しかったが、しばらくして外に出て見ると姿が消えていた。さすがタヌキ。

隣人は庭をエゾシカが横切ったことがあると言っていたが、我が家の敷地には来られていない。・・・のはずだ。敷地のほとんどは夜は真っ暗闇になるのでどんなお客さんが来られているのか検討がつかない。数年前は家から百メートルも離れていないところでえヒグマの目撃情報があつてニュースになっていた。知らぬが仏である。それでも雪の積もった冬は足跡からどんなお客さんが来られていたのかある程度わかる。良くウサギの足跡は見るがお会いしたことはなく失礼している。

結構フレンドリーなのはエゾリスだ。最初の冬に明け方寝室の窓のあたりで物音がするので目を覚ましたら、縁側に積んだ薪の上にちよこんと座ってこちらを見ているエゾリスと目があつた。エゾリスは三角形の耳の上に長い毛があるのがなんとも可愛いのだが、仕草はどちらかというとおっさん臭い。股を開き加減にちよこちよこ動く姿はステテコがお似合いだ。ただ、全速力で敷地を横切る時は別人のように素早く、手足を胴と一直線になるように伸ばして地上すれすれを飛ぶように移動する。雪に残された足跡からも飛ぶ姿がわかる。

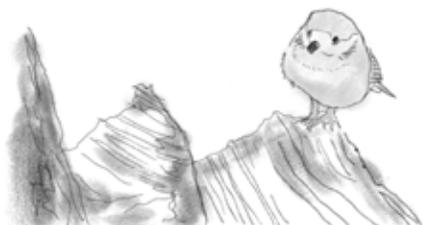
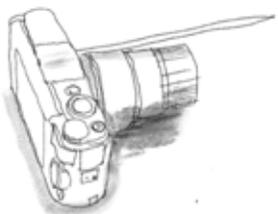


そんなお客さんたちのなかで、最も親しくしていただいているのが鳥たちだ。春分の日がすぎてどんどん日が長くなるとたいへんだ。明け方といっても日の出の一時前ぐらいから鳥たちが一斉に鳴き出す。日の出の前の時間には、市民薄明という時間と、航海薄明という時間があるそうだ。市民薄明は灯などなくても歩ける明るさで、航海薄明は闇夜に水平線が浮かび上がる程度の明るさということだ。鳥たちは市民薄明など待っていられずに航海薄明の頃から鳴き出すのがある。なので、竹山で夜更かしするのは控えるようにしている。鳥たちが一斉に鳴き出すのを鳥のコーラスとも言ったりするようだが、どちらかというとコンサート開演前のオーケストラのチューニングみたいで、それぞれのペースで鳴いている感じだ。良く聞くのはシジュウカラやヒヨドリであるが、オオルリやクロツグミが鳴くと思わず聞き惚れてしまう。

鳥は朝だけでなく、昼も夜もメンバーを変えてやってくるが、朝来るお客さんにはまいてしまうことがある。やはり寝室の窓際でコトコト音がするので見て見ると胸がオレンジ色のヤマガラが積んだ薪の上にチヨコンと止まっていて、しきりに小首をかしげてこちらを見ているのだ。「まだ、起きないんですか。もう明るくなってきましたよ。」そして「大丈夫ですか。息してますか。」と言っているかどうかはわからないが、どこか、心配そうな表情で小首をかしげてこちらの様子を伺っているのだ。これには本当にまいてしまう。

いったいどのくらいの種類の鳥たちが我が家を訪れてくるのか、サインまでのもらえないが記念撮影をすることにした。動物写真家の使うバズーカレンズは重そうだったし一眼レフで揃えると高いので、超望遠コンデジで済ますことにした。文字通りコンパクトなのに望遠力がすごく、月のクレーターもくっきり写る。さっそく来訪記念撮影にトライしたが、痛恨の選択ミスをしたのに気が付いた。このカメラにはファインダーが無かったのだ。大きめのディスプレイがついているのだが、それを頼りに飛んでいる鳥を画面に捉えるのは至難だし、仮に木に止まっても枝や葉の間にいる鳥を探し出すのは苦勞する。そこで、焼き鳥などに使う竹串をカメラの上部にレンズの向けている方向にテープで止めてみた。これがあると竹串をターゲットに向けることで瞬時に画面に収めることができるのだ。

そうやって記念撮影に応じてくれたのは、トビ、オジロワシ、オオジシギ、アオサギ、カケス、マガモ、キジバト、シメ、ヒヨドリ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、アオジ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ハシブトガラ、アカハラ、ツグミ、ウソ、クロツグミ、メジロ、ミヤマホオジロ、ホオジロ、モズ、オオルリ、カワラヒワ、キセキレイ、アトリ、そしてシマエナガ。みなさん撮影にご協力いただきありがとうございました。中には撮影は遠慮したいという方もいる。良くいらっしやるのに声だけのウグイス。畑づくりには欠かせないカッコー、奇怪な声で驚かせるアオバト、夜更かしのフクロウの誰か。あと、上空を通り過ぎるだけのハクチョウのみなさんかな。





悩ましいのは、お客様のおもてなしだ。ここに暮らし始めた当初から鳥たちの来訪は楽しみな時間だったが、おもてなしはしないようにしようと妻と話していた。餌をあげることで人の手に依存してしまいはしないか。そうなる私たちが死んだ後、生きていくのが大変にならないかということを実剣に話していた。ところが最初の冬の正月二日に窓の外を見ると、木にリンゴがなっているではないか。同じ仲間とはいえずミの木にリンゴができるはずがない。妻の仕業だ。あれだけおもてなしはしないでおこうと言っていた本人が、ヒヨドリ可愛さに負けてしまったようだ。もともとは自然豊かな環境に暮らして苦労しながらも食べ物には恵まれていたのが、人が木を切り造成して住み始めたことで食べ物が減ってきた。その分をおかえししなければ。それに、近所は皆餌台を置いたり脂身を吊るしたりしているのに、うちだけ我慢しても意味がない。というのが理屈のようだ。一週間後には窓の前に小さな箱が置いてあってヒマワリのタネが入っていた。当然、ヒヨドリはやってくるし、シジュウカラやアカゲラ、ゴジュウカラなどの小鳥が次々とやってくる。早朝に窓際にやってきていた鳥も、最初は「もう起きませんか。大丈夫ですか。」と言っていたのが、小首をかしげて「ご飯はまだですか。」と言うようになってしまった。翌年には、あり合わせの木材で立派な餌台もできてしまった。作ったのは私だが。餌台は木の枝を使ったりできるだけ自然の状態に近づけてみた。例えば、アカゲラなどのキツツキの仲間が脂身が好きなようだが、少し太い木の枝に横から穴を空けてそこに脂身を詰めるようにしてみた。キツツキが木に穴を空けて中にいる虫を食べるのに近くしたのだ。とは言っても自己満足的免罪符にすぎないのだけれど。ただ、ひとつだけ絶対守るルールを妻と決めた。それは、雪が解けて土が出てきたら餌台は仕舞うということだ。

鳥さんたちが来てくれるのにはもう一つ悩みがあった。鳥の子供達が飛び始めるころになると、中には窓を知らずに激突してしまうのがある。バードストライクだ。窓のガラス面は角度によっては良く外の風景を反射して鏡のようになることがある。そこにあたかも広い空間が広がって森につながっているように見えてしまうのだ。幸い、我が家に激突した鳥たちは脳震盪を起こしてしばらくじっとしていることはあっても、そのうち飛び立っていつてくれた。ただ、隣人たちの話を聞くと、毎年のように亡くなる鳥がいるという。これは、明らかに後から家を建てて危険な状態をつくった私たちの責任なのだが、いろいろ調べても有効な対策が見つからなかった。良くタカなどの小鳥の天敵のシルエットをシールにして窓に貼るのを売っているが、効果は薄いみたいだ。

風車をたくさん作って窓の前に置いてみたり、蛍光色のテープをたらしてみたり、いろいろ試したが我が家の見かけが悪くなるばかりで効果はなかった。あるとき窓の西日対策に簾をつけてみたら、内側からの眺めもそう悪く無かった。そして鳥たちががぶつかっても簾がクッションになって大ごとにはならない。なので我が家は冬も簾がかけっぱなしの変な家になっている。



妻がある時から奇声を発するようになった。「キツキツ、キツキツ」と大きな声で、それもどこか彼方に目を泳がせながら何度も「キツキツ、キツキツ」と。これはまずいと動揺したが、本人はどうやらアカゲラと会話をしたがっているようだ。それ自体も怪しい行動なのだが、その気持ちもわからなくは無かった。妻はアカゲラにも名前をつけていた。「ぼんちゃん」という。名前の由来はアカゲラが飛ぶ時の姿で、始終羽ばたいているのではなくバタバタと数回羽ばたいた後は羽をたたくように進むのだ。その姿を言葉で表すと「ぼーん、ぼーん」と飛んでいるように言うのだ。それでも毎回同じアカゲラが来るわけではなく、頭のとっぺんが赤い雄と、黒いままの雌がいるし、明らかに体格が違うのも来る。でもそれはみな「ぼんちゃん」で、雄のぼんちゃん、大きなぼんちゃん、で済ませている。まあ、それはそれで良いのだけれど、それだけ思い入れたうえ、季節を問わず家のすぐ近くまで来てくれるとなると、話してみたくなる。どうもこちらも洗脳されたのか、妻が「キツキツ、キツキツ」と言うと、ぼんちゃんも「キツキツ、キツキツ」と返してくるように聞こえる。何を言っているのか妻に聞くと「脂身はまだですか。」だと。まあ、それは確かかもしれない。

それから妻はアカゲラについていろいろ知りたくなって図書館でいろいろな本を借りて来た。その中の一冊を差し出して「これ見て」と言われたのが、アカゲラの舌の図解だった。アカゲラは頭を激しく振って尖った嘴で木に穴を空けるのだが、それで脳を痛めることもあるようだ。それだけ必死に穴を空けた後、中にいる虫を食べるのだが、そのために特殊な舌を持っているのだ。舌の先は釣り針の返しのようにフックできるように曲がっていて、その舌を長く木の穴に差し込んで虫を食べるのだそうだ。その長く舌を出すための機構として長い舌を鼻から後頭部をぐるっと回るように収納しているのだ。確かに、アカゲラが脂身を取り出すところをアップの動画で写したことがあるが、それはまるで爬虫類の舌だった。アカゲラは「きもかわいい」のだ。

妻の話し相手はアカゲラだけではなく、ヒヨドリもそうだ。ただ、ヒヨドリの鳴き声は「ギーツ」とか「ヒーツ」なので、さすがに大声で会話するのははばかられるようだ。ヒヨドリはなんとやっているのか聞いてみると「リングはまだですか。」だと言う。同じじゃ無いか。まあ、それ以上に高等な会話をする必要が無いのかもしれないが、ヒヨドリといえば、東京などの大都市でも始終良く見かけるが、もともとは森と平地を季節ごとに行き来していたようだ。それが一九七〇年頃をさかいに年中まちなかにいるようになったようだ。なぜそうなったかには諸説あるようだが、餌に不自由しないし、人は天敵にはならなかったからという説がある。竹山で見られるヒヨドリも通年で見られるので同じように生態が変わってしまったているのかもしれない。ただ、東京の都心での鳴き方は非常に強く威嚇的に「ギャーッギャーッ」鳴きあっていたが、ここではストレスが少ないのか会話的な鳴き方をしてるように感じる。



鳥たちは自分の好みのお立ち台を持っていて、そこでよく鳴く。歌の名手のオオルリやクロツグミは敷地の中でも一、二の高さのミズナラのでっぺんがお気に入りようだ。そこからよく通る声で歌うのはさぞかし気持ちが良いと思う。一方、歌はお世辞にもうまいといえないが、しきりに鳴くのが好きなヒヨドリは、何を思ったか我が家のテレビのアンテナをお立ち台として選んだ。声からしてパンク系を自認しているのか。そういえば、アカゲラは木を「コンコンコン」とテンポよくつつくドラミングを得意としてるが、なかにはお隣の金属電柱を甲高い音で叩くのが好きなのがいる。若い鳥たちの間ではニューウェーブが生まれているのかもしれない。アンテナをお立ち台としたヒヨドリは見上げて聞いていた妻にウンチを落とす。かなり破壊系のような。思いつきり声をあげると腹に力が入るのか歌の途中でウンチをする鳥はヒヨドリだけではなく結構いる。おかげでアンテナの下の玄関階段の隙間から桑の木が生えて来て慌てて広いところに移植した。

鳥たちはどんな歌を歌っているのだろうか。鳥には言語があるという最近の研究もあるみたいだが、それだけでなく鳥たちには何か歌の美学があるような気もする。わかりやすいのはウグイスだ。例の「ホーホケキョ」なのだが、春先の若鳥にはそううまく鳴けないのがある。妻は「フォトビジョン」と鳴いているというのだが、まさかと思つて聞いていると、そう聞こえなくも無い。「ホー」のところのタメがうまくできないのだ。でも、何度なんども鳴いているうちにだんだん上手くなってくる。難しいのは後半だ。「ケキョケキョケキョケキョ」と、よく息が続くと思うぐらい長く鳴く。ただ、そのうち「ケキョ・…ケ、ケキョ」と不安定になってくる。歌の最後をどのように終われば良いのか迷っているうちにわからなくなってしまう。そんな感じに聞こえる。これが名手になると「ケキョケキョケキョケキョ」を長く弱まりもせず一気に歌い上げるのだ。歌の先生がいるのか、皆練習を重ねて上手くなっていく。

鳥たちがよく鳴くのは早朝で、その一斉に鳴き出す様は「朝のコーラス」として知られているか、夕方もよく鳴く。ただ、聞いていると朝と夕方ではニュアンスが違うような気がする。朝は力がみなぎって希望に満ちた鳴き方だ。朝からナンパに精を出しているのだとは思うが、暗闇が空けまた新たな一日が始まる喜びを高らかに歌い上げていると思つてみたくなる。一方、夕方はクロツグミのの歌を聞いていると、吟遊詩人のように今日一日の出来事を振り返り、音に乗せ語っているように思える。「あんな楽しい思いもした、こんな危ないこともあった、でも、良い一日だったね」と。そう、私たちも良い一日だったよ。

春に鳴き声を聞くとホッとする鳥がいる。オオジシギだ。遠くオーストラリアあたりからノーストップで飛んでくる渡り鳥で、途中、嵐に巻き込まれて命を落とすものも少なく無いようだ。「ギ、ギ、ギ、ギ」と鳴きながら大空高く舞い上がり、一転急降下する。その時の翼の風切り音が「バババババ」と凄まじい。孤独な長旅を経てパートナーを探す姿にどこか哀愁を感じる。



鳥たちをよく観察できるのは冬だ。木々の葉が枯れて落ちるので鳥が丸見えになる。それに餌台で寄せているので間近まで来ることになる。餌台は三つ用意している。野鳥に餌をやるのはどうのこうのと言っていたのに三つもかと言われそうだが、それには私たちがなりの理由がある。家の近くまで良く来るのはヒヨドリと、シジュウカラなどの小型の鳥と、アカゲラなどのキツツキだ。それぞれに体格も違うし好みも違う。ヒヨドリにはリンゴなどの果物、シジュウカラたちにはヒマワリやアワなどの粒餌、アカゲラなどには脂身と、それぞれ毎に餌台を別にし、互いの距離も保つことで余計な争いを起こさないように考えた。また、台の構造も横枝に止まるタイプと幹に止まるタイプというようにそれぞれの鳥の足の構造に合わせて工夫してみた。

最初は、餌のやり過ぎは良く無いと、少しだけあげるようにした。そうするとシジュウカラやハシブトガラやゴジュウカラなどは餌台の周辺の木に一旦止まり、それから餌台に来るのだが、ほとんど一斉に来ることはない。誰か一羽が餌台に行つて餌を啜えて枝に戻るのを、他の鳥は待っていたのだ。そして、順番に餌台に行つて平和な食事の時間で終わるのだ。これは一回だけのことではなく良く見られた。雪が深く寒さも厳しくなつて、つい、いつもより多めに餌を入れてみた。皆喜ぶだろうなと思つたら、今まで大人しく譲り合つて順番に餌台に行つていたのが、一斉に来て、互いに相手を牽制し時には攻撃的に威嚇して沢山の餌を独り占めしようとし出したのだ。偶然いろいろなることが重なつてそういう行動になつたのかもしれないが、何か考えさせられる出来事だつた。食べるものが少ないと分かち合い、不自由ないほど食べるものがあるとなれば独り占めしたくなる。そう見えないこともない。

餌台を三種にして距離を離れたのは一定の効果があつたようで、互いに他の餌台に行くことはなかった。ところが、そこにカケスが登場すると状況は一変した。カケスは数羽でグループをつくつて行動するのを良く目にする。体格も一段と良い。私たちはそれを「カケス三兄弟」と呼んでいたが血縁のほどはわからない。彼らはどの餌台も御構い無しに食べ散らかす。そして、ある程度食べ終わつても餌台に居座り、他の小鳥たちが近づこうとすると威嚇して追い払う。この餌台は我々もものだと言わんばかりの態度だ。

餌台を守ろうという気持ちはヒヨドリも同じだが、態度はぜんぜん違う。リンゴの餌台の近くの枝に止まつてじつと餌台を見守っているが、小鳥がリンゴに近づいても飛んで行つて追い払うまではしない。ただ、羽がプルプル震えているので嫌がっているのは間違いないさそうだ。ただただ餌台の近くから離れずにじつとしている。それも冷たい雪がふりつけようがじつと耐えている。不慣れな感じのするやつだ。

そんな冬のある日、外出から帰つて玄関先まで来たら、突然、ゴジュウカラがまっしぐらに私の方に飛んで来て、頭の上に止まつて肩に降りこちらを見るではないか。餌もないのに。少し鳥の気持ちに近づけているのだろうか。



秋が深まってくると急に忙しくなる。長い長い冬に備えて冬支度をしなければならぬのだ。まずは、薪ストーブの薪を木熊を解体して玄関の脇の軒下とか縁側に積み直す必要がある。我が家が一冬で使う薪の量は、あくまで補助暖房と調理用なので四立方メートルほどになる。薪の重さは木の種類や乾燥状態によって違ってくるがおおよそ一立方メートル当たり六百キログラムとすると、二・四トンになる。それをネコという一輪車の台車に積んでは移動して積み直すのだ。単純な作業の繰り返しだが、「今年の冬はどんな冬になるのかな。寒い冬になるという予報もあるので少し多めに高く積んでおくかな。」とか、「今年買った角食用のパン型を使って薪ストーブで焼いてみよう。」とか思いながら一本一本薪を積むのは、そう苦にならない。

冬囲いもこちらではきちんとしておかないと雪で枝が折れてしまう。それに野ネズミに樹皮を丸裸にされて枯れてしまわないように対策もしなければならぬ。去年は厚いシートで根元を包みそれを地面に沿って広げて杭で固定してネズミが侵入できなくしてみたが、結果的にあっけなく突破されてしまった。今年は、どんな対策をとるかそろそろ考えておかなければならない。頼りにしているMさんもネズミとアライグマにはお手上げだと言っている。罠を仕掛けて捕獲するのが確実だとのことだが、捕獲したあとどうするのか。あの可愛らしい顔を見てしまったらなかなか決断はできない。薬剤の入った餌を使うというのもあるが、他の動物が口にしてしまわないかと悩ましい。そのうち、ネズミの方で根負けしてくれば良いのだがそんなことはあるまい。

あとは、大きな外テーブルの片付けがある。一応作る時に分解できるようにしてあるのだが、とにかく大きくて重い。去年は横着してそのままの状態を冬を越せないかと思ったが、神様は甘やかしてはくれなくて過去最大の積雪をプレゼントしてくれた。おかげで、テーブルが雪の重みで歪んできてしまったので、掘り出して片付けざるを得なかった。かえって暑く積もって凍りついてしまった雪を掻き出すだけで余計な苦勞をすることになってしまった。今年はちゃんと分解して縁側に積んでおかなければならない。

それに、この時期にぼうぼうと生えて枯れたススキを刈って敷地内の園路に敷いておくと、雪解けの際に園路の位置がわかりやすくて春の作業がしやすくなる。これも園路の総延長が二百メートル以上になるので相当な作業になる。大きなブルーシートを広げ、そこに刈ったススキをできるだけ多く積み上げてシートで包み、えいやつと頭の上に担ぎ上げて園路の先に運び徐々に敷いて行く作業を繰り返す。これを何度も繰り返すのだが、薪の時のように先々の楽しみが思い浮かばないので結構な苦行となる。

こんな感じで冬が近くなるとやる事が多くある。一応、健康管理のために体脂肪なども測れる体重計でチェックしているのだが、秋が一番シェープアップされる。ついで、外仕事が再開される春、そして雪かきの冬の順になる。リバウンドするのは夏だ。暑くて外作業は最小限になってしまう。



もうひとつ冬になる前にやっておかねばならない重要なことに、鳥たちの餌台の設置があった。雪解けと同時に餌台は一旦片付けるといふルールを設けたので、この季節立て直さなければならぬ。だいたい一冬たつと支柱の木も土と接する部分が腐れてくるので、新しい太めの枝を探してきて取り替えなければならぬ。それにアカゲラなどのキツツキ用の脂身棒は冬中突かれ続け無残な状態になってしまうのだ。まあ、これもおもてなしの準備と思うと楽しい作業のひとつだ。

秋の深まりと同時に、景色も徐々に茶色のモノトーンに変わってくる。春も茶色のモノトーンの世界になるが、気分的にはずいぶん違う。春は、モノトーンの中にぼちぼちと緑の点が見え始め、あるときからぐぐぐと群落ごとに緑の塊を成してくる。一方、秋はそれまで青々としていた葉の色が茶色になり色が抜けていく。そして草花などは徐々に丈が低くなり。やがて黒い斑点が浮き上がりそして溶けるように姿を消して行く。生のベクトルと死のベクトルの違いがそこにはある。ただ、歳のせいか、徐々に弱くなる光のなか植物たちが土に還っていく時間は美しく心の落ち着くものがある。

茶色い色も薄れていきすつかりモノトーンの世界に変わる頃、空の雲の様子が変わってくる。心なしか薄くはかなげな刷毛で掃いたような雲になる。そうになると、はらはらと白い雪が舞い降りてくる。こちらでは、その前兆に「雪虫」と呼ばれる小さな虫が飛び始める。お尻に白い綿毛をつけた虫が空中を漂う姿は雪に例えるのに相応しい。そして不思議なことに雪虫を見てから数日経つと本当の雪が舞い始める。最初は、白いものが地上に降り立つと自然に消えていってしまい。雪が止んだあとは何もなかったかのようになる。それを何度か繰り返しているうちに気温も低くなり地上の雪が溶けなくなってくる。それが春まで続くと「根雪」と言われる。だから後になってみないとそれが根雪かどうかは判定できないのだが、北国では口々に「これは、もう、根雪だね。」と自然に言い合う。それは、ほとんど外れることはない。

雪が降り始めると除雪の準備をしなければならない。ここには市の除雪車が来ないのだ。ただ、ありがたいことに住民同士で除雪組合をつくと除雪費用の一部を補助をしていただけ。町内会のお仲間の農家のKさんが大型の除雪車を持っているのでその補助金で除雪をお願いしている。除雪していただけるのは基本的に道路で私たちの車を停めているところから玄関までは自分たちで除雪しなければならない。これはあたりまえのことなのだが、量がちよつと多い。原因は住宅プランの誤りにあり私のせいだ。私は建物敷地が南東隅に限られることがわかってからアプローチは敷地の北西隅からと決めていた。来客は北西隅に車を止めそこから木々や草花の間を縫うように踏み分け道のような通路を進むと視界が開け遠くに建物が見える。それが我が家だ。そんな妄想を最後まで持ち続けて建物ができてしまったので、駐車スペースから玄関には行くには建物の周りを半周しなければならない。その除雪面積は七十五㎡。

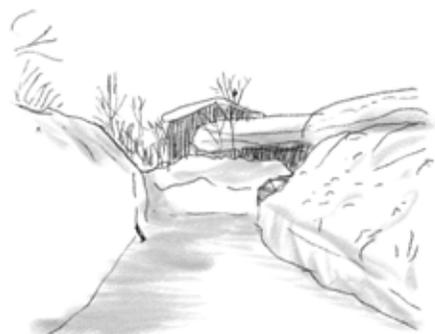
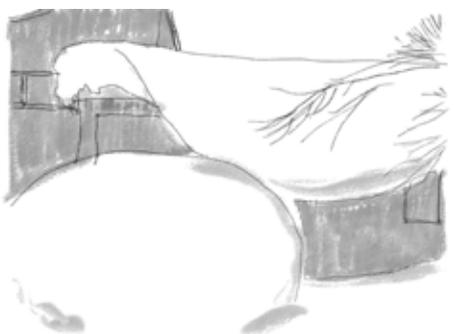


ここに降る雪は気温が低いせいもありパウダースノーなのだ。さらさらとした雪で、雪かきスコップですくって投げ上げると雪がぱあつと広がり消えていくように見える。一般的に雪の重さは、新雪では五十〜百五十kg/m³といわれるが、こちらの雪は一番軽い五十kg/m³程度であろうか。それでも十センチメートルほど積もると除雪しなければならぬ雪の量は、七十五m²×0・一mで七・五m³になる。重さにすると三百七十五kgにもなる。そしてこの量の除雪はかなり頻繁にある。

昨年の冬は雪が少ないまま年を越したのだが二月の下旬になってから大雪になってしまった。二日降り続きその間に降った雪は九十五センチメートルになった。ここから一番近い気象庁の観測ポイントでは最高記録だったそうだ。この時期の雪はかなり水分を含んでいてパウダースノーから程遠い。しっかりと固まっているのでスコップで四角い塊を切り出してそれを積み上げるようにして除雪する。おそらく新雪であっても重量的にはこしまり雪だと百五十kg/m³にはなるのではないか。九十五センチメートル降った時の除雪の量は七十五m²×0・九五mで約七十m³になる。その重さはなんと約十トン。そんな大雪が断続的に続き、除雪したところの両側に積み上がる雪壁はどんどん高くなっていく。二月の下旬には私の背丈を軽く越してしまった。

除雪は手作業でやっている。できるだけ機械に頼らず自分の手でできる範囲という考えを除雪まで当てはめる必要はないのだが、まず、除雪機は結構高い。それに置く場所も玄関の近くに確保する必要がある。なんとなく面倒だなと考えているうちにどんどん雪が降り、成り行きで手作業となっている。当然、ご近所は立派な除雪機を持っている。朝早くから除雪機のドドドドという力強い音がして、雪山越しに雪が高く跳ねあげられるのが見える。さすがに大雪が続いた時には気持ちが悪かったが、話を聞いてみると両隣とも除雪機が雪に負けて故障してしまったそう。湿った雪が除雪機の中にへばりついて雪を飛ばす歯を回すベルトが切れてしまったそう。そうなるとう修理に時間がかかる。それに動いても人の背丈を超える雪山の上まで雪をはねあげるほどの馬力がなく、雪山の壁に当たって足元に落ちてしまうのだそう。こうなると確実なのは人力ということか。おかげでかなりの筋トレになった。

そういう面倒はあるが、やはり雪は美しい。雪が降った早朝に外に出ると昇りかけた朝日を雪の小さな結晶が反射し、そこかしこキラキラと輝いて見える。雪の粒の大きさは気象条件によって様々であるが、時にびっくりするよう大きなサイズの雪になることがある。それは雪の粒というより雪の結晶がつながって羽のようになったもので、スローモーションで見るとゆっくりゆっくり舞い落ちてくる。まるで天上の天使たちが神たちが留守の間に枕を投げ合っていて遊んでいるようだ。雪に落ちる影も深い青みを帯びているし、雪の断面も光の加減で鮮やかな青に見える時がある。雪と風が作り出す雪の造形も優れた彫刻家に迫るものがある。



北海道の春は遅く、だが一気に来ると言われる。確かに、雪解けの茶色の世界がみるみる淡い緑色でおおわれ、やがてその間に鮮やかな黄や白や赤い色が混じり始める五月は北国に春が来たと言うふうにふさわしい。

ただ、ここで暮らしていると春はもつと早くからやってきていると思うところがある。例えばフキノトウだ。まだ雪がうっすら残っているところにグツと顔を出す。あの独特の味と香りも合わせて春の訪れを感じさせる。ところが、よく観察しているとあのフキノトウの姿はすでに晩秋に見られるのだ。その時にはすでにフキノトウの形になっていて、そのあと深い深い雪の下に埋もれながらじいっと雪解けを待っているのだ。そういえば木々も冬芽のかたちで春を待っている。冬芽は春になって枝や葉や花になるものが硬い鱗のような殻のなかにギュッとつまっている。その状態で厳しい冬の間じっと時が来るのを待っているのだ。空気中の水分が氷の結晶となって冬芽にまとわりついているのを目にすると早く暖かい日差しが来るように応援したくなる。

冬の間の太陽は、どんよりとした雲に覆われることが多いこともあるが、夏のあの生気は消え失せ、弱々しく感じられる。そんな冬の太陽に力が戻って来たと感じるのは二月である。これはまったく感覚的なものだが、妻もそういう。そもそも、北国のここでは十二月、一月と朝七時になっても陽は登って来ないし、夕方四時半を待たずに陽は沈んでしまう。それが、二月になると日の出は六時台になり、二月の半ばには日の入りも五時過ぎになる。そこから日照時間もぐんぐん長くなる。太陽が南に来た時の角度も冬至の頃は二十四度台だったのが二月になると三十度まで高くなる。この南中の時の太陽高度は冬至前後の角度の上昇は鈍く、二月前後頃からぐんぐん上昇し始める。そんなこともあって二月になると太陽が戻って来たという感覚になるのかもしれない。それに気のせいか、その頃になると鳥たちの鳴き声も力強くなる。長い冬から抜けて春が始まったと感じるのは私たちも鳥たちも二月からということだ。それだから二月の湿った雪の除雪も耐えられるのかもしれない。

我が家のメインの屋根は非常に緩い勾配にしてあるので、冬の間、ほぼ屋根に雪は積もったままになる。それが三月の半ばにもなると厚く積もった屋根の雪も徐々に落ち始め、太陽の熱も加わりどんどん少なくなってくる。三月下旬になると、敷地の雪原にところどころ窪みが見られるようになる。最も早く見られるのは南向きの斜面の木の根元だ。太陽の光を浴びた木の体温が木の周りの雪を溶かすのだ。それから平坦なところにも大きな窪みが現れる。池や川の場合だ。冬の間、池の表面は氷に覆われ、その上に厚く雪が積もっているのだが、深く掘ったところは下に水が残っている。そこに、徐々に解けた雪が水となつて川に集まり流れをつくってくる。そうなると表面を覆っていた氷も解け、その上の雪も他より早いスピードで解けてくるのだ。この頃になると、やることも除雪から、雪解け前にやっておかなければならない作業が変わってくる。冬の間には雪で折れてしまった枝の整理だ。



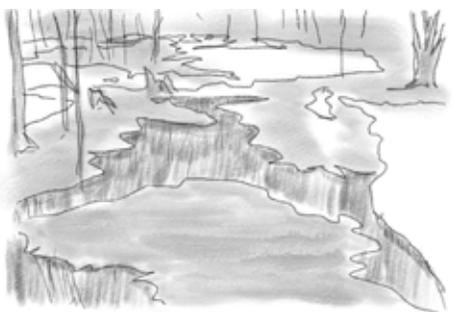
これまでは雪で折れてしまった枝はそのままにしておいて、雪が解けてから気が向いたら拾って集めて焚き付けにしていた。それで問題にならない量だったのだが、昨年の大雪でかなり太い枝も裂けるように折れてしまい、量も相当になつてしまった。これを雪解けを待つてから運んで集めるのは枯れ草に枝が絡んだり、雪解け水でぬかるんだ土に足を取られて大変になる。やるとしたらまだ雪のあるうちにするのが良いのだ。

雪の上を歩くのにはスノーシューを使う。ここに移り住むきつかけを作つてくれた隣人から、竹山移住記念にプレゼントしてくれたスノーシューであるが、これまで冬の野山の散歩の道具と思ひ込んで出番があまりなかったのだが、この時を待つていたように冬の外作業に必須の道具だということを再認識させてくれた。歩き慣れないと雪に先端を取られたりして不自由なのだが、慣れてくると補助ストックなしで移動できるようになつてきた。両手が自由になると折れてしまった枝を鋸で切ることできるし、両手に抱えて運ぶこともできる。行動範囲も広くなつた。普段は根曲がり竹が行く手を阻んでいたところも雪の上だと自由に行き来できる。これまで行つたことのなかつた敷地の端まで行けるのはこの時期がベストだ。

雪の重みで折れた枝は、太いのは二十センチメートルほどもあり、大小集めてくるとちよつとしたポリウムになつてしまった。とりあえず、家の近くに積み上げたのだが、雪解けになるとそこは、川であつたりレイズドベットの畑だつたりするのでそのまま放置するわけにはいかない。まずは用途別に分類するところからだ。太い枝は薪にする。比較的長さのある小枝は束ねて土留めなどに使える「粗朶(そだ)」にする。それ以外の小枝は細かく砕いて園路に敷く材料にする。この分類作業は結構時間がかかるのだが、これをしておかないと最後の作業が終わるまで雑然とした状態のままになつてしまう。外作業は結構何日もかかるものが多いのだが、その一日一日で一定の始末がつくように作業をして行くのが重要だと思つている。

ようやく枝の整理が終わつたのは、久しぶりの土が雪の下から出て来るころになつた。そうなつたら、薪にするとして集めておいた枝をさらに、チェーンソーで切るもの、鋸で切るもの、鉋で切るものに分けて、それぞれの作業をしていかなければならない。それも目処がつく頃には別の作業が待つている。フキノトウなどの山菜の収穫だ。フキノトウにしる根曲がり竹の小さなタケノコにしても、ちよつと目を離すと大きくなりすぎてしまう。敷地のあちこち目星をつけているところを毎朝巡回するのだ。

敷地の中の雪は最後ひとつの小さな塊になつてやがて完全に消える。それはだいたい四月の上、中旬になる。ここで暮らし始めてからの完全雪解けの日で一番早かつたのが四月七日だ。そして一番遅かつたのが四月の十九日。大雪だつた今年だ。それに合わせるように自動車の冬用タイヤを夏用に変えるタイヤ交換がやってくる。

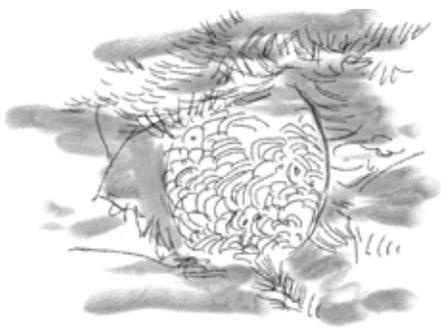
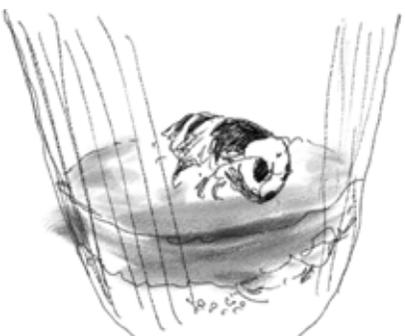


その頃になると、鳥たちの声で季節が変わったことを実感させられる。代表的なのはウグイスの初鳴きだ。これが毎年だいたい同じに日に鳴き始めるのが不思議だ。例えば二〇一九年は四月十三日、翌二十年は四月十六日、二十二年は四月十五日という具合だ。逆に四月二十三日まで鳴かなかった二十三年は、何か自然界に異変があったのかと心配になってしまいうくらいだ。同じ頃、その声を聞くとホッとするのがオオジシギだ。前にも書いたようにオオジシギは遠くオーストラリアからノーストップで渡ってくる鳥で、無事に渡りを終えることができなかったのも少なく無いと言う。オオジシギもほぼ同じ頃にやってくる。最も早かったのが二〇一九年の四月十五日で、最も遅かったのが二〇一八年の四月二十六日だった。オオジシギは鳴き声もそうだが、独特の金属的な翼の風切り音を聞くと、「長旅お疲れ様でした。ここでゆつくりしていいね。」と労いたくなる。

そうなると。エゾエンゴサクの黄色い花や、コブシの白い花、そしてエゾヤマザクラなどの春を代表する花々の出番になる。まちなかにいた時は、それらの花々を目にすると春が来たと感じていたが、ここ竹山にいと春はもつと早くからスタートしていて、その間は、人も生き物もまた一年を過ごすための準備をしつかりするための時間として大切にしなければならぬと感じる。

準備といえば、この時期大切なのはスズメバチトラップの設置だ。この頃になるとスズメバチの女王が目覚め、巣をつくり始めるのだ。一人で巣をつくりそこに卵を産み育て成虫になると、力を合わせて巣を大きくしどんどん卵を産み育てる。それを繰り返し返して両手で抱えるほどの大きな巣ができあがる。スズメバチはミツバチなどを襲い幼虫のためのタンパク質を集めるようだ。人間もタンパク質であるが、食料として襲うことはない。ただ、間違つて巣に近づいたりスズメバチにとって脅威になる存在と見なされたら刺される。ご近所のOさんも草刈りなど畑仕事をしていて刺されアナフィラキシー症状が出て救急車のお世話になったと言う。ちようど、ここで定住を決めた年の春に家の軒裏に小さな徳利型の巣をつくられてしまった。まだ、女王バチが一人で巣作りしている段階だったので、すぐに刺される事態にはならないと思われたが、そのままにしていると巨大なスズメバチ集団を形成してしまうので、駆除することにした。駆除するにはホームセンターで売られているスズメバチのイラストが大きく描かれた専用の強力殺虫剤を使うのだが、相手も必死だろうから逆襲を恐れ駆除業者をお願いした。

業者に頼むとそれなりのお金がかかるので、それ以降、Mさんに教えてもらったハチトラップを五、六ヶ所設置することにしてている。大型のペットボトルにハチが入る穴を開けて中に特別なカクテルを入れるのだ。レシピは極甘口の日本酒二に対して酢と砂糖を各一混ぜる。それをペットボトルに深さ七、ハチセンチメートル程度入れて、怪しそうなところに吊るすだけ。ただ、自分たちがよく通るところは避けないと呼び寄せるだけになる。



本格的な春が来るとさらに忙しくなる。畑の準備が始まるのだ。畑といっても前にも書いたようにささやかなもののだが、老人二人にはそれなりに大変なのだ。まず土なのだが、毎年少しずつMさんに土を分けてもらって畑に足しているのだが、それでも軽のダンブ二杯分くらいはいつも持つて来てくれるので、それを土置き場まで一輪車で運び、必要に応じて畑などに使わせてもらっている。それに、落ち葉でつくった腐葉土や、妻が頑張つて土間でお世話しているダンボールコンポストの堆肥、それに秋のうちに刈つて集めておいたそのらの草、それに必要に応じて石灰や肥料を土地と混ぜてなじませておかなければならない。二人とも素人なので、図書館で本を借りてきてはいろいろ試してみる。妻が借りてきた本が「ぐうたら農法」みたいなタイトルで良い選択眼をしている。

今年は何を植えようかと考えるのは楽しい。あれこれ植えてみたくなるのだが実際にうまく育つて日々使えるものは限られる。それでも、少しずつではあるが二十種類ぐらいは毎年育てている。ハーブの類は宿根のものが多いため毎年植えるものはさらに少ない。種から育てる計画性はあまりないので、大半は苗を買ってくる。近郊の農家では一株五十円とか格安で売ってくれるところがあったりするのでなおさら苗に頼ることになる。それぞれの植物に適した土や水はけの状態、気温や地温などあるようだが、まだ、そこまで気を配って育てるレベルにはなっていないので、私たちに買われた苗は可哀想かもしれないのだが。

先に春の兆しは二月頃からと書いたが、野菜の苗を植えるのはもつと気温が高くなってからでなければならぬ。そのタイミングが今だに良くわからない。地温を高く保つのにマルチという黒いビニールで土を覆う方法があるが、私たちは農家ではないので、毎年、沢山のビニールをゴミとして廃棄するには抵抗があり今のところ使っていない。そのかわり大量に生えているススキを細かく切つて土の上にかけるといふことなどしているが、若葉が大好きな虫の良い寝ぐらになつたりして効果があるのか無いかわからない。ここ北国ではカッターが鳴くと豆や苗を植えるタイミングと言われているらしいが、ここに来てからの記録を見返すと五月の十九日が一回、二十日が二回、二十四日が二回とだいたい同じ頃に鳴いている。不思議なものだ。

そんな素人の畑仕事も一段落する六月の中旬になると、いろいろな草花の花が顔を出し始める。六月の下旬になると、敷地は新しい緑に覆われるので、外かまどが活躍し始める。枯れ草が目立つ内は火気厳禁なのだ。枯れ草に火がついた時の燃え広がる勢いは凄まじいそうで、そんなことになったら大変である。外かまどの出番はこの春の時期と秋に限られる。あの暑い夏にかまどの温度を三、四百度に上げるために、炎天下に薪の燃える輻射熱を浴び続けるのは苦行に等しい。七月に入るやいなや、暑いと感じる日がやってくる。北国にも夏が訪れる。

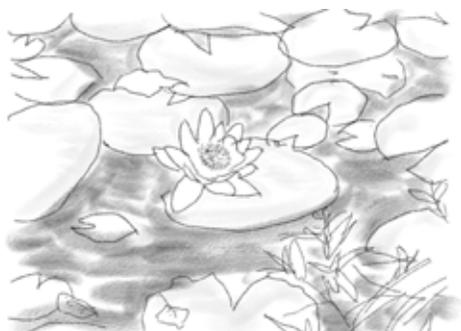


七月になって夏が来た実感するのは、お隣のご主人が釣ってくる天然の鮎だ。そう、私たちが竹山に住むのを後押ししたあの鮎だ。ご主人は相当、腕が良いようで坊主だった年は無い。それどころか七月に何度もあの香りをいただけるのだからありがたいことだ。今年は、大雨で型の良い鮎が相当流れ、かろうじて止まった鮎も食料になる藻が強い流れで剥がされ育ちが悪いとぼやいておられたが、それでもきちんと釣果を上げて来られた。近年の記録的な大雨は多大な被害をもたらしているが、生き物の生態にも影響が出ているのかもしれない。

夏になると色とりどりの花が咲き始めるのだが、特に嬉しいのは自分で掘った池に植えたスイレンの花が咲くのが見られることだ。スイレンは最初の年に植えた小型のスイレンのヒツジグサの他に、Mさんが庭じまいを頼まれた家から救出して来た大型のスイレンも仲間に入れていただき、大小、白、クリーム、赤、オレンジなど色とりどりのスイレンの花の共演が見られる。スイレンは早朝は蕾の状態だが、それから数時間の間に花が開き立派な姿になる。じいっと見ていると徐々に開いて来ているのが見えるような気がするぐらいだ。それが夕方が近づいてくるとあつという間に閉じてしまう。同じ花が三日と咲いていないのではないだろうか。

七月は子供たちと会える月でもある。早朝に近くの道を車で走っていると大きな鹿が現れ、その後ろには小さな鹿の姿も見えた。母子だったと思われる。親鹿はじつとこちらを見て私たちが通り過ぎるのを確認し、子供を促しながら道を渡って行った。母子といえば、前にも書いたが我が家の池を手洗いの練習の場に使ったアライグマの家族を見たのも七月だった。

親がつきつきりで面倒を見れば良いのだが、そうはいかない子供たちもいる。おそらく鳥たちがそうではないかと思う。妻は良くアカゲラが親子で来ていて、ヒヨドリが兄弟で来ているというが、そう思い込んでいただけで見分けているわけではなさそうだ。むしろ一人で木々の間を自由に飛び回るようになった喜びを爆発させているような危なっかしい子供の方が気になる。その飛び方は車を手に入れたティーンエージャーのようで、「どうだ、俺こんな飛び方できるんだぜー」と言っているようだ。そして、案の定、家の窓に激突する。ドンと鈍い音が聞こえるたびに妻と顔を見合わせ、急いで外に出て窓の周りを確認する。幸いにして姿を見ることはほとんど稀なのだが、窓ガラスに一枚羽根が残っていたりすると心が痛む。それでも数回、鳥の姿を見ることがあった。少し体を動かしているので大事にはなっていないことがわかるのだが、それでもすぐには飛び立てないでしばしばーっとしている。そのうち首を傾けてみたり羽を少し動かしてみたりして、少々きこちなく羽ばたき近くの木に移動する。またそこでしばらく体調が回復するのを待ってそれから飛び去るのだ。その間は見守るしか無い。そのようなことも大小の窓に簾を垂らしてからは無くなり少し安らかに七月を迎えられるようになった。



第七十一回 春から夏そして秋 (三)

八月になると合唱の季節になる。セミとカエルだ。セミは実はもっと早く五月頃に鳴き始めるエゾハルゼミというのがいる。ミイキンと長めに引っ張って鳴くのが特徴で夏のアブラゼミほど騒がしくない。私たちにはアブラゼミは気象予報士のような存在で、朝は涼しいなと思っただけでもジージジジと一斉に鳴き始めると、ほどなく強烈な暑さがやってくる。という気がしている。カエルも春先にゲロゲロとドスの聞いた声で鳴くのもいるが、夏のはもう少し軽くゲコゲコと鳴く。彼らも気象予報士で、ゲコゲコとくるとほどなく雨が振り始める。ような気がする。

畑の収穫もこの頃が盛りになる。食卓もそれに合わせて豊かになる。朝はサングラをつっかけて自家製のヨーグルトに添えるイチゴとブルーベリーを採ってくる。朝早く収穫したものは水々しい。それにミントを加えると目も美味しくなる。フェネルも意外と合う。朝採ってくるのは他にトマトとバジルがある。たつぷりのオリーブオイルにニンニクを刻んで入れてオリーブの香りとニンニクの香りが立ち始めたらたつぷりの刻んだトマトを加えると乳化してとりとする。それに昨夜の冷やご飯を加えてリゾット風に。最後に刻んだバジルを加えると完璧だ。新じゃがもこの季節。皮が柔らかいので茹でてそのまま食べる。と土の香りがする。キュウリも取り立ては包丁を入れると水がしたたる。キュウりを生のまま食べるとその水気で心なしか体がひんやりする。ナス、インゲン、カボチャなど、毎日、畑をのぞいて今日の料理を思い浮かべることが出来るのはこの季節の楽しみだ。そして、ご近所からのお裾分けの野菜が急に増えるのもこの頃だ。

八月はススキなどが背丈より高くなり、敷地のなかに確保した園路も草を掻き分けて行かなければならなくなる。なので、この頃の敷地の変化は意外と見落としている可能性がある。それでもはいろいろな植物がタネを蒔く準備に入るのはわかる。タネを蒔くタイミングは春から秋までそれぞれが他との競合を避けるようにバラバラなのだが、この頃、準備に入るのはススキやガマやアブラガヤが目立つ。単純に背が高いから園路を歩かなくてもわかるとうだけなのだが。ススキはうつつすら紫色をした穂がで始める。それが九月になれば綿毛をつけて白い穂になりいやが上にも秋を演出するのだ。ガマも独特の深い茶色の穂が目立つのだが、やがてそれもほころびができてそこから綿毛のついたタネを飛ばす様になる。アブラガヤは先端に茶色の穂をつける。その茶色い色と名前からして穂をすりつぶすと油が取れそうに思うが残念ながらそうでは無いようだ。背が高くて目立つといえばセイタカアワダチソウもそうだ。ただ、この頃はまだ蕾ができた頃で黄色い花が目立ち始めるのはもう少し先になる。

暑い日が続く夏バテ気味になるのだが、それでも、畑の向こうに青々と広がる草はらにススキの紫色やアブラガヤの茶色が刷毛で引いた様に浮かび始める景色をみていると、確実に季節は秋に向かって変わりつつあることがわかる。



九月に入ると秋のキノコの季節になる。我が家の敷地で収穫できるのは限られているが、それでもタマゴタケ、ヤナギタケなどは毎年、食卓に季節を運んでくれる。ただ、キノコはタイムリングを逃すとナメクジに先に食べられてしまう。この頃になると散歩と称して先手を打って目星をつけた場所や木を見て歩くのが日課になる。キノコが大好きなのはナメクジだけでは無い。スーパーで売っている栽培したキノコはそのまま調理できるが、自然に生えたキノコはしばしば水につけておく必要がある。そうするとキノコのヒダの奥から小さな虫がうじゃうじゃ出てくる。これを見ると一瞬、食欲が後退するが酒のあてのことを思うと見なかつた気持ちになる。この頃になると、いろいろ気をかけていただいているMさんも、どこからか採って来たヒラタケやタモギタケなどをどっさり持って来てくれる。それも夕方に突然電話が掛かってきて「石塚さんヒラタケ食べないかい。」と言って持って来てくれる。この突然のプレゼントはいつも嬉しい。

この頃にはノギクが咲き始める。ノギクは大きなコロニーをつくっているのが花畑のようになる。花の色も白が多いが、鮮やかな紫色や赤色も混じって賑やかだ。ノギクに負けじとセイタカアワダチソウも黄色の花が開き始める。ハンゴンソウも同じく少し大きめの黄色の花を咲かせる。セイタカアワダチソウもハンゴンソウもコロニーをつくっているが、園路の両側に陣取っていて競い合って咲いている。

九月といえば竹山神社祭が行われる月だ。第三日曜日と決まっっていて町内の人たちで境内を掃除し、お参りをする。昔は人出も多かったと聞くが、今は十数人程度が参加する程度だ。お参りし、その後、地区の会館に集まり小宴を催す。小宴といってもここ数年はコロナ禍でお茶とお菓子程度で済ませているが、それでも互いに近況をのんびり語り合う時間は貴重だ。集まるのはほとんど七、八十代なので、元気な顔を見れるのも嬉しい。最近の話題は、夏の暑さと秋の大雨のことで、今まであまりこんなことがなかったという。

十月、十一月と周りの景色もどんどん変わってくる。ヤチダモは、うちの敷地の中では葉を茂らせるのが一番遅いが、黄色に色づき落葉し始めるのも早い。この頃の空はパツと抜けたような青空が広がり大きく見える。十月も中旬になるとグツと冷え込む日もある。そんな朝は土間の薪ストーブに火をつけて湯を沸かしコーヒーを入れる。暖かいコーヒーが喉を通り過ぎお腹に収まる感覚を楽しみながらオレンジ色の炎を見ているのは気持ち落ち着く。冷え込む日に合わせて木々も紅色や黄色に一気に変わってくる。秋の澄んだ日差しを逆光に透かして見るヤマモミジの紅色は心までしみてくる。イタヤカエデも黄色も加わりそれらが道を埋め尽くす景色は絵に描いたようだ。

紅色や黄色の落ち葉に見とれてばかりはいられない。また今年も冬を迎える準備を始めなければならぬ。初雪は年によってかなり差がある。ここに来て一番早かったのが十月二十一日で最も遅かったのは十一月二十三日だった。



季節の変化が鮮やかと言われることもある北国でも、ここ竹山での一年を振り返ってみると、春夏秋冬という一年の区切れ目があるというより、連続する変化の流れの中でいつの間にか春になり、夏になりしているような気がしてくる。特に植物たちは、常に一歩先を意識しながら今すべきことをひとつひとつ律義に行なっている。それが一年の大きなサイクルをつくっているのだ。

そんな植物たちについて、これまで触れてこなかったものも紹介したい。といつても何度も白状しているように、植物についてはまったく音痴で、特に草花は皆目ダメだったのだから偉そうに「紹介する」というより、こんな草花があったんだという私の驚きにおつきあいいただくことになるのだが。

町内のお宅をは拝見すると家の前に色とりどりの草花が綺麗に植えられている。それに比べ我が家は草ぼうぼうで一見放置された空き地に見えなくはない。それは、敷地の大きさからきちんとした庭をつくるのは体力的にいっても無理があるし、何度も触れているが園芸種などが育つ土や水はけが期待できない土地なのだ。それをよく知っているMさんは、どこからかフタリシズカ、ニリンソウ、ユキザサ、ヤマシヤクヤク、フウチソウ、コケモモ、シラタマノキ、宿根のヒマワリなどを「これ植えない」と持って来てくれる。それらが我が家に彩りを添えてくれているのだが、それ以外にも勝手にやってきて自分の居場所をつくっているのがある。いわゆる雑草というやつだ。

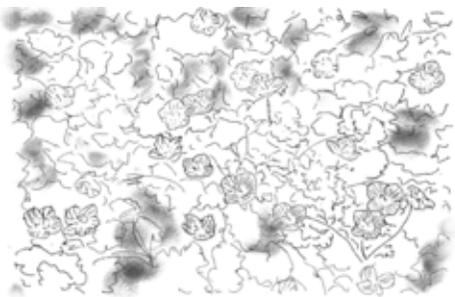
「雑草という名の草はない。」という牧野富太郎の言葉は有名だが、雑草という草は無いわけではなさそうだ。なんせ日本雑草学会という歴史のある学会がある。もちろん雑草それぞれに名前はあるのだが、雑草という類型が学問的に認められているのだ。では、雑踏とは何を指すのか。これはどうも歯切れが悪そうだ。アメリカの雑草学会では「望まないところに生える植物」をさげているようだが、望むか望まないかは主観的な問題で同じ植物でも雑草になったりならなかったりしてしまう。わたしたちの敷地で言えば植物が生えるのが望まない場所は特にないので雑草は無いことになる。別の定義では「絶えず攪乱される極めて不安定な環境に生活する一群の植物」というのがあるようだ。田畑の草刈りをしてまた出てくる植物などが思い浮かぶ。さらに「絶えず外的な干渉や生存地の破壊が加えられていないとその生活が成立、存続できないような一群の植物」というかなりマゾな定義もあるようだ。過酷な環境では育たない植物というのはわかるが、その逆はいったいどういうことを言っているのか興味深い。

私たちの敷地でいえば家を立てるために大量の碎石を積んだところがある。駐車スペースや通路として使っているので極めて植物には不向きな環境である。仮に花を植えようとしてもそのままでは育たないところなので、ちよつとした花壇をつくった時も五十センチメートルくらい掘って土を入れなければならなかった。それがなぜか、数年経った今はいろいろな草花を見ることができ。それを雑草と言わせていただければ紹介したいものがある。



碎石だらけの駐車スペースで目につくのに地面を這うように広がり小さな白い花が咲く草がある。それが何かを見分けられる知識が無いのはもう何度も書いたことだ。「北海道の野の花」という図鑑を買って調べようとするのだがなんせ千百三十二種も収録されているので、そこから目的の草を探し出すのは至難の技だ。少しでも知識があれば何々に似ているということから絞り込むことができるのだろうが、それができないので一ページ目から順に探してくしか無い。大概は途中で挫折する。運が良く似たようなものに出会ったとしても、その前後には同じく似たような草が並んでいてなかなか特定できずに終わってしまう。私より妻の方が圧倒的に草花の名前を知っているのだが、いちいち聞くのも気がひけるといふより聞いてふむふむとわかったような気になっても明日には忘れていく。そんな時に出会ったのがスマホのソフトで、写真を撮ると瞬時に名前を教えてくれるという優れたものだ。ソフトが特定した草花の名前を図鑑で再確認するのだが、最初のころはご愛嬌のような間違えが結構あった。それがAIを活用しているとのことなのでだんだん精度が上がって最近ではピタリと当ててくる。このソフトを頼りに腰を屈めて碎石の中から顔を出している草花をパシャパシャしながら見て歩くのは私でも楽しめる。

そのソフトによると先ほどの小さな白い花が咲く草はゲンノシヨウコという名前のようなのだ。ゲンノシヨウコは「現の証拠」と書くらしい。これは何かの事件と関係があるのかと図書館からまとめ借りをしてきた雑草図鑑六冊を頼りに調べると、薬用に用いられる草で、すぐ効き目が現れるということからその名がついたとある。それがどうして現の証拠なのか今ひとつピンとこないのだがまあそういうことのようなのだ。おなじように地を這うように広がる草を見つけた。こちらは小さな黄色の丸いかたまりの周りに白い花びらのようなものが五枚ついていて可憐な趣だ。さっそくソフトに聞いてみるとなんとハキダメギクという名前だという。漢字にすると「掃溜菊」。図鑑を総合すると大正時代に渡来した帰化植物で花の黄色の丸いかたまりはそれ自体小さな花の集まりだという。そのせいか繁殖力が旺盛で一年で三、四世代まで子孫を広げるようだ。それにしても掃溜菊とはかわいそうなネーミングだ。図鑑によるとこの名前をつけたのは牧野富太郎だとある。牧野といえば「雑草という名の草はない。」という言葉を残し、その言葉が教育界などで個性尊重の代名詞のように使われているのだが、その人がゴミ捨て場に生えているのを見つけてつけた名前が掃溜菊では、名前がなかった方が良かったのではと思ってしまう。この牧野先生、ネーミングには独特のセンスがあるようで、我が家の畑の端っこに生えている春先に青い花を咲かせるのがあるが、それはオオイヌノフグリだと言う。ヨーロッパ原産の帰化植物だが、在来種はイヌノフグリと言いつつ牧野先生のネーミングだそう。これはふくつとした実が二個つくのだが、それを見て犬のタマタマに似ているということで名付けたと言うことだ。これも美しい青色の花からするととつと別のネーミングにしてあげて欲しかった。



雑草の名前は牧野流だけではなく変な名前のもいろいろある。我が家の駐車スペースでよく目にする黄色の小さな花を咲かせているのはコメツブウマゴヤシという。コメツブは小さいという意味か。ヒメなになにという名前もよくあるがこれも小さいという意味のようだ。ウマゴヤシは馬が食べて肥えるということの名前にされたようだ。ヘクソカズラという名前をもらったのもいる。葉や実を揉むと臭いからといって屁と糞を重ねなくても良いものを。幸いうちの敷地では目にしていない。同じく目にしていないがその名前のインパクトに気持ち持たせていかれているのにママコノシリヌグイというのがある。スペード型の葉に小さな花が集まって咲く姿からは名前がイメージできないのだが、図鑑によると茎にトゲがたくさん生えていて痛いことから「この草で継子の尻を拭いたらさぞかし痛がるだろう」ということでつけられた名前とある。その説が本当たししたらなんとおぞましいネーミングであることか。昔話には継子いじめ譚というジャンルがあるようなので、その流れだったのか。

名前だけからするとあまり出会いたくないものが続いたので、うちで見られるめでたい名前のもも紹介しよう。家の周りの園路の際で細長い茎に黄色の小さな花を点々とつけているのはキンミズヒキというようだ。紅白の水引に似ていることからミズヒキと名付けられたものに似ていて黄色の花をつけることから頭に金をつけてもらったのだ。金とくれば銀ということでギンランも。敷地斜面の日陰に白いぷくつとした花を茎の周りに沢山つける可憐な感じの花だ。これは雑草というより山野草のグループというべきか。

雑草は本来植物が生存しにくいところで他の植物との競争を逃れるという独自の生存戦略で子孫をつなぐものという定義にもどって碎石だらけの駐車スペースをもう一度見てみよう。さつきは地面を這うように探していたが、そんなことをしなくても堂々と自己主張しているのがいくつもある。代表格はビロードモウズイカ。これも変な名前だが、全体が白い毛で覆われて手触りがビロードそのものなのだが、モウズイカはイカのような形をしているからではなく毛蕊花と書いて毛深い雄しべの意味だそうだ。春先は大きい葉をべたつと地面に広げた姿なのだがいつの間にか立派な茎が伸びその丈は私の身長より高くなる。黄色い花を茎にびっしりつけるので良く目につく。明治期に観賞用に導入され野草化したそうだが、文明開化にふさわしい新奇な植物として取り入れられたが、やはり日本人の感性に馴染めず野に放たれたということか。もうひとつモンスター系をあげるとすればヨウシュヤマゴボウか。やはり明治期に北アメリカからやってきたようで、ヨウシュは洋種の意味であちら産ということだ。背丈はやはり私と同じくらいになる。花は緑色の粒状の雌しべの周りを雄しべが囲んだだけで花弁はなくそれが房状になる。やがて緑色の実になり熟すと黒紫色になるので見かけブドウのようなのだが、図鑑には食べてはいけなくとある。有毒なのだ。密やかに地を這うものから。でんと異様な姿を見せるモンスターまで野草の世界も多様で興味深い。

